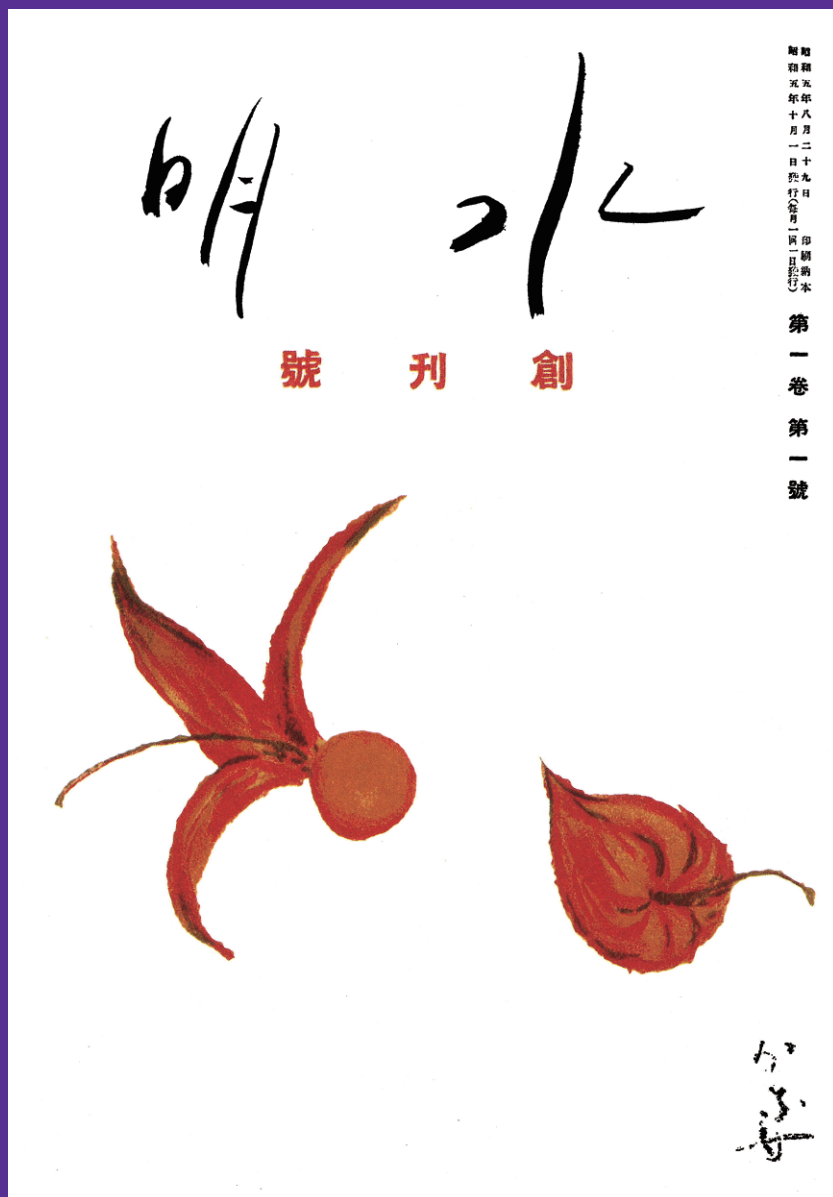
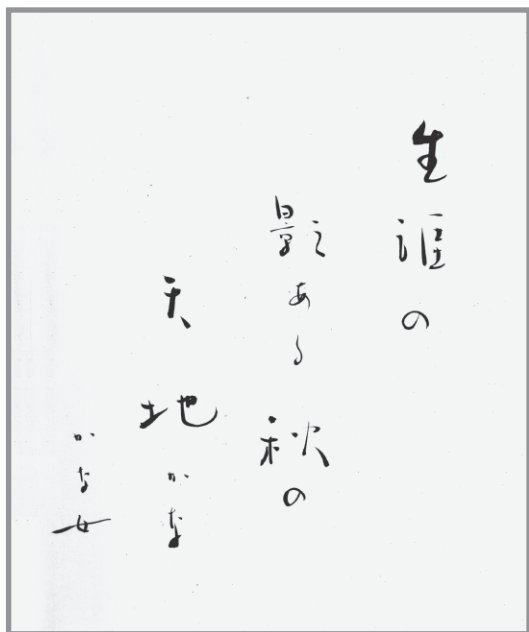




生涯の影ある秋の天地かな

長谷川かな女



昭和二十三年十二月かな女は風邪がもとで床に臥したが、三ヶ月余り真鶴で静養して元氣を取り戻した。そして、昭和二十四年の暮れ、別棟にかな女の書斎が新設され、落ち着いて筆が執れるようになった。平穩な日常を取り戻し静かな心境を迎えた秋のひと日の感慨が本句を書かせたのだと思う。昭和二十八年十一月三日、かな女家からほど近い調神社の境内に本句の句碑が建立された。横長長方形の伊豆石の表面を磨き上げたもので、平成二十六年三月に説明板を設置する浦和を生涯の地と心に決めたかな女の流麗な文字が、今なお我々水明人を勇気づけている。

(鬼之介・註)

今月の巻頭句

季音雪

鰻食ぶ「う」の一文字の藍暖簾

町野広子

季音月

雲の峰はるか昭和の大家族

大塚茂子

季音花

夏帯に合はす帯留海の色

梅澤輝翠

水明集

産土の川面に映す夏帽子

皆川更穂

鼓笛集

前景にタワマン並べ夏の山

倉田星歩

山紫集

卒寿まで生きて茅の輪をくぐりけり

井上玲子

水 明

令和 7 年

9・10月号

◆水明創刊九十五周年記念号

今月のかな女

今月の巻頭句

水明創刊九十五周年記念号

刊行に際しての所感

◆水明創刊九十五周年特別寄稿

頭の十五字

ロ マ ン

かな女句碑と風信子ハウスと

石 垣 島

夢のつづき

かな女先生と『水明』

継続は生きる力

水明の人々

良き故里

義母と俳句

若 狭 鰈

山本鬼之介

6 1

山本鬼之介

8

網野月を

10

大村節代

12

石山かつ子

14

石井喜恵

16

中山厚子

18

大橋廸代

19

永野史代

20

島津初花

21

星野和葉

22

檜鼻ことは

23



◆水明創刊九十五周年記念作品発表 網野月を 24

水明創刊九十五周年記念作品(俳句)

正賞 「みすゞ刈る」 五明 昇 28

準賞 「百科繚乱」 池田雅夫 30

準賞 「日日悠悠」 佐々木史女 32

水明創刊九十五周年記念作品(エッセイ)

正賞 「愛おしいネックレス」 清山尚巳 34

準賞 「母の歳時記」 元田亮一 37

水明創刊九十五周年記念作品(評論)

準賞 「長谷川秋子の天命と俳句」 青木鶴城 39

水明「水五則」 日高道を 46

◆水明九十五周年記念作品 私の二句水明を詠む 47

◆水明年譜(95年のあゆみ) 五明 昇 57

◆水明各賞 歴代受賞者一覧 84



羽 織 (作品)

山本鬼之介 92

煉瓦の街深谷 (近詠)

井上燈女 94

晩夏光 (近詠)

松井由紀子 95

雪 嶺 雪欄作家作品鑑賞

染谷風子 96

ゆずり葉 季音月評

檜鼻ことは 98

季音「雪」 (同人作品)

町野広子	松井由紀子
茂木和子	ほか

100

季音「月」 (同人作品)

大塚茂子	丸山マシミ
松宮保人	ほか

106

季音「花」 (同人作品)

梅澤輝翠	越田栄子
保坂翔太	ほか

111

『水明誌』を繙く

田島健一 116

現代俳句鑑賞

網野月を 118

季音賞作家の頁 (私の三句)

河野はるみ・曲淵徹雄 120



俳誌望見

梅澤輝翠

水明集

皆川更穂
寺町知子

小林京子
ほか

作品鑑賞

山本鬼之介

水琴窟（水明集七月号鑑賞）

池田雅夫

鼓笛集

140

山紫集

144

句集喝采

菅原卓郎

143

水明例会報・各地句会報

150・153

水明の記事他誌より転載

158

水明夏行

青木鶴城

160

水明競詠・りんどう忌のお知らせ

163

発展基金御礼

165

風声

166

後記

題字…長谷川かな女 表紙…内田恵子 カット…福田千春

水明創刊九十五周年記念号刊行に際しての所感

主宰 山 本 鬼之介

「水明」は、令和七年九月をもつて創刊九十五周年を迎え、会員一同が待ち望んでいる創刊百周年まであと五年となった。前回の九十周年の時とは違い、手の届きそうな高みに、「百」の文字を大書したアドバルーンが浮かんでいるのである。

私は、今年の一月号裏表紙の挨拶文に、「驀進」という言葉を用いた。即ち、創刊百周年を目指して一気に突き進むという気持を率直に表した言葉である。

九十周年から今日までの五年間は、実に目まぐるしい年月であったが、百周年へ向けての三段跳の一段目「ホップ」をきつちりと踏み終えた段階だと思う。これらの五年で二段目の「ステップ」を、そして「ジャンプ」して見事にバーを越える日を迎えたい。

さて、水明俳句会の五年間の内部の動きについて回顧すると、先ず運営組織が以前に増して充実したことで、常任運営幹事並びに組織のスタッフについても同様である。ホームページの更なる発展は言うまでもないが、それにもとづくインターネット句会に七十名もが参加する成果もあり、たいへん嬉しく思っている。また、俳

句の指導体制については、「別所沼はじめての俳句教室」が今年で十二回目を迎えたこと、令和元年に現・副主宰に託して発会した「円卓の会」から数名の指導者が生まれたことなど、俳壇的にも価値のある成果が実証されている。

私が前々から念願していた「水明」誌の発行日を早めることについて、来年一月号からの実施に目途が付いた。毎月一日に当月号を会員諸氏に読んでもらえるようにする。その為に、出句や諸原稿の締切り日の繰り上げ（25日を15日に早める）の実施についてご理解とご協力を得たい。

五代目主宰として、「祖師長谷川かな女への回帰」をモットーにしてきたが、この度、水明創刊九十五周年の記念事業の一環として、ふらんす堂から『長谷川かな女の百句』が刊行されることになり、自らの思いが形になることを大変嬉しく思っている。執筆について後押ししてくださった林桂氏と出版にあたり種々ご配慮いただいたふらんす堂の山岡喜美子氏に、そして、いろいろと助力してくれた副主宰に謝辞を申し上げる。

創刊九十周年は、新型コロナウイルスの災禍によって迷走を余儀なくされたが、今回はそのような煩わしさも無く、晴れ晴れとした気持で記念全国大会と祝賀会の日を迎えられる幸せを味わっている。

令和七年九月三日

頭の十五文字

山 本 鬼之介

品 定 め し た る 盆 梅 隠 れ 里
作 務 衣 新 調 し て 山 水 の 春 の 庭
別 邸 の 籠 の テ ラ ス 語 り 合 ふ
特 上 の 鰻 味 は ふ 遠 州 路
念 力 を 込 む る 行 者 や 瀧 し ぶ き
記 念 樹 の 時 を 繰 る か に 青 葉 雨

一九七六年（昭和五一年）の五月
号が水明創刊五五〇号で、俳句特別
作品三〇句の募集があった。水明に
入会して丁度六年経った頃で、創刊
五〇〇号の時には考えもしなかった
この難関に挑戦した。厳寒の深夜、
枕元のスタンドを灯し、十日間苦闘
して応募した結果、百編に余る応募
作品の中から私が応募した「人の化
石」が入賞作品に選ばれた。

朧月人の化石のなかりけり

いま、懐かしい作品の数々に触れ、
半世紀にも及ぶ歳月を振り返ってい
る。

年頃となりて身につく藍浴衣
周平の生れ在所よ白芙蓉
五輪書あらば無敵ぞ秋の空
九十九折つづく山路や雁渡る
刊本を運ぶ台車やつづれさせ
創建の時の薨に冬の月
明治は遙か昭和も遠し根深汁
水軍の遺構訪ぬる旅始
祝詞の声に目覚むる杜よ春近し

ロマン

網野月を

花の散るそのリズムＪセバスチャン

神童や花の便りを白鍵に

ヨルゼフのさくら生真面目不可もなき

楽聖の忌やアルザーの櫻花

咲き進む花やカールCの三六五番

花の枝を折るリヒャルトは風雲児

九十五周年萬歳

網野月を

既にお分かりと存じますが、連作は作曲家のシリーズにしてみました。パッハ、モーツァルト、ハイドン、ベートーヴェン、チエルニー、ヴァーグナー、シューマン、ヴェルディ、ブラームス、チャイコフスキー、マーラー、滝、プッチーニ、ドビュッシー、シェーンベルクの十五人である。

音楽も絵画も勿論のことであるが、俳句もその作品に最初に対面するのは作家自身である。九十五年の間に「水明」誌には百万以上の句が掲載されて来た。そのどれもがこの世に生まれる時に作者自身が見守った句

なのである。十五人の音楽家と同様にである。

ロベルトの狂気のやうに花喰らふ
花は葉に「プロヴァンスの陸と海」口遊ぶ
ヨアヒムの恋は少年花ぐもり
夜櫻や其はイリイチの恋ごころ
グスタフとアルマの瞑り櫻しべ降る
花盛の川は移ろひ廉太郎
東洋の花を愛でたるジャコモかな
クロードの海暮なづむ花疲れ
葉櫻やアーノルドSの気負ひなら

かな女句碑と 風信子ハウスと

大村節代

初秋の散歩の小道緩らかに
調^{つぎ}神社の先師の句碑に秋の蝶
秋涼し親子三人宮参り
大木に手をあて命もらふ秋
かなかなや鳩追ひかける幼い児
秋草と雲とさざ波ゆるる沼

調神社と別所沼公園は昔から私の散歩道だった。わが家から十分程の調神社は子供達の小学校の通学路で、銀杏やどんぐりを「お土産」といつて二、三個持ち帰った。

俳句を始めるまで、両所になな女先生の句碑があるのを知らなかったが、俳句を始めてからは、必ず句碑に御挨拶をと思っている。

別所沼のかな女先生の句碑の近くに、立原道造の小さな家（小屋）がある。詩人であり、建築家でもある道造は、浦和を愛し別所沼の近くに住みたいと願いながら、二十四歳という若さで亡くなった。道造の没後六〇年、平成十六年に、道造の夢の家は建てられたという。

こぼれ萩弁財天に手を合はす
曼珠沙華かな女の句碑は天を衝く
メタセコイヤ揺らし秋風細波に
秋晴れに沼の釣人また増ゆる
秋の沼ゆるり歩くは道造か
天逝の詩人ベンチに赤とんぼ
秋浅し未完のままの設計図
コテージの窓に十字架秋うらら
胸中にミサ曲流る今日の秋

ボランティアの方々が週に二度ほど、道造の小屋を開放して下さる。幸い先日見学させて頂けた。台所もお風呂もない小さな家から風に揺れるメタセコイヤ、光る沼が見える。ふと詩人がいるような…。

かな女句碑

生涯の影ある^{あき}埴の天地かな

(調神社)

曼珠沙華あつまり丘をうかせけり

(別所沼公園)

石垣島

石山かつ子

道端の大きなシーサー雲の峰
遊び船珊瑚礁より海坊主
道問へば汗を拭き拭き案内に
屈強な日焼男よ島人は
島人と声が弾けて西瓜割る
潮引きで干潟に残る蟹と魚

当時水明の全国大会は、関西と浦和と交代で行われていました。私の新珠賞を頂いた時は京都でした。嵯峨野あたりを散策して二日目が全国大会でした。

昼食の時の食堂の庭に大きな紅葉の樹があり、その下に実がこぼれ小さな二葉の苗がいっぱい生えていました。

その苗を二本大切に持ち帰り庭に植えました。一本はみるみる大きくなり一階の屋根を越すようになり、植木屋を頼み植え替えてもらいました。しかし、いつの間にか枯れてしまいました。

三十数年たっても、あまり育たなかったもう一本の紅葉は今では外流

風死して畑土灼くる甘蔗かな
近道は舟漕ぐやうに甘蔗畑
はてしなき海を見てゐて明易し
水牛の毛のつやつやと夏の海
行く先は牛にまかせて夏の波
海と大川同じ海拔蛭木の花
川波のおもむくままに蛭木の花
島人の夜はにぎやか唄・踊
泡盛に足もまだらや島の夜

しの脇の重要な場所、春には若葉、
秋には紅葉と訪ねて来る人の目を楽
しませています。

夢のつづき

石井喜恵

晩節の時のきらめき花蘇枋

蛇穴を出づ夢の続きは草の上

街隴ファドの声聴く地下酒場

百度石に忍ぶ足音蜥蜴消ゆ

斑猫や墓前にひとり擦る燐寸

追憶の街はモノトーンタ立来る

水明九十五周年おめでとうございます。
ます。

思い起せば公民館での星野紗一
先師の俳句教室から始めて、前主宰
の星野光二師、山本鬼之介主宰と教
えを頂いて二十五有余年です。

何より一人遣された空虚な日々を
救ってくれたのが俳句でした。自分
の句が読み上げられた時のワクワク
感に、忘れていた懐かしい感覚が甦
るのです。然してお声掛けを頂いた
総務部には十三年在籍し、微力なが
ら充実した日々を過ごすことが出来
ました。

「句は人なり」私はこの言葉が好
きです。作品には自ずと人柄が出る
ものです。これからも「水明」と共

缶切りの一周半夏雨の午后
半夏生壁に掛けたる夜叉の面
流鏑馬の貫く一矢放生会
唇の湿りも淡き月の笛
九十五周年水明磐石秋の宴
エンドレステープ聴くともなく小春
ふいと立つ人の移り香冬座敷
珈琲苦し落葉松に這ふ冬の霧
眩しすぎる工場夜景冬銀河

に、自分の心の問いに真摯に向き合
い俳句を詠んで行きたいと思ってお
ります。

かな女先生と『水明』

——受け継がれる美意識と俳句の絆

中山厚子

御結社『水明』が95周年という大きな節目を迎えられたことを、心よりお祝い申し上げます。

創刊以来、長きにわたり『水明』の俳句文化を生み出し続け、俳句の文化、人と自然、そして時代の移ろいを静かに見つめ続けたその歴史に、深い敬意と感謝の念を表します。

かな女先生が一九二八年、浦和に移られた際の住まいは、博さんの生家である三室の石関さん（伯母）の新しい借家で、高砂小学校の南側にありました。私が父に連れられてご自宅を訪れたのは、一九五六年頃のことです。気品ある、穏やかなお顔とお声に接し、緊張しつつもどこか安堵した思い出がよみがえります。

父・吉沢光平が『水明』でかな女先生のご指導をいただいたご縁で、晩酌のひとつにかな女先生のお話がよく花を咲かせていた子ども時代を思い出します。中でも「羽子板の重さが嬉し突かで立つ」の句は、長く私の記憶に残っています。大熊輝一さんのお名前もたびたび話題に上り、全集の記録には氷川女體神社や三室方面への吟行の際、「かな女先生は自

転車の尻に乗って」と記されているのを見て、父が生き生きと『水明』のことを語っていた声がよくかえります。

三室の伯母の家である大古里^{おふらと}の家でも吟行や句会が開かれていたようで、今のご当主である石関さんからも、かな女先生と句会の話を伺ったことがあります。このように、浦和の自然の中で俳句が人と人を結ぶ「縁」となり、生活に根付いてきたことを教わりました。

『続小雪』の昭和25年頃の日記には、「『雨月抄』を一本にした時と二、三年しか隔たっていないが、ようやく出版その他が軌道に乗ってきたのが嬉しかった」とあり、「若狭の山人は『山家随想』で晴耕雨読を語り、吉沢光平の去来抄物語、西村牧芝（歌人・西村陽吉）の現代俳句鑑賞、高橋梨丘の展望等が水明の読み物の主だったものであった」「連句がその頃流行して、ホトトギス誌上にも連歌が掲載された。吉沢光平氏の『連句入門』を水明にも載せた。歌山『冬の日』によって連句の作法が説明されている」と、当時の俳壇の動向を踏まえて編集方針を記しています。

『水明』は門弟の皆様から市民へ、全国へと輪を広げ、地域の美意識と感性を育ててきました。自然の豊かさ、人と人とのつながり、言葉の奥に光る美、浦和の地と共に歩んだ95年は、『水明』を人と人の巨大な城として築き上げてこられた歴史です。その創造と出会いの歴史に敬意と感謝を表し、百年に向けての更なるご発展を心よりお祈り申し上げ、節目のご挨拶とさせていただきます。

継続は生きる力

大橋 勉代

私が俳句を始めたのは、昭和四十八年十一月、星野紗一主宰を根来寺に迎えての句会でした。「さいーち」と大きくのびやかな名告りに驚き、いたく感銘を覚えました。昭和五十一年七月関西例会発足、主宰と和服のお似合の吉沢ひさ子様を迎え、神戸・大阪・和歌山総勢63名で、森の宮労働会館の会場溢れんばかりの盛会でした。昭和五十七年の同人会は和歌山で開催、宴会の余興では和歌山水明全員で殿様行列を披露。殿様役の神保礼子さんの「初い奴じゃ、苦しゅうない、近う寄れー」のアドリブに紗一主宰は「ははあー」とにじり寄り、大きな紀州手毬を受けて、満場やんやの大喝采でした。

わが句会の連衆は日頃は奥ゆかしく穏やかだが、一旦事あらば一致団結で本領を発揮して協力を惜しまない。当時の私はキックボールとバレーボールに熱中、練習と試合に余念がなく俳句は二の次でした。思い返せば父森協飯之とは十年、創刊初期から活躍の立派な草香薫春先生とは十五年間の御指導を仰ぎ、贅沢な句会を怠けてばかり、もっと真剣に教えを

乞えばと、後悔あとの祭であった。二師亡き後は、関西例会の主宰のご指導を頼りに、句友と和気あいあいと高めあって現在も笑いの絶えない句会である。

蝶のように畳にあれば夕良咲く かな女
合掌しては歩く涼しさ高野杉 秋子
雪溪に眼をうたれたる夜の小屋 嵯迷

私の大切な三本の扇子である。平成二十七年七月、意気軒昂な光二主宰と十数名で芦屋の虚子記念館を訪ね「大正期女流俳句の変遷」を見学、虚子の信頼厚く女流俳句の先駆者だった若き日のかな女師とその活躍ぶりを知った。NHKの番組でかな女師の肉声をきき「生きる疲れも俳句をすることで救われました。生きること決めました」の言葉に感動しました。まだ俳句を知らなかった頃、秋子様と嵯迷様を和歌山駅の一番ホームでお見かけした記憶があります。

鬼之介主宰は詩友一人一人に、きめこまやかな御指導を下さり感謝のほかありません。父が和歌山句会を百年かけて育ててゆきたいと挨拶した根来句会から、はや半世紀歴代主宰の薫陶を糧に諸先輩と過ごした濃密な句座は、私の至宝です。「継続は生きる力」だと思っています。

次世代を担う作家を輩出の水明のますますの発展を祈念いたします。

水明創刊九五周年まことにおめでとうございます。

水明の人々

永野史代

「飛脚よ」と秋子師の声。若松句会の始まる前。入口隅に座っていた私宛の封書である。かな女先生にお目にかかることは無かったが、一九六八年水明への投句。入選は一句、どんなに頑張っても二句止まり。それでも嬉しかった。かな女師のご葬儀にも出席した。その頃落水尾氏から「藁の会」へのお誘いがあった。発行所は以前の東仲町。遅い夜の句会なので一度だけ出席。今思えば凄いいメンバーだった。小内春彦子、出井一雨、小林京子たちの各氏。これに秋子師が加わる。谷川の林間学校が開かれ、山本飛鷹子（鬼之介主宰）も一緒に来た。一ノ倉沢で濡れた体を洗いに浴室へ。広い浴室に秋子師が一人で！色々な話をして、本太のお宅へ伺う約束までした。夜は花火大会もあった。この話は、八十五周年の時に少し書いたと思う。本太の家へ入るとお寿司をご馳走になる。小皿に分けたお寿司を隣室の敦氏へ（作家長谷川知水、熱茶庵と云う名で水明に文を寄せていた事もあった）。南浦和の古アパートに住んで近くの公民館の「山椿句会」に出席。石塚まささを師ご指導。佐々木久代、西山貴美子、高野万里、吉住光弥の各氏。夫が研究で仏国へ行くことになり、

私も一緒に。遠山喜美子編集長は仏国まで水明を送ってくれた。ありがたかった。帰国後は子育てが始まり、句会出席ができず、やっと娘が小学校高学年になって、北千住の句会へ。俳画の長谷川久枝師は、福岡穂邨師に学び、柳句会は岩槻へ初吟行。私も参加。ガリ版を切って作った冊子は俳画を描いた表紙が素朴で素敵であった。久枝師は福岡穂邨・浪子夫妻のみなみ句会へも出席された。一九七一年の夏行は履物と橋。橋にはそうそうたる人々が二句に！星野紗一・明世夫妻、佐々木久代、立川京子、三木多美子、篠崎とし子、川島喜由、尾崎木星、田中幹青、まだまだ三句も含め数えきれない方々。話は戻って若松句会の初日、からし菜を漬けて送方もない青さが秋子師特選に。嬉しかった。後悔の日記は長く明易し、も若い人の後悔はいいですね。と評。向日葵の音なき音を陽にぶつけ、のハガキが師より届く。一瞬を丸く生きをりしやほん玉、は水明誌の評に。そして秋子師突然の逝去！ショック！！追悼句会は浦和。寒い椿を秋子椿と思ひけり。大畑南海魚師の特選を頂く。合掌。本当に沢山の水明の方々と触れあうことができた。林間学校では嵯迷夫人手作りの黒豆の美味しかった事。月の会の吉田静二、鶴川山百合の松本孝太郎、網野月を、横浜水明の中山玲子の諸先生方。発行所の岡田銀溪、波多野寿子、さらに島津城子氏と若狭の方々その他沢山の人々の事もみな忘れられない。

今年、水明は創刊九五周年を迎える。
おめでとうございます。

（文中敬称略）

良き故里

島津初花

今年の冬は、節分過ぎても気温が高く、暖冬と言われたが、二月下旬になって日本海上空に一週間も寒波が居座り、一日に二十センチずつ雪が積り思わぬ大雪となりました。

浦和から主宰と副主宰をお迎えして若狭水明会春の特別俳句会が二月二十七日に行われ、幸い雪もおさまり好天気となりました。

兼題は「若狭の文字を入れず若狭を詠む」三十八句の中で会員は五句選、主宰から特選、並選へ色紙、短冊を頂き、副主宰から句評と旧かな使いについてのご指導を頂きました。

三方五湖、鯖街道、瓜割公園、鳥羽公園、鵜の瀬のお水送りなど、ふるさと若狭を再確認した日でした。

語りあふ兄弟句碑を春の雪 鬼之介

故城子先生が生前良く話されていた言葉の中に、若狭水明会の誕生の原点は、沢本知水、嵯迷両先生のご指導が今日の鳥羽谷俳句会に繋がっていることを忘れてはならない。と強

く言っておられました。

鳥羽公園に建てられた兄弟句碑にふわりと掛かる雪景色を想像していたのに思いの外重い雪の下で両先生が語り合われる様子を浮かべ特選にしました。

早咲きの椿を祈りて師を忍ぶ 初花

毎年二月、秋子師の命日に、故城子先生は黒田区の墓地へ雪を踏み分けお参りに行かれた姿を思い浮かべて一句にしました。

瓜割公園に、かな女句碑、秋子句碑、紗一明世夫妻句碑、鳥羽公園の沢本兄弟句碑、翠保句碑、城子句碑を毎回清掃に行くとき、何故か心が温まる不思議な力を頂きます。これが俳句の力だとひたすら信じています。

水明創刊九十周年からの五年の歳月は、とても早く駆け来て様に思われます。

令和五年、水明全国大会で計らずもかな女賞を頂いた日以来、身の引き締まる思いを一日も忘れる事はありません。

故城子先生と始めた「Z花会」の灯を消すことなく続けて行くことが、先生への恩返しと信じ力の続く限り俳句に拘わってゆきたいと思っています。

創刊九五周年から次は百周年へと水明会の更なる発展と歴史を大切に守り歩み続けて行けます様に心より念願しています。

義母と俳句

星野和葉

「いこんち（この家）は俳句やつてなくていいねえ」と、これは義母が我が家へ来た時、いつも口ぐせのように言っていた言葉である。

義母（以下・母）の家は夫である茅村、長男紗一（三代水明主宰）、その妻明世、娘美夜子、次男光二（四代水明主宰）、私の夫の光二以外は皆俳句を嗜む一家であった。日曜日ともなると皆それぞれ句会に出掛けてしまい、母は取り残された気分になり寂しかったのではないかと思っていた。そして、我が家へ来るとほととしいた様子で寛いでいた。それでも水明誌は良く読んでいて、知っている人の名を見つけると「ああ、○○さん」と嬉しそうにしていた。私の知る限りでは母は俳句を作るといふ事は無かった。後で聞いた話であるが、光二に「お前だけは俳句をしないでくれ」と言ったとか。そんな母も菊の花を育て時にはお芋などを煮ては、かな女先生のお宅へ届けたりしていたようである。俳句が嫌いという訳で

はなかったようだ。

紗一、明世お二人に私は「俳句をやりなさい」と会う度に勧められ、これでは一生言われる事になるだろうと、重い腰を上げ歳時記を買い「櫟の会」に入れて頂いた。その時は母には内緒であった。母は九十一歳で亡くなる前の三年間は我が家で過ごした。それ故、私は始めたばかりの俳句を四年程まったく離れた。このまま俳句を止めてしまおうかと考え倦んだ。母が亡くなって半年程経った頃、明世先生から「別所沼で吟行して家で句会をするから出ていらっしゃい」とお誘い受け、恐る恐る出かけた。平成元年の事であった。

一方、光二は退職後の平成十一年に水明に入会。何時かは始めるだろうと思っていたが、突然ヨーカー堂の句会（現コクーンシテイカルチャー俳句教室）へ行き始めた。退職後、時間たっぷりの毎日「俳句入門実作への招待」「自由に楽しむ俳句」など熟読し、紗一句集の索引まで作った。

平成十八年一月、紗一主宰が体調をくずされた為、光二は第四代主宰を継承した。これは大変な事になったと私は思った。しかし、その年の春の吟行会で紫黄先生に詠んで頂き、ほっとして涙がこぼれたのを覚えている。

度胸とは 星野光二よ 朝桜 山本紫黄

平成三十年、五代目主宰を山本鬼之介主宰にお渡しする事が出来た。以上は水明九五周年のほんの一齣である。

若狭鰯

檜鼻ことは

塩を施してから一晩陰干しにする「若狭鰯の一夜干し」は、ピンク色の卵巣が透けて見えまことに美しい姿。軽く炙って食べるのが常だがほどよい塩味とほんのりとした甘さが美味。日本酒と共にいただく一段と美味しくなるのは言うまでもない。若狭鰯と呼ばれている鰯は、若狭湾で獲れるヤナギムシカレイのことで笹鰯と呼ばれることもある。鰯の種類は多く日本近海だけでも四十種類近くにもなるが鰯は回遊をしないので若狭鰯と呼ばれるヤナギムシカレイはまさにその名の通り若狭湾でしか獲れないと伺ったことがある。

さて、まぐらはこの辺にして、長谷川秋子と秋子の父澤本知水の句集を最近になって読み返した。「夏爐」は知水の死後、長谷川かな女が編纂した句集。かな女は、その序文で「若狭に疎開して故郷の山河に親しんで暮らすようになってからの知水は、初めて水に放された魚のよう……」と述べている。秋子は「父の思い出」と題し「私は二十五で父に死なれ、三十歳の時、母に逝かれてしまった。……まさかこんなに早く

別れるとは思わなかった。……幽霊でも良いからもう一度私の目の前に座らせて、お酒を飲ませてあげたいと思うのである」と父への思いを語っている。戦時中より若狭で暮らし始めた秋子の父と母は、若狭の地に眠る。

「菊風ぎ」は、秋子が長谷川家に嫁いでから二十余年の間に詠んだ句を、かな女の勧めによりまとめた句集。序に「きらびやかな前衛俳句に左右される愚も致しませんでしたし、明治に固執して居ようなわたくしの古風に染まる憂いもないと安心して居ります。……知水に秋子の成長を見せたい事も句集発行の意のあるところと解していただきたく……」と、かな女の筆文字の文が印刷されている。発行は昭和四十二年の五月。

「秋子さんが紹介されている」と伯父・伯母たちが、和服姿で佇む秋子さんの写真が載った雑誌を回し読みしていたことを覚えていいる。確か、私が中学生の頃。昭和四十四年、長谷川かな女の逝去にともない「水明」の主宰を継承した年のことだと後に知る。

昭和四十八年秋子さんが急逝したとの知らせが若狭の地に届く。「秋子さんは昔から喘息もちで身体が弱かったから」と母が言っていたのを思い出す。大正十五年寅年生まれ、享年四十六歳。これからという時、何とも惜しまれる夭逝である。「夏爐」は萌黄色、「菊風ぎ」は弁柄色の装丁の句集。これからも時折手に取りたいと思う。

水明創刊九十五周年記念作品発表

実行委員長 網野月を

応募概況

水明創刊九十五周年記念作品募集は、令和六年の年末から告されて、約半年後の五月に応募期間を終了した。いわゆる周年行事の一環として企画されて、多くの水明の季音同人、同人、詩友からの応募を得ることが出来た。

応募総数は四十五篇、その内に二つの部門への応募者が七名あり、応募者総数は三十八名であった。前回水明創刊九十五周年特別作品の際には、俳句部門十六篇、エッセイ部門五篇そして評論部門の募集には応募無しという状況であったものが、大きな躍進といって良いであろう。コロナ禍が影響したとも考えられるのだが、前々回八十五周年の際の三部門合わせての応募総数二十九篇に比しても立派なものである。

立派なのは数字だけではない。無論の事、裾野が広がることによる質の向上は担保されているといって良いであろう。また三部門に応募作品があったことは、前回からの前進であって、高く評価したいところである。

加えて応募者の中では新しい挑戦者が目立っている。水明俳句会の中で確実に新しい目が育っていることに、五年後に

企画されるであろう水明創刊百周年記念作品の充実ぶりが目の前に抜がる思いである。

受賞作品を見ると、俳句部門では俳姉俳兄の作品が並んだ。長年の研鑽の賜物といって良いだろう。一方で、三分の一ほどの応募者は水明に入会して数年の皆さんの積極的な応募作品でもある。ある応募者は「卒業論文のつもりで……」といながら応募したことを筆者に打ち明けられている。エッセイ部門では読み応えのある作品ばかりが並ぶ中で、新しい挑戦者の受賞が目を引き付ける。また評論部門では惜しくも正賞は逃したものの受賞者の健筆が改めて顕在化して存在感を感じさせてくれている。

次に部門ごとの応募作品一覧を提出して、応募者の皆さんの熱意に応えるものとしたい。

応募作品一覧

【俳句部門】三十三篇

- ① 北ぐに
- ② お酒
- ③ 遠き日の旅靴

岡本和男
元田亮一
菊池ひろこ

- ④ 惜春惜夏
 ⑤ 旅は宝物北へ南へ
 ⑥ 花便り
 ⑦ 先達
 ⑧ スローライフ
 ⑨ 庭の花
 ⑩ 鄙住まひ
 ⑪ 春から夏へ
 ⑫ 不死鳥
 ⑬ この春へ
 ⑭ 季節越え
 ⑮ 一年間の展望
 ⑯ 自分史
 ⑰ 花林檎
 ⑱ 日日悠悠
 ⑲ 人間様はエゴイスト
 ⑳ 生の彩り
 ㉑ いただきます
 ㉒ 百花繚乱
 ㉓ 雛祭
 ㉔ 歳事あれこれ
 ㉕ 春の物語
 ㉖ みずゝ刈る
 ㉗ 草笛の音

保坂翔太
 野村美子
 榎本道代
 青木鶴城
 秋谷風舎
 飯田忠男
 本橋稀香
 反町 修
 森下山 菜
 森下美智枝
 伊藤美津子
 田中章嘉
 近藤徹平
 前田夏野
 佐々木史女
 平野 楽
 皆川更穂
 小林京子
 池田雅夫
 羽島秀子
 松井由紀子
 菅原真理
 五明 昇
 西幅公子

- ②⑧ 夜明け前
 ②⑨ 海から暮れて
 ③⑩ 風は北から南から
 ③⑪ 語らへば
 ③⑫ 老いの矜持
 ③⑬ 逃げ水

【エッセイ部門】十一篇

- ① 初めての俳句教室
 ② 母の歳時記
 ③ 「メコン河」に遊ぶ

最後のバックパッカー

- ④ 梅といえは

- ⑤ 新幹線で函館に行ってみる

- ⑥ 「俳句」と私

- ⑦ 愛おしいネックレス

- ⑧ 起承転転

- ⑨ 偉人洪澤栄一を育てた両親について

- ⑩ 水明の源流を辿る

- ⑪ 無言の約束

日高道を
 梅澤輝翠
 河野はるみ
 宮崎チアキ
 菅原卓郎
 井上玲子

平野 楽
 元田 亮一

松下しょうこ

秋谷風舎

森下山 菜

榎本道代

清山尚己

池田雅夫

井上燈女

日高道を

森本早苗

青木鶴城

【評論部門】一篇

- ① 長谷川秋子の天命と俳句

受賞作品

【俳句部門】

正賞 みすゞ刈る
準賞 百花繚乱
準賞 日日悠悠
五明 昇
池田 雅夫
佐々木 史女

【エッセイ部門】

正賞 愛おしいネックレス
準賞 母の歳時記
清山 尚己
元田 亮一

【評論部門】

正賞 該当作品なし
準賞 長谷川 秋子の天命と俳句
青木 鶴城

選考経過

応募作品は締め切り後に作者名を伏せて各選考委員へ渡された。五名の各選考委員は各自慎重に審査して、各部門ごとに受賞作を念頭に推薦するべき作品を勘案して選考会にのぞんだ。選考委員会は六月三十日に発行所において開催された俳句部門、エッセイ部門、評論部門の順に審議され、各部門ごとに一席、次席（複数の場合在り）を決定して、その上で当該の俎上に上がった一席、次席の作品が正賞に値するか否かの審議を重ね、準賞についても同様に審議を進めた。

【俳句部門】

選考委員会に先立ち、審議の進め方について合意を得た。司会役は実行委員長が務めることとし、五名の選考委員のオープンな立場を確認した。まず各選考委員から推薦する作品を発表して上位に位置する作品について審議を重ねる方法で進めることが合意され、各選考委員から特に推薦して審議対象とした作品について各自発表がなされた。山本主宰からは六作品、大村編集長からは七作品、石山委員からは五作品、石井委員からは五作品、網野からは六作品がそれぞれ推薦された。

ここでは同時に各委員から②⑥「みすゞ刈る」を一席に推す声が圧倒的となり、投票を待たずに一席は②⑥「みすゞ刈る」の作品にすることが各委員の満票のかたちで合意された。

次に各選考委員からの推薦数の多いものから順に推薦理由を述べあい、慎重な審議が続けられた。その他の作品についても審議過程で意見交換する場面もあった。次席作品についての検討は、三十三篇という応募作品数を念頭に置くと準賞受賞作品数を考慮しながらの検討ということになる。最終的には二度にわたる投票とその間の作品評の意見交換を経て、②②「百花繚乱」と①⑧「日日悠悠」が選出されて、また準賞として受賞が決定した。

選考に置いては、標題の良否、三十句という句の配置（順番）、各句の標題との関係性と距離感、などが審議の焦点に

なっていたと記しておきたい。今回の選考に際しては、準賞決定の審議に時間を要したといつて良いであろう。

【エッセイ部門】

エッセイ部門への応募作品全十一篇はいずれも応募者の大切な思いを反映していて、文字通り読み応えのある作品であったように思われる。エッセイ部門においても先ずは各選考委員から推薦したい作品を挙げてもらい審議することとなった。山本主宰からは六作品、大村編集長からは三作品、石山委員からは三作品、石井委員からは三作品、網野からは二作品それぞれが推薦され、これらの作品を中心に審議が進められた。そのほかの作品についても審議過程で意見交換する場面があった。⑦「愛おしいネックレス」は三名の選考委員から一席に推す声があり、この作品を中心に検討が進められた。他二名の選考委員においても審議の結果、⑦「愛おしいネックレス」を一位とすることの合意が進められ一位であることの確認の後、正賞受賞作となった。二位の作品については、②「母の歳時記」、⑥「俳句と私」⑩「水明の源流を辿る」⑪「無言の約束」が組上に上り、慎重な審議と二度にわたる投票が行われて、②「母の歳時記」が二位に決定し、準賞としても選考された。エッセイとは本来自由な形式と内容の散文と理解するが、今回の応募作品はより吾が事に引き寄せた内容のエッセイが高い評価を得た。同時に描写において、吾が

事の内容を客観的把握の対象としておさめた作品が共感を得るものとして評価されたものと考ええる。今回の審議過程では、いたって俳文的側面が重要視されたと言つて良いであろう。

【評論部門】

評論部門への応募は一篇である。①「長谷川秋子の天命と俳句」は將に水明創刊九十五周年記念に相応しい表題であり、昭和時代の水明、つまり第二代主宰長谷川秋子時代の水明の資料として大いに会員諸兄姉には読んでもらいたい内容である。選考会議のポイントは、「評論」としての内容の在り方に審議が集中したと言えらる。秋子の句を多く引用し、作者が選句した秋子の俳句作品そのものに（ものを言わせる）手法で記述されている文体であり、その部分の評価をしたいという意見と、作者自身の言葉でより多くを語って欲しかったという意見が出た。また応募作品は字数制限を超えており、その点についても審議された。結果として、字数制限内に改定することで準賞受賞作として決定した。選考過程では「評論」「評伝」「鑑賞文」などの見解について意見交換がなされた観があった。

最後に改めて、今回の記念作品応募者の皆様に感謝申し上げます。質量ともに充実したものとなったことに水明俳句会としてのこれからが、より確たるものになるであろうことを確信いたしました。

正賞 みすゞ刈る
五明 昇

信濃路に四つの「平」下萌ゆる
濫觴は槍か穂高か雪解川
戒壇巡り出でし今生牙返る
春寒し絵島屋敷の格子窓
安曇野の静けき目覚め花山葵
密書めく蝶の消え入る真田井戸
風に乗る防災無線別れ霜
春三日月木曾路は今も山の中
風薫る一茶土蔵の小さき窓
霊山の伏流ここに水芭蕉
白南風に六文銭の流し旗
哀調の草笛洩る遭難碑
洗鯉千曲の瀬音遠からず

夏 薊 牧 牛 群 る 塩 くれ 場
万 緑 に 噎 せる 峠 の 七 曲 り
雲 の 峰 尾 根 道 を 往 く 歩 荷 隊
機 嫌 よ き 白 馬 三 山 今 朝 の 秋
火 の 山 や 花 野 の 沖 を 駈 くる 駒
お 朝 事 を 終 へ し 大 寺 小 鳥 来 る
蕎 麦 の 花 一 峰 晴 る る 八 ケ 岳
鳳 仙 花 媼 が 手 織 る 上 田 縞
帰 燕 は や 軒 の 寂 し き 奈 良 井 宿
飛 驒 工 女 の 辿 り し 峠 葛 の 花
初 霜 を 化 粧 う て 明 くる 馬 籠 坂
小 止 み 無 き 浅 間 嵐 や 凍 豆 腐
往 時 茫 茫 川 中 島 に 冬 の 霧
古 戦 場 に 誰 が 泣 く 声 ぞ 虎 落 笛
ア ル プ ス の 山 巔 峨 峨 と 星 月 夜
凍 て つ き し 山 路 の 果 て の 猿 の 湯
十 州 に 連 な る 信 濃 山 眠 る

準賞 百花繚乱

池田雅夫

老梅の瘤や兜太の仏頂面
恋ごころ雛菊の花散らさでか
げんげん野三步下がりて夫のあと
落椿後悔してもはじまらず
ちらちらとちらちらとちるさくら
時つ風に白波たつる藤の花
つつじ山ついぞ雨雲消えずなり
アネモネのアネモネ咲きの矜持かな
牡丹に惹きつけられて人の波
誰よりも笑顔が素敵花さうび
山法師調子はづれの童うた
蓮の花村の仕来り守る長
夕雨のかそけき音や白菖蒲

胸のうち明かすことなく七変化
行雲の千變万化百日紅
山百合の香に溺るごとくゆく
夜更けすぎ月下美人と密会す
大輪のダリヤあやふしつむじ風
鳳仙花夫婦げんかのとばつちり
カンナ燃ゆ心あらはにして抗議
居酒屋の裏手ひっそり酔芙蓉
白粉の花に触れゆく車椅子
曼珠沙華武州の臍の巾着田
とびきりの美人に仕立て菊人形
石路の花来歴の書を繙かむ
返り花童心といふ宝もの
山茶花に離れ住む子の安否問ひ
一輪のそこはかとなく冬のばら
太陽の内懷や福寿草
水仙の香りつたひに旅行脚

準賞 日日悠悠

佐々木史女

寒明や老に眩しき駅の玻璃
桃の日や池の辺りに水明り
故郷の土の香りや涅槃西風
快癒を祈る介護の日や木の芽風
長生に少し淋しき春の雪
尼寺の読経のリズム春時雨
子供から陽炎の立つ砂場かな
利根堤径は菜の花いま盛り
古利根や葱坊主立つ荒畑
水の匂ひと草の匂ひや初夏の風
大利根の水を命に植田かな
川上からの風こち好し鮎の膳
万緑や田へと川水駆け下る

不動明王滝のしぶきに黒光り
人はみな話し癖ありビール酌む
葛の花慈母観音の胸元に
精米の新米光り陽の匂ひ
月の出や遊船揺る隅田川
川音はいつも穏やか大根蒔く
待ちわびていたかのやうに虫時雨
里山や月の明りを友として
ポスターに笑顔満開秋高し
行灯の昔が還るすがれ虫
現世の扉を閉めて秋の蝶
筑波山くつきり小春日和かな
祖母送る少女の涙しづり雪
水音や利根にやさしき初明り
老いの夢めぐらしてゐる初湯かな
月明や寒鯉ねむる池の底
水餅の鍋に久しき母の味

正賞 愛おしいネックレス

せい やま なお み
清 山 尚 己

四十五歳のある日、専業主婦だった私は突如思い立った。後半の人生になにか人の役に立つ仕事をしよう、と。

私は今、近所の保育園でパートタイマーの保育士として働いている。元々保育士ではない。なにか社会に奉仕できる仕事をしようと思いついたあの日から、通信教育で保育士資格取得の勉強を始めた。

保育士が足りないことが話題になってはいたが、保育士になりたい人が全員資格をもらえるわけではなかった。試験の内容は、福祉法、心理学、栄養や発達、それにピアノや作画等の実技を含め、九科目以上に渡るハードなものだった。しかし試験科目は一回合格すると、三年間有効になる。人間の出生から死亡までの様々な課程を勉強するのは興味深かったが、私は有効三年目ぎりぎりですと最後のピアノ演奏試験にたどり着き、なんとか合格した。

資格を取得し、いつでも就業できる状況にはなったものの、次の段階のハードルは高かった。四十八歳。未経験。果たして実業として働けるのか。重労働、低賃金、女性の多い職場の人間関係の難しさ。なにより小さな命を預かる重責。五十歳を目前に、今さら自分をこの緊張とストレスの世界に落と

し込む必要が本当にあるのだろうか……。

人手不足で常に掲示されている、市役所の「保育士パート募集」のホームページを眺め続けること二年。はた、と思いついた。

——ボランティアならいけるかも。——継続勤務の責任なし、未経験なので未熟は当然、もちろん無給で良し。早速パソコンに、

「免許を取得したので、ボランティアをさせていただけませんか。」と打ち込んだ。

そこからの展開は早かった。

三十分経たぬ内に電話があり、ボランティアは募集していませんが、今からちょっと近所の保育園を見学に行きませんか、と誘われ私は保育園という職場に、初めて足を踏み入れた。迎えてくれた園長はしきりにありがたいことです、と言いつつ早く早速で園内を案内し、あちこちでにぎやかにまわりと何度も私につぶやいた。

私は初の保育園の熱気にぼーっとなり、園長が最後に発した「ちょっとやってみませんか」の言葉に不安のまようなず

いた。そしてあれよあれよと、二週間後の月曜日から、週五日、夕方の三時間を自給一一五〇円でその保育園に就業することに決まった。

四月一日、私は五十歳目前に保育士デビューした。最も心配した人間関係は杞憂に終わった。保育士ひとり当たりの子どもの割り当て人数が多く、おとな同志でかまっている暇は無かった。パート仲間は同年代で、彼女たちの親切で穏やかな人柄にも恵まれた。

就業二年目に出会ったあやのちゃんは、うさぎ組の三歳児だった。小柄でおかつぱ頭、色黒で大きな眼をしている。他の子には交わらず、たいていひとり物静かに絵本を見たりお絵描きをしていた。三十人いるうさぎ組当番になり、騒々しく活発な女の子たちの相手に捕まると、その身勝手な要求やおしゃべりを聞くのが面白く、知らず知らず時間が過ぎてしまう。やかましい輪の外で、あやのちゃんは床に座って絵本のページに指をかけたまま、よくこちらを見ていた。私は気付く度にささやかな罪悪感から彼女を手招きしたが、いつも困ったように首を振るだけだった。

定時の十八時半を過ぎてのお迎えになると、「延長保育」になり、子どもたちは部屋を移動して補食を摂ることになる。彼女はアンパンマン柄の大きなピンク色のバッグを肩から下げて、しばしば教室移動のその列に並んだ。小柄だったからバッグを床に擦ってしまう。バッグの持ち手を半分持ったり、手をつないだりして私は彼女を手助けした。短い移動の間、

話しかけても彼女は黙ったまま首を振ったりそつとうん、とうなずいたきりだったが、口元にはいつも小さな微笑みが浮かんでいた。

あの日もあやのちゃんはこちらを見ていた。私の周りにできたにぎやかな輪の外で、ひとり座って開いた絵本に両手を置いている。視線が合って、私たちは手を振り合った。

少ししてふと、輪がほどこけた。集まっていた子どもたちが散り散りになり、いつの間にか彼女が私の前にいた。

「先生、かわいいね」突然彼女は小さな声を出した。私のつけているキティちゃんエプロンのことか？ と考えている内に、今度ははっきり言った。

「あやのちゃんのおうちに遊びに来たら、首にネックレスをかけてあげる。」

全く思いがけない言葉に私は面喰らった。そして狼狽し、やつとのことでありがとう、と答えた。

帰宅してから、何度も彼女の言葉を思い返した。おとなの指示をやつと理解したが、まだまだ自分本位のはずの三歳児。それがなんのためらいもなく、自分の大切なネックレスを私の首にかけてくれると言う。だが私は一日数時間一緒に過ごすだけで、しかもついつい彼女を置いてきぼりにしてしまう新米保育士だ。小さな身体からあふれた思いがけない言葉。幼児の心を不可解に思ったり、深く感動して涙ぐみそうになったりで私の感情も忙しく揺れた。しかし未熟な私がその無垢な愛情を受け取るに値するのにか全く自信がなく、まっ

すぐな気持ちに向き合うのは照れくさくて気恥ずかしかった。その時一度きりで、彼女はまた遠くから視線を送ってくるだけの物静かな女の子に戻っていった。やがて年長クラスになると保育士の割り当て人数も減り、私たちが会うことはほぼなくなつて彼女は卒園を迎えることになった。

登園最終日の三月三十一日夕方、私は一歳児を抱き、部屋の中から帰宅してゆく卒園児を眺めていた。走つたりふざけ合つたりと、どの子も嬉しそうだ。しばらくしてあやのちゃんが見えた。アンパンマンのバッグを肩にかけ、口をひき結んでじつとこちらを見ている。持ち場を離れることはできず、私は子どもを抱いたまま窓辺に寄り、大きく右手を振つた。彼女も手を振り、そして卒園していった。次の日になつて新入園児が来て彼女がいなくなると、私はなぜあの時窓を開け、こちらを見ていたあの子にきちんとさよならを言わなかったのだろう、と何度も後悔することになった。

ところが五年後、弟ののり君が二歳児クラスに入園することになった。彼はおしゃべりでお調子者。お姉ちゃんとはちがうタイプなんだねエ、と保育士に笑われながら園生活に慣れこんでいった。

ある日の夕方、門の外にのり君のお母さんと小学生の少女がいるのに気付いた。私は部屋の窓を開け、遠く暗くてよく分からぬ顔に、あやのちゃん？ と呼びかけた。彼女は胸のところで小さく手を振つた。その後も何度か、暗い門の外に立つた彼女が手を振る度に、私のあの悔いは深まつた。

その日、のり君の春休みの荷物を持ち帰るため、お父さんとあやのちゃんが園内に入つて来たのに気付いた。彼女が園内に入るのは卒園以来初めてのことだ。

今度は迷わなかった。私はその時保育していた子どもの手を引いたまま教室を飛び出し、あやのちゃん！ と叫んだ。そして驚いたように傍らに立っているお父さんに、久しぶりなのでお顔を見せて下さい、としばらくで頼んだ。

小さかった彼女の身長は、私の顎の下にあった。かすかな面影しかない。街中で出会つてもきつと分らない。恐る恐る大きくなつたね、と声を掛け小さい子にするように、思わず頭を撫でてしまった。何年生？ と問うと、にこりとして「四月から中学生です。」と答える。数年ぶりに声を聴くと胸が詰まった。握手して「がんばってね。」と伝えたありきたりの言葉に彼女はうなずいた。お父さんがありがとうございます、と言ひ私もありがとうございます、と答えた。

それから親子は門扉に向かつて歩き出した。数メートル行つて彼女は振り返り、小さく手を振つた。私も振り返した。門の前でもう一度振り返り、最後にまた手を振つた。

六年前に卒園した小さかったあの子に、私はやつと、さよならが言えた。

あの子が私の首にかけてくれた愛おしいネックレスは目に見えない。けれどこれからもずっと、私の心の中に揺れ続ける。

準賞 母の歳時記

元田 亮 一

私の手元に一冊の古びた歳時記がある。実業之日本社発行「現代俳句歳時記（春・夏）」監修中村汀女とある。奥付を見ると昭和五十六年七版発行、頒価は一五〇〇円である。俳句を新たに始めようとした初学向けのものであろうか。表紙には薄緑の布様のカバーがされ、横綴じ製本という今ではあまり見られない型である。表紙をめくると見覚えのある母の字で幾つかの俳句のようなものが記されている。

雨降りて萌えいずるまま樟若葉
身障児都忘れの花咲きて
まろやかね日惜しみ姑蒲団干し

歳時記を開くと所々に赤鉛筆で丁寧な傍線が引かれている。真面目で几帳面な母の性格が思い出される。裏表紙には、「昭和五十八年一月二十四日求む」とある。購入時の母は四十六歳である。母は何を契機に俳句を志したのであろうか。俳句を開始するきっかけは、人により様々であるうが、仕

事や生活が一段落し心にゆとりや空白ができた時もそうといえるであろう。その当時の父は五十三歳、サラリーマン生活も最終コーナーを回り先が見えてきた頃であったと思われる。姉は成人を迎え、地元での大学生活を満喫していた。問題児の私は、一浪後によりやく進学が決まり、都内での下宿生活をスタートしていた。

専業主婦かつ教育熱心な母であった。その熱心さは時に疎ましく感じられた。子ども達の教育に興味を示さない父の代わりをせねばとの思いも強かったのだろうか、そもそもの母の性格であろうか、思春期を迎え自由を謳歌したい息子に与っては少々重荷になる母であった。

子ども心にも夫婦仲は円満とは感じられなかった。父は仕事を離れるとゴルフ、釣り、カメラ、登山等々自分の趣味に没頭し家庭を顧みることが少なかった。自宅の居間には、近所の書道家から戴いた書が飾ってあった。「和氣諺々」とそこには揮毫されていた。何かしら家庭内の雰囲気を感じ取っていたのかもしれない。勢い母の熱量は、手間が掛からない

長女ではなく、手間が掛かるが手の焼き甲斐がある一人息子の私へと向かっていった。一方、その頃徐々に自我らしきものが芽生えつつあった私は、母の連日の攻勢をかわすため、タイミングよく増設された子ども部屋に閉じこもり、母の怒りが爆発せぬ程度の勉強をし、残りの時間は小説を濫読し、深夜ラジオにのめり込んでいった。母の前で辛うじて良い子を演じていた私であったが、遂に化けの皮が剥がれる時が来た。その頃、私の教室ではコの字型に机を並べていた。何故か私の机だけは、コの字の真中にポツンと孤島のように置かれていた。詳細は覚えていないのだが、当時の担任教師は、後に福岡市初の女性校長になるやり手であった。かなり気性が強い女教師で、子ども達は恐れおののいていたが、どうも私は血気盛んにも桶突き、敢え無く一蹴されたようである。授業参観が近づくと、私は居ても立ってもいられなくなった。このままの席で当日を迎えると母の驚きそして悲しみはいかほどばかりか。そうであるならば、事前に今の様子を伝えるべきか。いやいや、さすがの女教師であっても授業参観当日には席を戻してくれるであろう。そうであれば、言わぬが仏。冷静なる判断により後者を選択した私は、当日の夜地獄を見ることになった。

文学で身を立てるなど身の程知らずという母の真つ当な意見に屈した私は、法学部へ入学することを条件に念願の上京

を果たすことができた。その後、法曹の道を歩むことはなかったが、母の目論見通りに普通に就職し、社会人としてのスタートを切ることができた。会社生活は山あり谷ありであったが、何とか落馬せずゴール付近まで辿り着いた。

会社生活の第一線から外れた時期に心にぽっかりと穴が空いたような気持ちになった。その隙間を埋めるためなのか、かつての文学青年の魂が蘇り、遂には水明という波止場に流れ着き面倒を見ていただいている。

水明では、山本主宰、網野副主宰他素晴らしい句友の方々に恵まれマイペースで句作りに勤しんでいる。望外にも、令和四年度の新珠賞にも選んでいただいた。その十五句の中に母を描いた一句がある。

きつと母纏はりつくは秋の蝶

幾つになろうとも母の目には、頼りなく無鉄砲な子であったであろう。その息子の世話に一応の目途が付いた安堵感から、ようやく自分が没頭できる趣味として俳句を選択したのかも知れない。その俳句は、家庭における母の寂寥感を幾らかでも和らげてくれたものと信じた。

母は、予てよりの持病である肝臓の病が悪化し、平成二十七年五月に八十歳を目前にして他界した。

準賞 長谷川秋子の天命と俳句

青木鶴城

天命。それは超越的存在としての天が人間に命じ与えたもの。それは身に備わって、変えようにも変えられない運命。或いは天から与えられた寿命。

天命は天にあづけて鴛鴦流る

この句は、長谷川秋子が逝去する十一日前の昭和四十八年一月二十二日に句会「小雪」で詠まれたもので、結局これが秋子の辞世の句となってしまった。

十七音節の文学、俳句は僅か十七文字で人生をも語り尽くしてしまふほどの表現の力を持つ。四季移り変わる自然の諷詠、悲喜こもごもの出来事、心に秘めたる思い、作者自身への叱咤や激励等が十七文字に集約される。

勿論虚もあれば実もある。或いは諧謔に満ちたものもある。ただ俳句は、すべてを語り尽くさない。そこには文字には現われない読者に委ねられた鑑賞がある。

俳誌「水明」を継ぎ、その美貌と知性で俳壇に於いて脚光を浴びつつ、主幹となって僅か三年と五ヶ月で帰らぬ人となつた「水明」第二代主宰、長谷川秋子はいかなる天命を与えられていたのか、長谷川秋子とはどのような人物であつた

か、長谷川秋子の句の背景に有つたものとは何だったのか。一句一句、その背景には作者の様々な事情が存在する。その人となり、その背景となりから秋子俳句の分類と分析により評論を試みる。

秋子は大正十五年に父澤本知水、母よりの三女として東京雑司ヶ谷に誕生する。父は東京電燈会社（現在の東京電力）出張所長を務め、母は東京女医学校を卒業して内科と小児科の医師であつた。

小さい頃の秋子を叔父の山本嵯迷（澤本知水の弟で山本鬼之介の父）が「秋子は黒瞳のバッチリした人形のような童女であつたが、内弁慶で容易に人に寄らず、椎の実のように固かつた。」と言うように、後の社交的で笑顔を絶やさない秋子のイメージからはとても想像できない幼少期の秋子像だが、高等女学校を卒業する頃は闊達な秋子へと変貌を遂げて行つた様である。

一、母として

句集「菊風ぎ」は、秋子が結婚をした昭和二十一年の句からスタートする。一句目は、秋子の代名詞とも言える「髪」



の句から始まるが、二句目以降は、翌二十二年に生まれた長子の薫を詠んだ句が連綿と続く。

ベビー帽に落葉をのせて帰り来ぬ
玩具籠抱き早春の銀座より
ひとりひとり桃の陽を浴び乳歯のぞく
懸命な吾子の一步よ今朝の冬
尿放つ子の泪して冬の月
春泥の子の血吾が唇もて覆ふ
春泥の子の血より哀しき色あるや
夜の颱風鬼子母となりて子を抱く
青葉に泣く園児よ母も独りなる

生後三カ月か四ヶ月の幼児を負ぶつて外出をする秋子、年が明ければ早速子の玩具を銀座のデパートに買い求め、玩具に遊び疲れて眠る子を春の日差しの中に愛しく想い、乳歯が生えたと喜びを周りに披露し、歩き始めの一步に感動し、泥遊び中に怪我をした子の血を口で吸い、台風之夜には子を抱き締め、悪戯を始めた子の成長を嬉しく思う、秋子の母としての普通の姿が赤裸々に綴られる。

結婚、出産、子育て、この頃秋子は女性として、嫁として、母として、日々の小さな変化を純粹に幸せと思い、只々素直に俳句にしていた。よもやこれから色々な出来事を経験し、短い生涯を遂げるとは夢にも思わなかった。作句の中心は子育てに有った。

二、結婚

昭和二十一年十一月、秋子は長谷川かな女の嗣子、博と結

婚する。博は近衛楽団の一流フルート奏者で、とても優しかったが、俳句とは一切縁のない人物であった。

昭和三年、俳誌「枯野」の主宰であったかな女の夫、長谷川零余子の急逝で「枯野」は廃刊となる。その後、かな女は、新たに俳誌「ぬかご」の第二選者となる。それを黙って見過ごせなかった秋子の父知水は、私財を投げ売って「水明」の創刊に尽力をしたものの、終戦を前に家族で福井の若狭へ疎開する。以後若狭に永住することになったが、かな女に仕える情熱は消えず、とうとう秋子をかな女の息子に嫁がせた。

昭和二十二年

春の灯に笛ならひ吾が愛しずか
春の雪恋ふる睫毛のまばたかず
どうだんの花に手紙を恋ふる日々

昭和二十五年

庭の霜他人のごとく親子居る
冬の月いろいろな欲捨て、寝る
菖蒲湯にふたりの個性沈めけり

昭和二十六年

麻疹の子良人は笛吹くよりすべ無し
蟻右往左往われに欠けるもの執拗

結婚当初は、夫の博にフルートを教わり、夫の睫毛にも関心を抱き、どうだんの花を見ては幸せを感じる秋子の結婚生活。やがて長子の薫が誕生する。ところが、愛情を注ぐ子が成長して行く過程で夫との仲が変化して行く。昭和二十六年頃には、ほとんど薫を詠む句が鳴りを潜め、夫への不満の句

が始まる。麻疹の句に至っては、夫を完全に見放しているのに、言いたいことが言えずに「われに欠けるもの執拗」と自分を鼓舞する。
そんな中にあっても、昭和三十一年には次男敦が誕生する。

一と息に木々の芽吸へり産後の瞳
花菖蒲すでに次男坊めきて泣く
青葉雨に若狭の子守唄ふたたび

昭和三十三年

誕生日の子に春のスープの匙まんまる
北陸でおんぶ解かれし児に菜の花
花菜畑の広さに吞まれ稚児まるし
すぐに泣く子の羨し時雨る、夜

昭和三十三年

子の涙ぬるぬる青葉滲ませて
歌ふ児の唇に秋空すつぱり入る

昭和三十四年

泣き癖の子が泣き寒波寄せ付けず
杏熟る暈へ頬をつけ睡る子

昭和三十五年

朝顔に泣くほど好きな父の膝
父に抱かれ蟬に向く瞳のやはらかし
泣けば兄より強し夏帽の鍔赤く

敦が誕生すると、再び子を詠んだ句が多くなる。長男薫の時には子の面倒を見なかった夫がよほど可愛がったのである

うか、父の膝を恋しがる敦や、父に抱かれる敦の姿が登場する。恐らくこの頃は夫婦の關係に回復の兆しがあったのかもしれない。ところが何かが原因で、二人の溝が深まって行くのである。

三、かな女と秋子

「水明」の主宰であり、俳人として一流の長谷川かな女の家人となつた秋子の精神的なブレッシャーは、それは大変なものであつたであろうことは想像に難くない。一家の主婦としての生活のほかに、片時も俳句から離れることのできない毎日が続いた。かな女の秘書として、日々來訪する多くの俳句關係者の接待役として、ある時は名代として、また句会の指導者として、その活躍ぶりは次第に秋子の存在を大きくしていた。ただかな女も夫もひたすら優しい人柄であつたのは、秋子にとって救いではあつたのであろう。

菊花東人形のごと古稀の胸に
テレビは松緑母の座空きしま、時雨る
茸摘む長寿の眉を陽に折りて
綿入れ着て明治は敬語多かりき
母の日のもつとも辞儀の低き母
女一点菊花のごとき受章式
褒章の銀を離れず冬日燦
冬薔薇のふかぶか祝辞聴きゐたり

秋子とかな女の關係はとても良好で、秋子は、かな女の没後「私には、かな女先生だけはまったく思い残りのない、有

りがたい仏さまなのである。とことんまで仕えたという満足感が、このような安らぎを私に与えてくれるのであろうか。私は生前マメマメしく仕えるお嫁さんではなく、母に云われたことだけをしていたというまことに不精で横着なお嫁さんであったが、二十四年という歳月には喜びも悲しみもともに味わい尽くしたという感が強い。」と書いている。俳句の師と弟子として、姑と嫁として、その関係性は良かった。

経本一巻りんだう絶ゆることなき部屋
仏灯を秋思のいろとして消さず
暎に棲む顔一つ殖ゆ栗むく夜
転がりさうに仏飯白し野菊の朝
悼む日の伏す残菊の頬に泥
小春骨壺妬ましきまで添ひ給ふ
糸巻きに母の色あり秋の雲
悲しむもの集まれよ落葉焚く
枯葎記憶の母がうづくまる

かな女逝去後の句にも、秋子とかな女の関係性が良く表れている。かな女の部屋には好きだった、りんどうの花を絶やさず、日々仏壇に向かい、句友とかな女の思い出を語り、枯葎にも想いを馳せる姿が見える。

四、若狭と家族

秋子自身が若狭に住んだのは、戦争で疎開をするほんの短い期間であったが、父母の住む若狭は秋子にとって安住の地であった。小さい時から喘息を患っていた秋子は若狭へ来る体調が良くなった。遺骨を若狭の了念寺にと遺言したもの

そんな背景があつたのであろう。

若狭や家族を詠んだ句は数多く存在する。父のこと、母のこと、姉のこと。

姉昌代の再婚

姉の恋春浪高ささだまらず
桜の幹に恋といふ字を一系列に

父知水脳溢血

春の炉に父を笑はすこと難し
父逝去
稲妻のかすかや父の息を嗅ぐ
稲妻のとゝかぬ奥や父臨終

生母との最後とは知らず

また母と訣る春雪の山の窪

母逝去

夏化粧ふ母を初見ぬ通夜の灯に

若狭にて

笑ふこと多き年酒の揺れどほし
若狭秋色まぶた裏までふるさとよ
行く秋の読経おろおろと父恋し
この湖や生母と紅葉鮒を産む

姉昌代の納骨で若狭へ

椿拾ふ片手に数珠を離さぬ旅
一村親族椿の戸々に姉の噂

椿の墓に納骨の姉一とにぎり

秋子は家族について、「父は私の貧乏時代に死んで、お酒一本も贈ってあげられなかったこと、母には往診靴やセータなどは送ってあげられなかったこと、働かせっぱなしで、一向に楽をさせてあげなかったこと。姉はバスで四十分という近くに住み乍ら、まさかあの若さで死ぬとは思わず、手術のときしか付き添ってあげなかったこと……」と述懐している。家族に対する心残りは、大きかった。

五、女性として

長谷川博と結婚し、かな女の側近となった秋子は、持ち前の性格とその容姿から日増しに存在感を大きくして行く。そんな中、秋子是否応なしに他人からの眩しい視線を感じていた。

昭和三十四年、秋子は作家の三島由起夫と対談をしている。残念ながら対談の内容を残した資料は見つからなかったが、次の二句からその様子が伺える。

わざと足音わざと快活秋服にて
秋の鮎むしりつくされ姦通論

秋子は、時の人であった三島由起夫の対談相手として拔擢されるほどの人物となっていたのである。

また、昭和四十七年には「主婦の友」四月号に、句と愛に生きた注目の女流俳人として長谷川秋子の特集記事が掲載される。

新聞、雑誌、テレビ等色々な人との出会いが増えてゆく中、

かな女終焉の前年あたりから秋子は家を空けるようになる。夫との関係が冷え切って、息子たちも独立した時に、ある出会いの中で芽生えたものが有った。そんな状況の変化が伺える句を上げる

狼吠ゆ 窓から妻の淋しき夜
濯がねば女淋しき五月の夜
冬の川誰もが己が影を捨てに
燃えて燃えて紅葉失ふもの多し
若萩の傷つく息をふと洩らす
叩かれて女乱るる祭りの夜
犬吠ゆる冬山彦になりたくて
眉忘れれば哀しき貌となる春夜
帯解かばかすかに洩るる雪の息
雪あかりわが半生の傷太し
夫との距離はるかに百合の奥蒼し
いそがねば玉子焼け焦ぐ春の月
春草に貞操解かれ女人の墓
夏紅葉妻の名一印にて消ゆる

離婚して本太の家にて

春眠ふとく貧乏ぐらし始めたり
身軽くもならず花冷の髪断ちても
わが乳房小さくなりし春の服
賤しくもなし一人の米を磨ぐ薄暑

結局秋子と博は離婚をしてしまうことになる。かな女の主治医として長年長谷川家の状況を見てきた大畑南海魚氏は、

「離婚のことは、秋子から言い出されていたのであった。俳句をやめたいという決意も私はかな女の重体の場で聞いた。しかし、かな女告別式の夜に、秋子夫妻は秋子が主幹を継承することを運営同人に申し出た。恐らく嵯迷氏の強いすめに屈したからであらう。翌年の五月であったらう、私は博氏の訪問を受けた。秋子の恋愛と離婚の要求についてであった。」と書いている。

六、喘息

秋子の命を奪ったものの、それは持病の喘息であった。五歳の頃から始まった喘息は、年々体を蝕んでいった。秋子の最後の日記によると、容態が悪くなった昭和四十七年の十一月より五反田の喘息専門の杉原博士の元に通い始めて週二回注射を受け、痰を吐く治療を受けていた。

昭和四十八年に入ると、秋子の日記はメモの様な文章に変化していく。元日早々体調が優れず、松の内をほぼ臥せって過ごしているが、七日には例会に顔を出す。十日、婦人句会、十八日、角川パーティーに出席。兜太、井本、克己、角川と会う。(金子兜太、井本農二、行方克己、角川源義か)

十九日、一日具合悪し。ひいひいふ。

二十三日、五反田で痰が取れず遂に逆立ちして出す。ひどく疲れる。体重四十八キロ。

二十五日、二十七日、三十一日、と五反田へ通う。二月一日の記述は無く、二月二日、逝去。

(午前四時半頃、敦君が母、秋子先生に注射。その後静まる。敦君、慶応大付属高校へ登校。八時半頃病状悪化。富田よしさんに電話。よしさんすぐに駆けつける。岡田、島崎両

医師の診療、治療。よしさんが嵯迷先生に電話をしようとするも、医師にとめられる。一時十五分、急性発作のため逝去。十分後に山本嵯迷先生見えられる。額がなお暖かったとか納棺。微笑むごとき美しさ。庭に白梅の花ちらほら。そして寒椿と寒木瓜と……以上落合水尾氏の文)

鬼のぞく窓に夜の咳あるばかり
医に通ふ暑さ父母なきこと切に
秋風に一つの咳を臆病に
注射針の蒼さに緊まる夏至の腕
死を希ふ一瞬冬の薔薇枯らす
椿誕生すでに翳もち折りもち
下萌にうれしきときもうずくまる

秋子は、とうとう喘息という病魔には勝てなかった。表面きは快活に振舞っていても、架せられた宿痾が常に不安を掻き立てた。咳に怯え、痰に怯え、注射に怯え、時には死をも願った。秋子の闊達な姿からは誰もが想像できない心と体の不安を常に抱えていたのであらう。終焉の日記からは壮絶な様子が伺えて、身の毛のよだつ思いを感じさせる。

終わりに

長谷川秋子にとっての天命、それは一体何であったのか。知性と美貌を備え屈託を感じさせない性格は、決して曖昧な生き方をさせなかった。喘息という宿痾はそんな秋子への重荷として神が架せたものであったのだろうか。結局は自分を犠牲にしたことで、宿痾には勝てなかった。とうとう逆立ちをして痰を取ったという姿は、落合水尾氏の言う「和服は、

殊によく似合った。つましく着痩せして艶で、日本舞踊の師匠を思わせる洗練された感覚が、その均整のとれた風姿にゆきわたっていた。」……そんな秋子像からは全く想像も出ない長谷川秋子の現実が有った。

結婚前の秋子がどんな句を詠んでいたのか分からないが、結婚、子育て、父の死、母の死、姉の死、恋、かな女の死、離婚、という渦の中で秋子は俳句を深めていった。そこでは人間長谷川秋子としての天命が全う出来たのだと信じたい。「菊風ぎ」の長谷川秋子の句は、直線的で事実を素直に詠んだものが多い。特別な技法を用いず生の声がそのまま句になっている。

「鳩吹き」になると心象的な要素が加わり奥の深い作品となる。勿論経年の作句力の向上の要素でもあろうが、加わった句の深みと重みには、秋子の短く生きた大きな事を感じるのである。

天命は天にあづけて……秋子は自身の終焉を感じつつも生への希望は捨てなかった。新しい年を迎え、体調が優れない状況の中にあっても「水明」の為に宿痾を乗り越え、主宰としての長谷川秋子を奮い立たせようとした。自分に与えられた天命、すなわち運命として与えられた寿命をもう暫く天に預けなければならぬ、との意思を固めたのである。

鴛鴦流る……鴛鴦は雄と雌とが仲睦まじく寄り添って行動することから仲の良い夫婦に例えられる。連れ添った博との離婚や、結局は成就しなかった新たな恋は、残念ながら鴛鴦とは距離を隔てるものであった。

秋子はこれまでの事実を全て受け容れ、これからの新たな自分を生きようと、この句に託したのである。

最後に次男の敦（作家の三田完・当時十六才の高校生）が水明に寄稿した、母秋子への追悼文を紹介して、本評論の終わりとする。

「無声慟哭」

母はずいぶん早とちりの人であった。いや、母が早とちりだったのではなく、彼女の人生そのものが早とちりだったのかもしたくない。おそらく母自身は俳句作家などにはなりたくなかったのだと思う。祖母が逝去した時、母は一時俳句と決別する意思を持ったといふ……。しかし運命の神は母を長谷川かな女の家嫁がせた上に、彼女を水明のシャーマンにしまったのだ。それでも母は、女のくせにいつぱしの俠気を持った人物だったので俳句との義理に徹し、死神との義理まで引き受けてしまった……。祖母は零余子の死後、その身をかばいながら「妥協」のこつを覚え、八十三才の大往生を遂げたのであろう。しかし、サーヴィス精神の多すぎた母には、それが出来なかった。母がかな女に負けた、ということは、今何かにつけて僕が感じたことである。

参考文献

- 句集菊風ぎ（牧羊社）
- 句集鳩吹き（牧羊社）
- 長谷川秋子全句集（牧羊社）
- 長谷川秋子の俳句と人生（牧羊社）
- 鑑賞女性俳句の世界（角川学芸出版）
- 飯田龍太散文集（春陽堂書店）

水明「水五則」

日高道を

昭和二十一年五月五日、「水明」復刊第一号が発行されたが、かな女は次のように語っている。

「華々しくとはいかない十八頁の水明復刊十六卷一号が出た。島田柏樹画伯の大鯉が水中呼吸するところの勢のよい表紙を付け、水五則に再刊の心意気を託した。」

「水五則」

- ・自ら活動して他を動かしむるは水なり
- ・常に自己の進路を求めて止まざるは水なり
- ・障害に逢い激しく且努力を百倍し得るは水なり
- ・自ら獎まして他の汚れを洗い清濁併せて容るの量あるは水なり

・洋洋として大洋を充たし発しては蒸気になり雲と変じ霰と化し凝っては玲瓏たる鏡となる面して其の性を失わざるは水なり

かな女は昭和三〇年発行の第三句集「鼓笛」の冒頭、次のように述べている。

「最初の句集、竜胆以降の作句を集めたのが第二句集、雨

月であって、昭和十三年、

虫の卵を育て、いたる冬の芝で、終って居る。第三句集鼓笛は、昭和二十年から二十九年までの、約十年間の物を収めた。十四年から二十年のあいだも句作をつづけて来ているのだが、この間に戦争が這入る。恰度、虫の卵を育てる冬芝の、不醒不眠状態のごとく、六年間は空白にして置くことにした。戦争が終り、無事に博も帰還したので、漸く句作の息を吹き返した。」

そして最初の句

水入れて春田となりてかがやけり

かな女にとつて、戦争という大きな嵐を耐えてやっと手にした表現の自由の喜び、そして「水明」復刊に寄せる覚悟が、「水五則」としてその心意気を我々に伝えてくれている。

水明創刊時とは違い、この水明復刊の時こそかな女にとつての水明第二の創刊ということが出来るのであろう。

私の二句



水・明

を詠む

憧れのボート湖水をすべり行く
ボートより見つむる湖の透明度

山本鬼之介

用水を走る白雲曼珠沙華
原爆忌明けの鐘過ぎゆくまに

さいたま 秋谷風舎

若竹に宿る神水含むとき
白日傘たたみ明治の茶舗の前

越谷 阿部幸代

湧水の枝葉掬ふや山滴る
夏旺ん若き僧らの声明よ

さいたま 阿部貞代

半夏生水の習ひを説く老子
明君に名臣ありて竹の秋

網野月を

職を辞し行雲流水あいの風
夏帽子振つて明日は旅の宿

新 暦文

紫陽花や水車ことと蕎麦処
有明の風にをのく浜万年青

荒井俱子

万緑の光映して那須疏水
明早し明けの明星見ゆるころ

飯田忠男

水音に小梨の花の咲きそむる
かの世かと明神池の霧の朝

さいたま 池田珪子

若葉風夢を語りし水呑み場
落雷に探す旅籠の明り取り

東京 石田慶子

逆立ちの朱夏の秀峰水鏡

池田雅夫

天明とともに見開く案山子の眼

溪水を樋で引きをり岩魚飼ふ
短夜の不動明王剣を持つ

さいたま 石山かつ子

水澄むや分銅の錆落としたる

横浜 石井妙子

短夜や新明解に付箋増え

水無月や煙の出でぬ火葬場
目覚むれば廁の神よ明け易し

糸井しるく

生きものの飛ぶよ跳ねるよ田水沸く

さいたま 石井直子

聖五月「ミロ」の明るき赤と青

噴水や水面かすかにビブラート
母しのび灯明点す晩夏かな

伊藤美津子

水滴の流るるグラス夏の宴

石井喜恵

明眸の翳りも美しき夏帽子

蔦温泉湧水浮かぶさくらんぼ
光さす明神池の鴛鴦の沓

稲野幸子

風光る此処は水上バス乗り場

東京 石川理恵

さくら咲き満ち無住寺の明るさよ

山葵田や水の流れを水が追ふ
凌霄花散り敷き路地の明るさに

深谷 井上燈女

甘露水吸ひて飛び立つ山の蝶

さいたま 石黒由美子

明早し参禅清し坊泊り

水色の朝顔二輪朝日燦
明日も晴れむ秩父嶺見えて夕蜻蛉

さいたま 井上玲子

打水や世の移ろひの疾きこと

石関六弦

明るきのすこし残して黒揚羽

水底より顕る役場大旱
鳩の目の明かき空ろや原爆忌

上野和子

遠景に水車のまはる夏邸
雲の峰明日を見つむる赤子と埴輪

さいたま 内田恵子

水田に命宿して稲穂垂れ
夜の明かり灯りや和みのおぼろ月

さいたま 小川洋子

水あめは八尾のみやげ盆踊
話し声四尺花火明るうす

梅澤輝翠

田水入り棚田つぎつぎ歌ひ出す
明け早し早起きの夫草を取る

鴻巣 大塚茂子

曲水や十二単の水鏡
黎明の風にそよげり蓮の花

久喜 梅澤佐江

水揚げの秤はみ出す櫻鯛
夕明り蝶の字凜と師の扇子

和歌山 大橋迪代

泥水にもまれて清し蓮かな
セロの音の優しさ染みる月明かり

さいたま 榎本道代

尾瀬の山水面にあふれ水芭蕉
水音の明けゆくところ水芭蕉

横須賀 大場順子

さうめんを洗ふ水音楽しげに
外見れば新聞配達明やすし

大阪 海老名ノルン

湯けむりや水銀灯に忘れ雪
プランターの曲がりきゆうりを明後日

さいたま 緒方みき子

遠足に水場列なす昼最中
明り取りを清むる麻の艶布巾

遠藤人美

夏山に轟音渡るダム放水
文明開化名残の明治村の秋

岡田宣子

炎昼に水琴窟の音響く
虹立ちて此処に明るき未来あり

さいたま 遠藤伸子

夜濯や今日の終はりの水仕事
夏のれん皆明らかなシニア割

岡田芳春

水晶玉に未来映るか半夏生
「明暗」は未完のままよ夏館

大村節代

濁りなき水に影置く水芭蕉
計り得ぬ己が余生や初明り

白岡 岡本和男

薬指の水晶きらら秋うらら
すつぴんの明眸皓齒りんご好き

草加 小倉倭子

夏の旅富士の湧水手で掬ひ
水明の未来明るく二重虹

さいたま 熊倉千重子

海水浴毒針命中水脹れ

初盆や灯明頼り駆け足で

さいたま 小田三茅

日照り中神水尽きぬ渾渾と
明けの空乱鴉の中を星流る

利根 倉田星歩

打水や路地に迷ひて神楽坂

遠雷や不動明王忿怒相

小野町子

水掬ふ掌みつむ喜寿の夏
明日へと夢繋ぐかに二重虹

草加 河野はるみ

親も子も水掛祭りや容赦なし
明答を求むる吾子や夏嵐

川島夕峰

万物は水に生かされ花は葉に
黎明に蒼をほどく古代蓮

熊谷 越田栄子

炭酸水切るに切れない長電話
花講座の明暗対比野分立つ

和歌山 葛城千世子

夏の旅水玉揺るるワンピース
初富士や明るい光道となり

さいたま 小駒さち子

句作てふ背水の陣夕顔咲く
竜胆の色の未明へ富士初雪

東京 菊池ひろこ

コスモスや空は空色水は水色
白日や明石の蛸の干されゆく

小林京子

暗がりの出水管や浅蜷汁
道迷ひ夜明けを待ちし遍路かな

さいたま 木谷葉子

水玉のロングスカート似合ふ夏
千の松明熊野丸山虫送り

駒谷行雄

水面蹴りうららにはしやぐ女学生
春の宵銀座ネオンの水明り

北山建治郎

安曇野に水の息づく早苗月
山寺に声明めくや蟬しぐれ

五明 昇

水陽炎記憶灰かにゆらぎをり
梅雨明けぬ日がな一日句三昧

さいたま 小山あつ子

水田の少し離れて夏神楽
算段の手の内明かす夏の宵

さいたま 篠原さよ子

虹立つや進水船を打つ淑女
雲海や明星残る縦走路

行田 近藤徹平

湧水の飛び散るしぶき鬼蜻蜒
鬼灯市明けの鐘打つ浅草寺

那須 渋谷さいち

鳥陰の水師砦に鯉のぼり
べた組みの明朝体や春愁ひ

さいたま 境 延昭

夏ひとひ水族館を浮遊する
夜すがらの祭提灯ほの明り

さいたま 下川光子

翡翠や真一文字の水げむり
河鹿鳴く一軒宿のうす明り

杉戸 佐々木史女

「水五則」といふ流れに映える雲の峰
藍染めの旗閃かす梅雨の明

若狭 島津初花

水神の在す祠や滝飛沫
ラムネ抜く明るき声の弾きけり

さいたま 笹本啓子

湧水の音限りなく夏館
鵜の瀬へとつづく松明送水会

さいたま 清水桂子

螢舞ふ知覧のまほら水清し
山肌を蔽ふ明りの禅庭花

椎名泰子

入相の水のにはひの合歓の花
夏帯の紺聡明なひとの闇

清水ひとみ

雨の綾追ひつ追はれつ水馬
明易しはるかに聞こゆ船の笛

穴戸洋子

「おはよう」と花に水やり夏の朝
明日のため西瓜一切れ残しとこ

東京 清水美千子

佳き人の香水匂ふ母の香よ
明日信じ靴ひも結ぶ麦の秋

篠崎紀子

水纏の空に息吹ける若緑
年明くる昭和百年富士泰然

さいたま 霜多光代

夏場所の小兵なみなみ力水
来ぬ秋の神橋はゆる川明り

伊奈 菅原卓郎

二リットルの水飲みつくす酷暑かな
明認は余白に書かれ柚子の花

所沢 関根千恵

奥多摩湖青き水面に遊び舟
明易し旅路の窓に港の灯

さいたま 菅原真理

早苗田に水張る音や米価高し
透明な水に色有り秋の湖

町田 瀬戸雄二郎

水郷に菖蒲舟ゆく嫁ぎゆく
もつぎりの冷酒厄明け祝酒

吉川 杉浦千祐

竜胆の紫映ゆる水鏡
田植機の音けたましや夜明前

さいたま 染谷風子

風薫り揺れる水玉ワンピース
明星に願ひかけたる宵祭

さいたま 鈴木和子

恩寵のルルドの水や聖五月
藍浴衣君の明眸いつまでも

反町 修

さらさらとこぼるる記憶夏の水
洞窟の揺らぐ菩薩や夏灯明

鈴木香音子

著我の花水子地蔵に吾子思ふ
不動明王の眼ぎらぎら背な炎ゆる

和歌山 高橋満耶子

袋田に水音戾す慈雨走る
梅雨明けの陽が赤々と威張りをり

鈴木藻好

日盛りの川に水切り吾子と父
夏空に明星探す夜明け頃

さいたま 武田重子

手水鉢に映る青葉の眩しさよ
明眸の子の追ひかけて夏の蝶

川崎 鈴木玲子

夕虹や水鏡なり別所沼
雪柳夕やみの空明るくす

田口文子

船曳いた川水配られ夏柳
明け星や北の地果てなく麦畑

さいたま 清山尚己

浴衣着て水天宮に祈願掛け
白足袋や神田明神御輿出す

田中章嘉

小芝居の直ぐ見破らる水中花
明月院片蔭し初む緋毛氈

さいたま 田中弘子

沢蟹を獲る水澄む川や空青し
明日葉の天ぶら旨し冷し酒

さいたま 野村美子

古代蓮地下より溢る水に立つ
柿若葉明るく戦ぎ空にゐる

寺町知子

井戸水をいつき飲みする夕涼み
明月やかけ忘れたる蔵の鍵

和歌山 西浦千枝子

吾子発たす菜の花明り水明り
銃眼を覗く搦手花明り

和歌山 十倉和子

流れ込む水音清し青田かな
草笛の音色明るき野良帰り

さいたま 西幅公子

母茫茫水に流され往く螢
明眸の座せば懐かしき白牡丹

若狭 鳥羽和風

白鷺や小さく跳ねし水の音
聞き逃すシェフの説明日雷

藤岡 野口和子

涌きいづる水に沈むや葛饅頭
くもりのち雨の明るさ四葩かな

飛永 鼓

水底の子らの呼ぶ声沖縄忌
津軽の地昏き夜明けの桜桃忌

さいたま 羽島秀子

夏場所や力士に力水をつけ
「水明」の流れ滔滔夏の川

横浜 永野史代

床涼み水面に踊る光かな
夏未明野天風呂から檜ヶ岳

若狭 畠中風花

水槽の亀は猛暑にバタバタと
明けくれば蟬飛び立ちて穴ばかり

和歌山 南條きわゑ

尾瀬ヶ原歩荷の汗と水芭蕉
夏休み明るき未来待ち望む

東京 畑宮栄子

夏至の日や井戸水飲んで喉冷やす
夕散歩宵の明星輝く野

さいたま 野平美紗子

かな女忌や水は方円に別所沼
文楽の口三味線や明けの月

若狭 原田自然

お揃ひの水玉模様サンドレス
キャンプ村まだ明け残る星の数

高崎 原田 秀子

水筒に入るる山水遠郭公
明日担ふ鳥の子どもや青葉潮

さいたま 保坂 翔太

溪流の水明りして青葉かな
みちのくの明けゆく街の落葉かな

さいたま 播磨 進

炭酸水で割りし梅酒を一気飲み
思ひ切り明るきものを更衣

星野 和葉

涼しさや打つ音響く水車小屋
明けいそぐ風鈴まつり宴さかり

樋口 妙子

白南風や霊水汲みつ山路入る
明け初むる明智平や山滴る

前田 夏野

水音はほのか螢の息づかひ
明くる戸のかすかな風よ夏の朝

樋口 元美

早乙女の眩しき手足水をさす
武蔵野を明かき雨音花菖蒲

曲淵 徹雄

赤蝮水の足りない水の星
赤蝮明日の見えない明日の星

日高 道を

青葉濃し水落遺跡に水時計
蛸食みつ明石や須磨の話など

横浜 正木 萬蝶

空色のタクシー拾ふ雨水かな
明日来ると出でし病棟秋の声

若狭 檜鼻ことは

昭和百年水明九十五年花吹雪
花水木明るく歌ふ応援歌

相模原 町野 広子

夏山を登れる人の揃ひ水
明日への今日の全力大夕焼

さいたま 平野 楽

水神を洗ふひと影晚夏光
なほ一声明るきかたへ秋の蟬

さいたま 松井 由紀子

大切に水割りで飲む古梅酒
明るめば人の気配や秋の声

横浜 福田 千春

滴りやお助け水の待つ霊山
沖の石漁火明かし夏の宿

若狭 松宮 保人

ご先祖も水呑み百姓田草取る
一心に穴掘る亀や明易し

若狭 松村笑風

滴りて大河へ水のころろざし
蓮の葉に雨つぶまろぶ夜明かな

上尾 室井早都子

背伸びして水を与える釣忍
提灯の明かりつぎつぎ盆送り

東京 松山清子

湧水もやがて大河に緑の夜
夕闇に鉄砲百合の明るさよ

さいたま 茂木和子

一滴の水が大河に春うらら
不動明王の慈愛あふれて山若葉

平塚 丸屋詠子

さらさらと水菜をあらふ水のおと
船中で八朔を食ふ夜明けかな

元田亮一

水郷に花嫁御寮著我の花
不動明王の炎燃え立つ土用入

さいたま 丸山マスマ

翠陰に雲水憩ふ山清水
月明のいづくか桜散りをらむ

本橋稀香

水鏡己を愛でる桜かな
旧友は明日を語る夏の山

三浦真由美

水引草の撓ふリズムは風まかせ
源氏螢の明滅恋の息づかひ

森 和子

一水の恵みの巡る走馬灯
明治より紡ぐ言の葉不断草

皆川更穂

鏡なす水甕にいま寒満月
暮れてなほ明るき水路柳の芽

川口 森川義子

手水舎に寄りし一息夏の午後
明けやらぬ眠りの浅き夏の夜

三森恵子

虹の海分けて水陸両用車
肌脱や元氣短命明治人

さいたま 森下山菜

蛇口より熱水出づる大暑かな
先人の遺せし水輪明かるしや

宮崎チアキ

雨の水雪へと変はるまさに今
明石大橋臨む定宿風光る

森下美智枝

水澄みて夜に誘はれし鼓星
明星や有明月の手を取りて

さいたま 森田恵美子

雲の峰水平線を進む船
地虫鳴く月明の道影二つ

さいたま 湯浅 和

葛青葉こんもり包む水車小屋
べら釣り船波を蹴立てて明石浦

神戸 森本早苗

満々の田水きらめく五月かな
好きな鳥踊り明かして任地去る

上尾 横山君夫

水清きふるさと思ふ夏盛り
明け易き夏の盛りの夢短か

さいたま 門真宏治

夕風や海分かつごと水脈走る
熱帯夜明けの明星出づるまで

さいたま 横山礼子

菖蒲田の水清くして空うつし
明神祭男衆の汗光りをり

東京 柳父はる

水を飲む快樂もまた盛夏なり
学び舎の明かり明るし夏の雨

吉川拓真

名水の豊かな国土涼新た
春暁の空に明星孤高たり

さいたま 山岸久美子

霊水の三筋の光那智の滝
寝れぬ夜のスマホ明滅月おぼろ

綿引まりこ

初釜や水屋に出番待つ名器
白梅や縁切寺の薄明り

山口 富子

本水に響動めく客や夏芝居
穏やかに不動明王今朝の春

綿貫ひさの

たつぷりと水の張られし青田かな
一畝に残る花菜の明りかな

若狭 山崎郁子

七夕や打水をして神楽坂
明易し二度寝を誘ふ鳥の声

さいたま 山下ユリ子

☆

☆

水明年譜

九十五年のあゆみ

昭和5年9月創刊号より

令和7年9・10月号まで

五明 昇 編

昭和五年

・水明創刊：九月一日
・発行兼編集人：澤本知水
・発行所：東京府豊多摩郡杉並町天沼四七七
水明社

・雑誌選者：長谷川かな女

・表紙絵：長谷川かな女：九月

・座談会「創刊号を評す」：十月

（出席者）長谷川かな女、はる子、佐藤松枝、

高木てい子、開原冬草、高木丁二、草香薫

春、佐藤浩悠、花輪山思郎、尾崎木星、新

田豊、西野川々、澤本知水、杉山十枯

・長谷川かな女主宰推戴祝賀会（浦和市太田

窪幸楽）：十一月

・常任幹事委嘱：十二月

開原冬草、佐野規魚子、岩崎樂石、高木丁

二、澤本知水

昭和六年



長谷川かな女

・長谷川かな女主宰就任：一月
・課題句選者推薦発表：一月

開原冬草、佐野規魚子、金子せん女、岩崎
楽石、亀井初九、高木丁二、尾崎木星、草
香薫春、庭山曉雲、新田豊、澤本知水

・最初の零余子忌特集号発行：八月

・最初の夏行句会報発表：十月

・長谷川零余子句集刊：十二月（序文：飯田
蛇笏 装幀：森田恒友 解説：長谷川かな
女）

昭和七年

・課題句選者推薦発表：七月

浅井竜男、佐藤浩悠、星野茅村、石原洪舟、
久岡杏南子、奥田雀草、半谷絹村

・発行所町名変更：十一月

東京市杉並区天沼二丁目四七七

・表紙絵 島田柏樹：一月から 森田恒友：
五月から

昭和八年

・夏行句会：七月（上野無極亭）

・表紙絵 高取稚成：七月から 島田柏樹：
九月から

昭和九年

・課題句選者推薦発表：一月

洪木三思、山本嵯迷、加藤不二也、宗久月
文、山田蛙郎

・金子せん女句集「夏草」刊：一月

・表紙絵 高取稚成：一月から 島田柏樹：
五月から 高取稚成：九月から

昭和一〇年

・岩崎楽石句集「鳥の巢」刊：一月

・座談会「水明の前衛」第一回：六月

（出席者）長谷川かな女、高木丁二、澤本
知水、草香薫春、尾崎木星、山田蛙郎、新
田豊、関口懷石、森山奇山他

・俳句手帖（水明版）発行：七月（拾八銭）

・岩崎楽石（常任幹事）逝去：十二月

・表紙絵 島田柏樹：一月から 川崎小虎：
五月から 島田柏樹：九月から

昭和一一年

・新選者推薦発表：一月 伊藤瓢石

・夏季講習会開催 八月（西多摩郡三田村楽々
園）

・表紙絵 川崎小虎：一月から 眞垣武勝：
五月から 長谷川泰由：十月から

昭和一二年

・長谷川零余子句碑除幕：四月（堀ノ内福相
寺）

「木蓮に翔りし鳥の光哉



長谷川零余子

零余子」

・課題句選者推薦発表：七月

船渡葱月、森山奇山

・表紙絵 島田柏樹：一月から 華宵：六月
から 島田柏樹：九月から

昭和一三年

・山本嵯迷東京転任：六月

・座談会「水明の婦人作家を語る」：八月
（出席者）長谷川かな女、神野三巴女、さ
くら、高木丁二、澤本知水、森山奇山、森

田桂城、杉五樹、高橋梨丘、村尾芦舟、研
水、入交露舟、田幸忠々

・表紙絵 中川芳雄：一月から

昭和一四年

・長谷川かな女随筆集「ゆきき」刊：六月

・水明十周年記念大会：九月（上野無極亭）

・水明十周年記念号発行：十月

・長谷川かな女句集「雨月」刊：十月

・新選者推薦発表：十月

森田桂城、多田てりな、嶋村花水、伊藤笛舟、木村立桐、服部一木、渡辺俳瞳、高木てい子、内田わかな、佐藤松枝

・表紙絵 島田柏樹：一月から

昭和一五年

・新選者推薦発表：八月 高橋梨丘

・船渡葱月逝去：十二月

・表紙絵 眞垣武勝：二月から 島田柏樹：六月から

昭和一六年

・昭和一五年度新人水明賞作家に高橋梨丘：一月

・新選者推薦発表：三月

田幸苾々、白子きくよ

・雑誌第二集選者に左記追加：四月

関口懷石、村尾芦舟、鴨田芙蕖、松本朱塔、森脇飯之、筒井野耕人、吉沢ひさ子、大作十九楼、藤井みつ子

・太平洋戦争勃発：十二月

昭和一七年

・神野三巴女句集「松の華」刊：十月

昭和一八年

・関口懷石逝去：八月

・日本出版会整備本部の要請に基づき水明終刊決定：十二月

昭和一九年

・情報局雑誌資格審査委員会に於て水明の存続認めらる：二月

・久岡杏南子逝去：三月

・金子せん女逝去：十月

昭和二〇年

・戦局激化に伴い自然休刊

・澤本知水 若狭に疎開

昭和二一年

・澤本知水上京、水明復刊に尽力

・復刊第一号（第一六巻第一号）発行：五月

・発行所：浦和市岸町四丁目一五〇

・七星会創立：十一月

・長谷川博、沢本秋子結婚：十一月

昭和二二年

・長谷川かな女作「真紅の衣」：大阪中央放送局：五月

「春の夜の灯を消せばなほ真紅の衣

かな女」

昭和二三年

・長谷川かな女還暦記念百幅頒布会：十月

・星野紗一、山本明子（明世）結婚：四月

・編集委員会左記陣容により結成：六月

高木丁二、佐藤浩悠、山本嵯迷、尾崎木星、大作十九楼、星野茅村、嶋村花水、森山奇山、森田桂城、高橋梨丘

・三國十四逝去：六月

・長谷川かな女随筆集「雨月抄」刊：九月

・神野三巴女句集「初時雨」刊：九月

・大熊輝一句集「土くれ」刊：九月

・編集委員会へ左記三氏参加

星野紗一、片平杜翠、亀井新一

昭和二四年

・「青抄会」結成発足：一月

山本嵯迷、辰己雅子、島崎秀子、長谷川秋子、星野明世、西村晴子、星野紗一、山本紫黄

・水明春の大会第一回：四月

・水明東京例会再開：四月

・雑誌「鳥羽谷」（若狭大鳥羽）発行：八月

昭和二五年

・水明読者を中核とした「水明会」誕生：一月

・水明賞創設：四月

・第一回水明賞 山本嵯迷

（59）

・長谷川零余子句碑除幕：四月
（群馬県鬼石町）

「山水騒乱たり新芋生れけり」

零余子」

・若松句会発足：十月（銀座若松）

昭和二十六年

・長谷川かな女 高浜虚子との初句会放送に
参加：一月

・第二回水明賞 伊藤笛舟（俳句作品）、佐

藤浩悠（俳論）：五月

・長谷川零余子・かな女比翼句碑除幕：六月

（北海道美唄）

「雪を見ねば蝦夷ものたらず秋の蝶」

零余子」

「花路をわけて石狩川となれり」

かな女」

・水明二〇周年記念俳句大会：十月（鶴見総
持寺）

・水明二〇周年記念関西大会：十一月（宝塚
中山寺成就院）

・岩崎楽石句碑除幕：十一月（桐生市岡公園）

昭和二十七年

・水明二〇周年記念特集号発行：一月

（特別寄稿）高浜虚子、水原秋櫻子、石塚

友二、石田波郷、星野立子、阿部みどり女、

高橋淡路女、飯田蛇笏、島東吉

・第三回水明賞：五月

森山奇山、高橋梨丘、相沢静思

・澤本知水（初代発行兼編集人、長谷川秋子
実父）逝去：九月



澤本 知水

・表紙絵 別車博資：一月から 渡辺武夫：
九月から

昭和二十八年

・第四回水明賞：五月 山本嵯迷、片平杜翠

・大作十九楼逝去：五月

・長谷川かな女句碑 松の花会の発起により

浦和調公園に建立：十一月

「生涯の影響ある秋の天地かな」

かな女」

・表紙絵 高田誠：四月から 長谷川博：十
月から

昭和二十九年

・第五回（昭和二十八年年度）水明賞：四月

高木てい子、高橋梨丘、森山奇山、片平杜

翠、長谷川秋子

・「水明会」を拡大強化して、「水明維持会」
が結成され、左記五氏に常任委員委嘱：
十一月

山本嵯迷、星野茅村、古橋桂花、岡田銀溪、

大畑南海魚

・相沢静思・綾女句集「銀婚」刊：十一月

・表紙絵 増田三男：一月から

昭和三十〇年

・神野三巴女逝去：一月

・長谷川かな女第三句集「胡笛」刊：三月

・昭和二十九年水明賞：四月

正岡陽炎女、中島花楠、大畑南海魚

・水明三百号記念祝賀会 九月（上野韻松亭）

・編集委員を左記七氏に委嘱：九月

山本嵯迷、星野茅村、岡田銀溪、大畑南海

魚、中島花楠、星野紗一、石塚まさを

・水明三百号記念特別号発行：十一月

・第一水明抄刊：十二月

昭和三十一年

・開原冬草（元常任幹事）逝去：二月

・阿部三婦句集「化転」刊：三月

・昭和三〇年度水明賞：四月

山本嵯迷、長谷川秋子、岡田銀溪

・星野茅村句集「くぬぎ」刊：六月

・新珠賞の新設：九月

・第一回新珠賞 藤巻静子、星野紗一

・長谷川かな女古稀祝賀会：十月（上野・韻松亭）

・表紙絵

島田柏樹：十月から

昭和三二年

・吉沢ひさ子句集「あじさい」刊：三月

・昭和三一年度水明賞 藤巻静子：四月

・第二回新珠賞 玉置石松子、西村晴子：五月

・中島花楠逝去：十二月

・昭和三三年

昭和三三年

・「季音欄」新設：一月

・発行所委員（編集委員兼任）左記九氏に委嘱

・山本嵯迷、星野茅村、星野紗一、大畑南海魚、岡田銀溪、森山奇山、石塚まさを、福岡徳郎、長谷川秋子

・昭和三三年度水明賞：四月

山本嵯迷、大畑南海魚、東早苗、森田桂城、長谷川秋子

・昭和三三年度題詠選者、左記四氏に委嘱：四月

森山奇山、木村立桐、正岡陽炎女、半谷絹村

・長谷川かな女句碑除幕：四月（群馬県三茗湖畔）

・「むさし野の鳥くる松の芯無限かな女」

・第二水明抄刊：四月

・第三回新珠賞：七月

佐藤緑芽、勝野百合子、中尾寿美子

・正岡陽炎女句碑建立：七月（北海道美唄市）

・故澤本知水句集「夏炬」刊：八月

・島田柏樹（表紙絵作者）逝去：十一月

・故中島花楠句集「花楠」刊：十二月

・昭和三三年度水明賞：四月

石塚まさを、藤枝加津江、佐藤緑芽、福岡徳郎

・第四回新珠賞：八月

落合水尾、吉田正、小田鳥迷子

・内田わかな逝去：八月

・水明三五〇号記念大会：十月（浦和市医師会館）

・長谷川かな女隨筆自伝「小雪」刊：十一月

・表紙絵 直原玉青：七月から

・昭和三五五年

・水明三五〇号記念特集号発行：一月

・NHK新春初句会として水明句会放送：一月

・（出席者）長谷川かな女、山本嵯迷、佐藤浩悠、大畑南海魚、石塚まさを、高木てい子、長谷川秋子、藤巻静子

・昭和三四年度水明賞：四月 島津城子

・第五回新珠賞：七月 富田よし、大木紺青

・故内田わかな句集「わかな句集」刊：九月

・「青苑集」新設：十一月

・第三水明抄刊：十二月

・昭和三六年

・大畑南海魚句集「火喰鳥」刊：三月

・昭和三五年度水明賞：四月 落合水尾

・長谷川かな女句碑除幕：四月（浦和・別所沼畔）

「曼珠沙華あつまり丘をうかせけりかな女」

・水明関西大会：七月（芦屋会館）

・第六回新珠賞：七月

浅野耕月、薄井登美女

・星野茅村（元常任委員、編集委員、星野紗一主宰実父）逝去：九月



星野 茅村

・神野溪石逝去：九月
 ・小松原秀峰句集「あわ雲」刊：九月
 ・正岡陽炎女句集「雪炎」刊：九月
 ・長谷川かな女、埼玉文化賞受賞：十一月
 ・落合水尾句集「青い時計」刊：十二月
昭和三十七年

・昭和三十六年度水明賞：四月
 ・小泉小泉、福岡浪子、小田鳥迷子
 ・竹村やす子、松本朱塔逝去：四月
 ・第七回新珠賞：七月
 ・中山玲子、木村秋峰、小川久夫
 ・星野茅村遺句集「くぬぎ第二集」刊：九月
 ・長谷川零余子句碑除幕：十一月（名古屋市八事音聞山）

「岐阜行灯の白さ好もしともし見る

零余子」

昭和三十八年

・昭和三十七年度水明賞：四月
 ・横道秀川、佐野蹊子
 ・第八回新珠賞：七月
 ・荒木美也子、宍戸祥二
 ・長谷川かな女句集「川の灯」刊：十月
 ・長谷川かな女喜寿 水明四〇〇号、「川の灯」出版記念会：十月（上野・精養軒）
 ・長谷川かな女、浦和市名誉市民に推さる：十一月
 ・藤井みつ子句集「なぎさ」刊：十二月

昭和三十九年

・水明四〇〇号記念特集号発行：一月
 ・（特別寄稿）富安風生、山口青邨、阿部みどり女、星野立子、飯田龍太、石川桂郎、殿村菟絲子、柴田白葉女、池内たけし、石塚友二、高柳重信、楠本憲吉その他
 ・論説委員左記三氏に委嘱：一月
 ・伊藤通畦、横道秀川、木村立桐
 ・新田豊逝去：三月
 ・「定本かな女句集」限定版刊：三月
 ・昭和三十八年度水明賞：四月
 ・神野ともえ、佐野蹊子、杉本文彦
 ・長谷川かな女、埼玉県文化功労賞受賞：五月

月

・第九回新珠賞：七月 坂本欣司、榎本具子
 ・洪木三思逝去：八月
 ・山本嵯迷句集「ばらの虫」刊：八月
 ・原黙杉逝去：十月
 ・佐藤浩悠・松枝合同句集「檜垣」：十一月
 ・玉置石松子「葉草歳時記」刊：十一月
昭和四〇年

・伊藤通畦句集「冬の蜂」刊：三月
 ・昭和三十九年度水明賞：五月
 ・西村晴子、中山玲子
 ・高木丁二、てい子合同句集「水流」刊：五月
 ・第一〇回新珠賞：七月

・大内敏子、瀬下黄昏
 ・川口土曜会合同句集「冬扇」刊：九月
昭和四十一年

・力石郷水句集「橘香」刊：二月
 ・日吉登美女句集「蒲公英」刊：四月
 ・水明春の大会・長谷川かな女傘寿祝賀会：六月（埼玉会館小ホール）
 ・三笠宮臨席、楠本憲吉氏講演
 ・昭和四〇年度水明賞：六月
 ・石原宇苗児、大木紺青

・河合利仔子句集「里桜」刊：六月

・第一一回新珠賞：七月

・田中幹青、阿部正一郎

・林間俳句学校四〇年振りに再開（第三回）：

八月（谷川温泉相沢山荘）

・長谷川かな女、紫綬褒章受章：十一月

・守都千賀女句集「二本の柳」刊：十一月

・相沢綾女逝去：十一月

・高木丁二（常任幹事）逝去：十二月

昭和四二年

・正岡陽炎女逝去：一月

・山崎薫永句集「ふるさと」刊：三月

・みなみ句会合同句集「みなみ」刊：三月

・長谷川秋子句集「菊風ぎ」刊：五月

・昭和四一年度水明賞：五月 小内春邑子

・第一二回新珠賞：七月

・石上しまえ、白石のぶ子

・藤巻静子句集「未明」刊：九月

・相沢静思・綾女合同句集「撒華」刊：九月

・福岡穂邨句集「山鳩」刊：十月

・岡田銀溪句集「溪泉」刊：十一月

昭和四三年

・鈴木瑛女句集「篠の子」刊：四月

・昭和四二年度水明賞：五月 小内春邑子

・玉置石松子句集「手品師」刊：五月

・東頼遺句集刊：五月

・古橋桂花句集「灯船」刊：六月

・第一三回新珠賞：七月

・佐々木久代、飯村清子

・相沢綾女句碑除幕：八月

・長谷川かな女自叙随筆「続小雪」刊：十一月

月

・西村晴子句集「朱甕」刊：十一月

昭和四四年

・古橋桂花句集「虎落笛」刊：三月

・昭和四三年度水明賞：五月 穴戸祥二

・長谷川かな女第六句集「牟良佐伎」刊：五月

月

・伊藤通睦句集「解水期」刊：五月

・第一四回新珠賞：七月

・富田恒則、内田吾亦紅

・長谷川かな女永眠：九月二二日午前三時

一〇分 享年八二歳

・長谷川かな女浦和市民葬：九月二七日（長

久山円蔵寺 法名慈宏院水明日照大姉）

・長谷川かな女勲四等宝冠章受章

・長谷川秋子 水明主宰推戴：十月



長谷川秋子

・長谷川かな女追悼号発行：十二月

（特別寄稿）富安風生、山口青邨、山口誓

子、池内たけし、角川源義、安住敦、瀧春一、

渡辺桂子、殿村菟絲子、柴田白葉女、鈴木

真砂女、細見綾子、稲垣きくの、野沢節子

その他

・伊藤笛舟逝去：十二月

昭和四五年

・表紙絵 長谷川かな女遺作より：一月から

・長谷川秋子新主宰のもとに左記陣容により

水明運営委員会結成：一月

委員長 山本嵯迷

副委員長 佐藤浩悠、吉沢ひさ子

総務担当委員 石塚まさを、大畑南海魚

相沢静思、福岡浪子、藤枝加津江

経理担当委員 岡田銀溪、福岡穂邨

編集担当委員 星野紗一

・「水明集」同人作品欄として新設：四月



山本 嵯迷

- ・倉上八重子逝去：五月
- ・山本嵯迷句集「風蘭の帖」刊：六月
- ・落合水尾句集「谷川」刊：六月
- ・保泉秩舞逝去：六月
- ・第一五回新珠賞：七月
- ・梅原啄朗、広瀬秋良
- ・藤枝加津江句集「杉の背」刊：八月
- ・横道秀川句集「青き繁殖」刊：八月
- ・第一回りんどう忌・かな女句碑除幕式：九月
(堀ノ内福相寺)
- 「羽子板の重きが嬉しつかで立つ」
かな女
- ・中山惟紅子句集「ゆふき」刊：九月
- ・木村秋峰句集「獅子座」刊：九月
- ・小内春邑子 埼玉文学賞受賞：十一月
- ・第五水明抄刊：十二月
- 昭和四十六年
- ・第一回水明同人会：四月(浦和市民会館)

同人規約を一部改訂、運営委員会を運営同人会とする。

新運営同人 落合水尾、小内春邑子

・昭和四五年度水明賞：七月 広瀬とし

・西村晴子句集「原生林」刊：五月

・藤田隆子句集「独楽」刊：五月

・内田菊江句集「花の輪」刊：五月

・第一六回新珠賞：七月 星野明世、水野麗

・長谷川秋子句集「鳩吹き」刊：九月

・神野ともえ句集「山椿」刊：十月

・半谷絹村遺句集：十月

昭和四十七年

・福岡穂郎(運営同人) 逝去：一月

・木村秋峰第二句集「妊子稲」刊：一月

・大畑南海魚句集「愛河」刊：二月

・水明五百号特集号発行：四月

(特別寄稿) 富安風生、阿部みどり女

・長谷川零余子句碑除幕：四月(群馬県境町)

「行秋や長子なれども家嗣がず」

零余子

・水明五百号記念大会：五月(上野精養軒)

・昭和四六年度水明賞：五月 星野明世

・第一七回新珠賞：七月

・小林京子、波多野寿子

・木村立桐逝去：十一月
昭和四十八年

・長谷川秋子主宰急逝：喘息発作のため、二月二日午後一時一五分 享年四十六歳

・水明葬による葬儀並びに告別式：二月十一日(浦和市玉蔵院 法名釈尼秋華)

・新主宰に星野紗一推戴：二月一日



星野 紗一

・山本嵯迷(元水明運営委員会委員長(星野紗一主宰夫人明世の実父) 永眠：二月二十五日午後九時三五分 享年七八歳 法名光寿院 釈嵯迷居士)

・星野紗一、明世合同句集「ねばりひき」刊：二月

・編集長に遠山喜美子就任：四月

・長谷川秋子追悼号発行：四月

(弔辞) 畑和知事、相川曹司市長、水原秋

櫻子、殿村菟絲子、五所平之助、金子兜太、

柴田白葉女、松沢昭、加藤知世子、滝春一、

高柳重信、鈴木真砂女、古賀まり子、土岐雄三、古橋桂花、神保光太郎、南部憲吉

・表紙絵 長谷川かな女遺作から直原玉青氏に替る：四月

・長谷川秋子句碑除幕：四月（群馬県鬼石町神流湖畔）

「空と空つなく吊橋風光る

秋子」

・澤本知水・山本嵯迷句碑除幕：四月

（福井県大鳥羽松の鼻公園）

「山女やく煙入りぬ花しぐれ

知水」

「沖の石にかざす照葉ぞ山婦来

嵯迷」

・昭和四七年度水明賞：六月 田村九路

・第一回水明吟行会：七月（桐生 吾妻・水道山）

・昭和四八年度新珠賞：七月 水沢竜星

・村尾芦舟（蕉雨女夫君）逝去：九月

・「水明の旗」制定 各支部へ伝達：十一月

昭和四九年

・第一回如月忌（秋子忌・嵯迷忌）：二月

（浦和市民会館）

・昭和四八年度水明賞：五月 小林京子



山本 紫黄

・行事部長に山本紫黄就任：六月

・昭和四九年度新珠賞：七月

・松原歌子、大澤玲子（準賞）小林美夜子

・長谷川秋子句碑除幕：十月

（若狭上中町天徳寺瓜割公園）

「大吠ゆる冬山彦になりたくて

秋子」

・第六水明抄刊：十月

昭和五〇年

・新春座談会「実作のために」：一月

（出席者）星野紗一、小内春邑子、落合水尾、山本紫黄

・佐藤浩悠（元水明運営委員会委員長）逝去：一月

・古橋桂花句集「続虎落笛」刊：四月

・佐藤松枝（季音同人）逝去：五月

・落合水尾「長谷川秋子の俳句と人生」刊：五月

・昭和四九年度水明賞：五月
松原歌子、中村千絵

・新運営同人委嘱：六月 草香薫春

・昭和五〇年度新珠賞：九月

・小林美夜子（準賞）市田一虚生、山本松枝

・嶋村花水（季音同人）逝去：十一月

昭和五一年

・新春女流放談「水明男性作家を語る」：一月

月

（出席者）星野紗一、星野明世、遠山喜美子、中山玲子、西村晴子、小林京子、佐々木久代

・「長谷川秋子全句集」刊：四月

代

・水明五五〇号記念特別号発行：六月

・水明五五〇号記念祝賀大会：六月（目白・椿山荘）

（祝辞）井本農一、三谷昭、柴田白葉女、若杉慧、草間時彦、岸風三樓、原裕、松沢昭、阿部完市、三橋敏雄、河野南畦

・玉置石松子句集「水晶婚」刊：三月

・水明バッジ制定：六月

・新運営同人：六月 小泉小泉、駒崎柿帝

・昭和五〇年度水明賞：六月

古我菊治、佐々木久代

・古橋桂花句集「敗荷」刊：六月

・平井山淑子・しのぶ句集「青炎」刊：六月

・関西例会発足：七月（第四日曜日）

・昭和五一年度新珠賞：九月

・須永洋子、関口正子（準賞）市田一虚生、

台野たけを、高橋さだ子

・横道秀川句集「銀杏並木」刊：九月

・伊藤通睦（季音同人）逝去：十一月

昭和五二年

・座談会「新春放談」：一月

（出席者）星野紗一、小泉小泉、遠山喜美子、

山本紫黄、落合水尾、小内春邑子、星野明

世、駒崎柿帝

・森山奇山（元発行所委員）逝去：二月

・星野紗一句集「木の鍵」刊：五月（現代俳句選集）

・昭和五一年度水明賞：五月

・立川京子、山本鬼之介

・花輪恒太郎逝去：五月

・小森里桐逝去：六月

・古橋桂花句碑除幕：六月（浦和調公園）

「大銀杏おのが落葉の中に立つ」

桂花」

・昭和五二年度新珠賞：九月

高野万里、市田一虚生、山本松枝

・合同句集「麗和」刊：十一月

昭和五三年

・座談会「新春放談」（発行所例会代表による）：一月

（出席者）星野紗一、山本鬼之介、小泉小泉、

日吉登美女、草香薫春、国領恭子、立川京

子、星野明世、遠山喜美子

・新運営同人：二月 出井一雨（行事担当）

・季音賞の設定：二月（昭和五三年度より）

・季音作家の創作意欲を促進させ、季音欄の充実を図るため、新たに「季音賞」を設け表彰する

・小内春邑子句集「岩畳」刊：二月

・昭和五二年度水明賞：五月

・波多野寿子、出井一雨、大澤玲子

・昭和五三年度新珠賞：九月

・柳田智江、西山貴美子、松本孝太郎、松坂

正男

・村田邑亮（季音同人）逝去：九月

・運営同人の異動：退任 落合水尾

・わが愛する俳人第二集「長谷川かな女篇」

・星野紗一執筆刊：十月

・水明表紙絵作者、直原玉青氏大阪芸術賞受

賞：十一月

昭和五四年

・座談会「新春放談」：二月

（出席者）草香薫春：司会、森脇仮之、中村とみを、別軍茅夜女、岡谷徳津代、前田

余子生、高橋さだ子、谷口とし子、守都千

賀女

・編集長に小内春邑子就任：一月

・土井みとし逝去：一月

・星野明世句集「馬槌」刊：三月（現代俳句女流シリーズ）

・水明創刊五〇年記念号発行：五月

（特別寄稿）水原秋櫻子、山口誓子、阿部

みどり女、横山白虹、飯田龍太、森澄雄、

渡辺桂子、瀧春一、柴田白葉女、殿村菟絲

子、野澤節子、高柳重信、三橋敏雄、松澤

昭、成瀬櫻桃子、阿部完市、飯島晴子、岡

本眸

（対談）「実作者の立場」金子兜太、星野紗

一

・水明創刊五〇年記念大会（東京目白・椿山

荘）：五月

・昭和五三年度水明賞：五月 小林美夜子

・第一回（昭和五三年度）季音賞：五月

小内春邑子、星野明世、松原歌子、佐々木久代

・尾崎木星（季音同人）逝去：八月

・昭和五十四年度新珠賞：九月

・十倉和子、谷口とし子（準賞）三沢容一

・遠山喜美子句集「回遊」（水明選集第一集）

刊：十二月

昭和五十五年

・新春座談会「俳句の実作について」：一月

（出席者）星野紗一、山本紫黄、遠山喜美子、

佐々木久代、小内春邑子

・水明運営の人事：一月

・新運営同人 佐々木久代、星野明世、山本

鬼之介

・新行事部長 出井一雨

・第一回星野紗一海外俳句教室（韓国紀行）：三月

・石塚まさを句集「途上小景」（水明選集第二集）刊：四月

・昭和五十四年度二賞発表：五月

・水明賞 関口正子、森せん、柳田智江

・季音賞 小林京子

・加藤不二也（水明最長老）逝去：六月

・古橋桂花（元水明編集長、浦和市俳句連盟

会長、元埼玉県俳句連盟会長）逝去：六月
・横道秀川句集「寒銀河」（水明選集第四集）刊：七月

・水明創刊六〇〇号特別号発行：八月

（特別寄稿）「洛陽」藤堂明保、「星野紗一の俳句」三橋敏雄、「紗一秀句抄」池上樵人

・昭和五十五年度新珠賞：九月

・長谷川エミ、中村とみを、島津よしの

・小林京子句集「音域」（水明選集第三集）刊：九月

・浜田餘子房（季音作家）逝去：九月

・水明六〇〇号記念大会（東京日比谷松本楼）：十月

・新春座談会「俳句初学のころ」：一月

（出席者）星野紗一、石塚まさを、西村晴子、松原歌子、出井一雨、日吉登美女、小林美夜子、小内春邑子

・山本紫黄句集「早寝島」（水明叢書）刊：一月

・新運営同人の委嘱：一月 広瀬とし、立川京子

・遠山喜美子（前編集長）逝去：一月

・中山玲子句集「白日」（現代俳句女流シリーズ）刊：三月

・第二回星野紗一海外俳句教室（台湾紀行）：三月

・昭和五十五年度二賞発表：五月

・水明賞 高野万里、三沢容一、松本愛

・季音賞 遠山喜美子、中山玲子

・古橋桂花句集「星」刊：六月

・木村秋峰句集「陽炎」刊：七月

・内藤貞子句集「野鳩」刊：七月

・島津城子句集「雁渡し」（水明選集第四集）刊：八月

・かな女賞の設定：九月

・昭和五十六年度分から、新たにかな女賞を設定。本賞は、水明の創設者である長谷川かな女の功を讃え、その名を永遠にとどめるため、かな女十三回忌を機会に設定。

・昭和五十六年度新珠賞：九月

・出口唄子、大橋旭代

・森宏二長崎県文芸大賞受賞：十月

・久保りき句集「糸遊」刊：十二月

昭和五十七年

・新春座談会「旅と日常」：一月

（出席者）星野紗一、山本紫黄、小内春邑子、

杉本文彦、島津城子、広瀬とし、立川京子、小泉小泉

・自註現代俳句シリーズ（第四期）「星野紗一集」刊：一月

・第三回星野紗一海外俳句教室（シンガポール・タイ紀行）：三月

・梅原啄朗（季音作家）逝去：三月

・昭和五十六年度三賞発表：五月

・水明賞 十倉和子、松宮柚二、長谷川エミ

・季音賞 山本鬼之介、立川京子



吉沢ひさ子

かな女賞（第一回）吉沢ひさ子

・松原歌子句集「烏賊火」（水明選集第五集）刊：八月

・昭和五十七年度新珠賞：九月

・永瀬千枝子、森宏二

・村野喜代句集「今年竹」刊：九月

・水明合同句集「第八水明抄」刊：十月

・杉本文彦句集「母の関」（水明選集第六集）

刊：十二月

昭和五八年

・新春座談会「今の俳句」：一月

（出席者）星野紗一、大畑南海魚、星野明世、小林京子、大澤玲子、田口鷹生、小内春邑子

・岡田銀溪句集「米寿抄」刊：二月

・第四回星野紗一海外俳句教室（台湾紀行）：三月

・星野紗一主宰十周年記念号発行：三月

特別寄稿「紗一主宰『水明』十周年を祝して」井本農一

・星野紗一主宰十周年記念水明全国大会（東京目白・椿山荘）：五月

（特別講演）金子兜太

・昭和五十七年度三賞発表：五月

・水明賞 松坂正男、岸仙峡

・季音賞 島津城子、山本紫黄、波多野寿子

かな女賞 岡田銀溪、森脇仮之

・星野紗一句集「鹿の斑」並びに随筆集「木の鍵」刊：五月

・昭和五十八年度新珠賞：九月

・門馬志都子、塩谷美津子、島津初花

・佐々木久代句集「螢舟」（水明選集第七集）

刊：十月

昭和五九年

・新春座談会「写生ということ」：一月

（出席者）星野紗一、小内春邑子、星野明世、佐々木久代、山本鬼之介、勝海信子、池上貴馨子、栢尾さく子、小泉小泉

・第四例会新設（大宮公民館第二水曜日）：一月



森脇 仮之

・森脇仮之（季音同人）逝去：一月

・桐生かね子句集「魚遊」刊：二月

・小澤登志句集「小松石」刊：二月

・梅原啄朗遺句集「浜木綿」刊：三月

・槻の会合同句集「槻の花」刊：三月

・第五回星野紗一海外俳句教室（中国紀行）：三月

・新運営同人の委嘱：五月 波多野寿子

・昭和五十八年度三賞発表：五月

・水明賞 栢尾さく子（準賞）大橋廸代、

山本松枝

季音賞 西村晴子

かな女賞 大畑南海魚、鈴木瑛女

・広瀬とし句集「青い実」刊：五月

・治田みちる句集「五月」刊：五月

・内田しげり（季音同人）逝去：五月

・富田よし（季音同人）逝去：五月

・西村晴子句集「銀閣」刊：六月

・関口祥子句集「檜山杉山」刊：六月（現代俳句女流シリーズ）

・長谷川かな女句碑建立除幕：七月

（福井県上中町中央公民館広場）

「ねばりひきでもあろかと田向ふの初蛙

かな女」

かな女

・峯岸たつ子句集「冬紅葉」刊：八月

・昭和五九年度新珠賞：九月

山本啓江、北川栄子

・水明通巻六五〇号記念号発行：十月

架空対談「また何時か何処かで」星野紗一

・吉沢ひさ子句集「米の春」刊：十月

・星野紗一句碑建立除幕：十一月（群馬県鬼

石町桜山）

「頂に駕籠を置きたし冬桜

紗一

・原美美子（元季音同人）逝去：十一月

・立川京子句集「桜紅葉」（水明選集第八集）

刊：十二月

・野地好子句集「雪吊」刊：十二月

昭和六〇年

・新春新風放談「俳句の新しさ」：一月

（出席者）星野紗一、向井鶴郎、永瀬千枝子、

椎野美代子、小内春邑子、川村悠太、西山

貴美子、菊池ひろこ

・永野史代句集「喇叭音」刊：四月（処女句

集シリーズ）

・長村春竹句集「蒼天」刊：四月

・石塚まさを浦和市俳句連盟会長に就任：五

月

・昭和五九年度三賞発表：五月

水明賞 池上貴譽子、門馬志都子

季音賞 小林美夜子、佐藤緑芽

かな女賞 石塚まさを、横道秀川

・別車茅夜女句集「海幸」刊：七月

・昭和六〇年度新珠賞：九月

川村悠太、山口素子

・大澤玲子句集「石筍」刊：十一月（現代俳

句女流シリーズ）

・椎野美代子句集「鰯酒」刊：十一月（処女

句集シリーズ）

・北川栄子句集「華」刊：十一月

・岡田銀溪（元運営同人）逝去：十一月



岡田 銀溪

・野本千代遺句集「花菖蒲」刊：十二月

昭和六一年

・新春座談会「されば還暦、されど虎」：一

月

（出席者）小内春邑子、星野明世、中山玲子、

木下露女、谷野家代子、波多野寿子、小林

美夜子、長谷川エミ

・水明運営の人事・組織：一月

新運営同人 小林美夜子

新総務部長 佐々木久代

・大阪水明合同句集「森の宮」刊：三月

・横道秀川句集「狼煙」刊：四月

・市田一虚生句集「山茶黄」刊：四月

・昭和六〇年度三賞発表：五月

水明賞 山本松枝、谷口とし子

季音賞 大澤玲子、関口祥子

かな女賞 草香薫春、別車茅夜女

・木暮三津子遺句集「西陣」刊：六月

・高橋さだ子句集「嵯峨野」(水明選集第九集)

刊：八月

・昭和六一年度新珠賞：九月

・田村照子、山中順子、吉田蒼生子

・小林美夜子句集「羽」(水明選集第十集) 刊：

九月

・星野明世句集「暮」刊：九月

・長谷川かな女生誕百年記念号発行：十月

(特別寄稿) 阿波野青畝、加藤楸邨、金子

兜太、清崎敏郎、野澤節子、能村登四郎、

丸山海道、三橋敏雄、草間時彦、殿村菟絲子、

久保田月鈴子、中村苑子、飯田龍太、井本

農一、加藤郁乎、原裕

・自解一〇〇句選「星野紗一集」星野紗一著

刊：十月

・長谷川かな女生誕百年記念大会(東京目白・

椿山荘)：十一月

昭和六二年

・表紙絵作者本号より川村親光画伯：一月

・新春座談会「俳句の発表」：一月

(出席者) 星野紗一、立川京子、小林京子、

高野万里、松本孝太郎、吉田静二、山中順子、小内春邑子

・波多野寿子句集「麦笛」刊：二月

・「山本嵯迷全句集」刊：三月

・水明運営の人事：四月

・新行事部長 山本鬼之介

・昭和六一年度三賞発表：五月

・水明賞 西山貴美子、勝海信子

・季音賞 栢尾さく子、長谷川エミ

・かな女賞 福岡浪子、星野明世

・第六回星野紗一海外俳句教室(中国吟行

会)：六月

・昭和六二年度新珠賞：九月

・伊藤敦子、鈴木さとみ

・小内春邑子句集「明王」刊：十月

・星野紗一・明世 現代俳人墨筆集「赤絵Ⅲ」

出版：十二月

昭和六三年

・新春座談会「関西の人柄、俳句柄」：一月

(出席者) 星野紗一、草香薫春、高橋さだ子、

野田勇泉、十倉和子、小島一予、谷口とし

子、伊藤敦子、小内春邑子

・水明運営の人事：一月

・新運営同人 小林京子

・田村九路句集「碾臼」刊：二月

・長谷川エミ句集「蕪汁」刊：二月

・昭和六二年度二賞発表：五月

・水明賞 大橋迪代、川村悠太

・季音賞 広瀬とし、高野万里、池上貴誉子

・山本松枝句集「幻日」(水明選集第十一集)

刊：五月

・松本親枝句集「川狩」(水明選集第十二集)

刊：五月

・佐藤緑芽句集「凍鶴」刊：五月

・二賞発表：六月

・かな女賞 花輪山思郎、川島喜由

・新珠賞 黒沢みさお、森あい子

・堀敬子句集「涅槃」(女流シリーズ句集)

刊：六月

・小川千穂遺句集「微笑」刊：六月

・西村晴子随想集「晴れるや」刊：六月

・菊池ひろこ句集「露白」(処女句集シリーズ)

刊：七月

・栢尾さく子句集「五位」(俊英俳句選集) 刊：

八月

・池上貴誉子句集「放下」刊：九月

・俵谷美智子句集「青柿」(処女句集シリ

ズ) 刊：九月



星野 明世

・星野明世句碑除幕：七月（群馬県鬼石町桜山）

「袋掛来世はどこで袋掛

明世」

・川村悠太句集「馳か侏儒」（結社賞作家選集）刊：十一月

・水明創刊七百号記念号発行：十二月

（特別寄稿）「羽子板」桂信子、「秋の寒さ」草間時彦（対談）「秋、夜長、ものにする」中村苑子、星野紗一

・大畑南海魚（運営同人・元編集長）逝去：十一月

昭和六四年

・水明運営の人事：一月

新運営同人の委嘱

大澤玲子、川島喜由、田口鷹生、中山玲子、

長谷川エミ、日吉登美女

運営幹事の分担

編集部 編集長 小内春邑子

行事部 部長 山本鬼之介

総務部 部長 佐々木久代

平成元年

・水明創刊七百号記念大会（東京目白・椿山荘）一月

・草香薫春（元運営同人）逝去：一月

・星野紗一随筆集「続木の鍵」刊：一月

・森あい子「扇開き」刊：一月

・大畑南海魚句碑開眼：三月（大畑家墓所）

「菜の花や隠岐は蝶々のゐない国



草香 薫春

・石塚まさを（運営同人、元編集長、浦和市俳句連盟会長）逝去：三月

・昭和六三年度三賞発表：五月・六月

・水明賞 椎野美代子、岡村一郎

・季音賞 西山貴美子、堀敬子

・かな女賞 山本紫黄、小内春邑子

・平成元年度新珠賞：六月

岡崎るり子（華賞）田原重子、中西磨智子

・片平杜翠（季音同人、元編集長）逝去：七月

・ほしのとおり（同人、星野紗一主宰長男）天折：七月

・谷野家代子句集「小春日」刊：七月

・星野家墓地内に句碑：八月（茅村、紗一、明世、とおる）

・水明誌「季音欄」の編成替え：九月

・季音「雪」新設（かな女賞受賞者欄）

・季音「月」従来の「I」に相当

・季音「花」従来の「II」に相当

・関根碧子句碑建立除幕：十月（群馬県鬼石町桜山）

「零余子を生みし土壤や冬桜

碧子」

・別車茅夜女（季音同人）逝去：十月

・永瀬千枝子句集「貝覆ひ」刊：十月

・大場香波（季音同人）逝去：一月

・鈴木瑛女（季音同人）逝去：五月

・平成元年度三賞発表：五月・六月

・水明賞 故ほしのとおり、山中順子

平成二年

季音賞 吉田静二

かな女賞 村尾蕉雨女、杉本文彦

・平成二年度新珠賞 該当作品なし

〔準賞〕 田原重子、戸沢可伊、茂木和子、

和田光子

・運営幹事会の人事：六月

新行事部長 出井一雨

・大川まつ江句集「樸山」刊：六月

・ほしのおとる句集「紫荊」刊：七月

・星野紗一句集「置筏」（現代俳句選集）：七月

月

・星野紗一句集現代俳句の百冊「地上の絵」

刊：八月

・吉沢ひさ子（季音同人）逝去：八月

・水明創刊六十周年記念号発行：九月

（特別寄稿） 加藤楸邨、飯田龍太、金子兜太、

能村登四郎、中村苑子、清崎敏郎、三橋敏

雄、松澤昭、飯島晴子、有馬朗人、渡辺恭

子、倉橋幸村、伊藤敬子

・星野紗一主宰第三三回埼玉文化賞芸術部門

賞受賞：十一月

・水明創刊六十周年記念全国大会（川口市総

合文化センター「リリア」）：十一月

・長谷川零余子句碑建立除幕：十二月（群馬

県鬼石町）

「鶯や人を恐れて松深く

零余子」

平成三年

・新春放談「題名のない座談会」：一月

（出席者） 星野紗一、山本紫黄、星野明世、

佐々木久代、小内春邑子

・小内春邑子句碑開眼除幕：三月

（埼玉県長瀬町官澤山光明寺）

「初蝶や指の先まで僧の緒

春邑子」

・岸仙峡（季音同人）逝去：三月

・黒沢美紗緒句集「唐辛子」刊：四月

・瀬戸富美子句集「唐草」（現代俳句女流シ

リーズ）刊：五月

・平成二年度三賞発表：五月・六月

水明賞 俵谷美智子、黒沢美紗緒

季音賞 出井一雨、大橋廸代

かな女賞 島津城子、広瀬とし

・平成三年度新珠賞：六月

田原重子、茂木和子

・星野明世句集「青信濃」（現代俳句十八人集）

刊：六月

・高野万里句集「正午」刊：七月

・新運営同人の委嘱：七月

池上貴簪子、高野万里、永瀬千枝子、松本

孝太郎、吉田静二

・地方運営同人の新設：七月

岡谷直津代、島津城子、杉本文彦、高橋さ

だ子、谷野家代子、野田勇泉

・宮本誠句集「ひまらやほしよりの風」刊：

七月

・森山奇山遺句集「背振山」刊：十月

・川島喜由句集「峽光」刊：十一月

・渡辺俳壇（季音同人）逝去：十一月

平成四年

・新春座談会「男の俳句 女の俳句」：一月

（出席者） 星野紗一、川村悠太、岡村一郎、

椎野美代子、山中順子、俵谷美智子、黒沢

美紗緒、田原重子、茂木和子、小内春邑子

・日吉登美女（運営同人）逝去：二月

・御影庭石（季音同人）逝去：二月

・横田さだ子句集「源流」刊：四月

・森千代子句集「薯の花」刊：四月

・星野紗一句集「ねばりひき」完全復刻版の

刊行：四月

・平成三年度三賞発表：五月・六月

水明賞 神田九十九、森あい子

季音賞 椎野美代子

かな女賞 中山玲子、日吉登美女

・平成四年度新珠賞：六月

・田川澄絵（準賞）河村真里、酒井佑子

・新運営同人の委嘱：六月

・国領恭子、山中順子

・島津城子第二句集 島津よしの合同句集「風の盆」刊：六月

・西原草二（季音同人）逝去：十二月

・鈴木松風句集「峡の宿」刊：十月

・第十水明抄発行：十二月

平成五年

・新春座談会「かな女を語る。そして……」：一月

（出席者）

小内春邑子、神田九十九、川村悠太、松本孝太郎、田口鷹生

・新運営同人の委嘱：一月

・川村悠太、山本松枝

・谷本溪流（季音同人）逝去：一月

・大塚絹芳（季音同人）逝去：一月

・水明創刊七五〇号記念号発行：二月

（対談）「古典俳句はものさし」山下一海、星野紗一

・鑑賞秀句一〇〇句選シリーズ「長谷川かな

女」星野紗一著刊：二月

・星野明世現代俳句協会賞受賞：二月

・水明七五〇号記念会、星野紗一主宰就任二十年祝、星野明世現代俳句協会賞受賞祝

（浦和市東武ホテル）：三月

（来賓）井本農一、金子兜太、三橋敏雄、加藤克己、深見けん二、有馬朗人、伊藤敬子、松澤昭、高橋一郎、岡田日郎、松本旭

・「魏」創刊一号、小内春邑子により水明の僚誌として発刊：四月

・平成四年度三賞発表：五月・六月

・水明賞 田村照子、中西磨智子

・季音賞 川村悠太、俵谷美智子

・かな女賞 立川京子、佐々木久代

・平成五年度新珠賞：六月 河村鞠

・埼玉新聞社企画、水明共催オーストラリア吟行会：十一月

・桐生かね子（季音同人）逝去：十二月

平成六年

・新春座談会「季語と定型」：二月

（出席者）星野紗一、小内春邑子、岡村一郎、池上貴誉子、栢尾さく子、椎野美代子、富川三枝子

・運営幹事会の人事：一月

新編集長 川村悠太

新行事部長 立川京子

・星野紗一句集「鳥の句」刊：一月

・日吉登美女遺句集「花俵」刊：一月

・堀内歌子句集「水琴窟」刊：一月

・藤田隆子（季音同人）逝去：四月

・花輪山思郎（季音同人）逝去：五月

・久保りき（季音同人）逝去：五月

・平成五年度三賞発表：五月・六月

・水明賞 茂木和子、吉田蒼生子

・季音賞 山中順子、上岡正子、黒沢美紗緒

・かな女賞 出井一雨、波多野寿子

・平成六年度新珠賞：六月

清水緑子、三浦文子

・松宮百栄（季音同人）逝去：七月

・服部永嶺（季音同人）逝去：十月

・西原草二遺句集「片栗の花」刊：十一月

・長谷川かな女句碑建立除幕：十二月

（群馬県鬼石町三波川桜山）

「龍胆枯れ叩く狐の尾がむらさき

かな女」

（星野紗一の碑文）

・上岡正子句集「軽鳧の子」刊：十二月

・藤井寛聲句集「舞子」刊：十二月

・松宮百栄遺句集「白暖簾」刊：十二月
・木曜会合同句集「韻」刊：十二月

平成七年

・新春鼎談：一月
（出席者）星野紗一、西村晴子、中たけし
・水明運営の人事・組織：一月
・運営同人：運営同人会を設け定期的に開催する。地方運営同人についてはこの組織とは別とする。

・運営幹事の分担

運営全般 小内春邑子、星野明世、出井

一雨

編集部 川村悠太編集長他

行支部 吉田静二部長他

総務部 佐々木久代部長他

渉外部 運営幹事が夫々担当

小委員会

・脚註名句シリーズ「長谷川かな女集」星野紗一著刊：三月

・岡野白穂句集「霧笛」刊：三月

・田村九路（季音同人）逝去：三月

・平成六年度三賞発表：五月・六月

水明賞 富川三枝子

季音賞 長谷川久枝、山本松枝、弥永信子

かな女賞 小林美夜子

・平成七年度新珠賞：六月 松本光子

・村尾蕉雨女（季音同人）逝去：八月

・渡辺豊子（季音同人）逝去：九月

・藤井寛聲（季音同人）逝去：九月

平成八年

・新春鼎談「合せ技」をめぐる：一月
（出席者）星野紗一、大澤玲子、永野史代
・星野明世句集「袋掛」（現代俳句の百冊シリーズ）刊：三月

・福井水明歩句会合同句集「歩」刊：三月

・塩谷美津子他八名の合同句集刊：三月

・平成七年度三賞発表：五月

水明賞 高橋美枝子、常見知生

季音賞 永瀬千枝子、吉田蒼生子、神田九

十九

かな女賞 該当者なし

・平成八年度新珠賞：五月

石山かつ子、酒井佑子

・高田まさみ（季音同人）逝去：十月

・松本咲句集「赤い椅子」刊：十一月

・松永竹林第二句集「冬座敷」刊：十一月

平成九年

・新春鼎談「裾野の広がった俳句」：一月

（出席者）星野紗一、橋本圭好子、富川三枝子

・鳥羽谷創刊一〇〇号記念大会（大鳥羽）：三月

・水明創刊八〇〇号記念号発行：四月

（特別寄稿）金子兜太、鷹羽狩行、有馬朗人、三橋敏雄、松澤昭、成瀬櫻桃子、伊藤敬子、岡田日郎、松本旭、深見けん二、佐藤和夫、倉橋羊村、蓬田紀枝子、弓削緋紗子、緋庵（William J. Higginson）橋本圭好子訳

・水明創刊八〇〇号記念全国大会（東京会館）：五月

（来賓）井本農一、金子兜太、成瀬櫻桃子、三橋敏雄、松澤昭、佐藤和夫、伊藤敬子

・平成八年度三賞発表：五月

水明賞 星野和子（準賞）柚木治子

季音賞 田村照子、茂木和子、中たけし

かな女賞 小林京子、長谷川エミ、佐藤緑芽

・平成九年度新珠賞：五月

小倉和子、柚木治子

・運営幹事の人事：六月

新編集長 池上貴誉子

- ・中澤星古城（季音同人）逝去：六月
- ・白石のぶこ句集「杜氏の唄」刊：七月
- ・宇野常人（季音同人）逝去：十月
- ・内藤並樹（季音同人）逝去：十一月
- ・長谷川久枝句集「青き気孔」刊
- ・服部千枝子句集「旅鞆」刊
- ・蛭間房栄句集「鏡」刊

平成一〇年

- ・出井一雨句集「山上の鯉」刊：十二月
- ・新春座談会「寅年そして還暦」：一月
- （出席者）星野紗一、柚木治子、北上正枝、大川富美代
- ・現代俳句鑑賞全集（第二回配本）星野紗一篇出版：水明の平成元年から九年までの巻頭句（作品評）から収録：三月
- ・平成九年度三賞発表：五月
- ・水明賞 永野史代、杉田みつる、石山かつ子
- ・季音賞 高橋美枝子、富川三枝子
- ・かな女賞 吉田静二、川村悠太、野田勇泉
- ・平成一〇年度新珠賞：五月
- ・中澤妙子（準賞）加藤礼子、町野広子、増田くみ子
- ・横道秀川（季音同人）逝去：六月

- ・三木多美子句集「花鳥賊」刊
- ・福原幸子句集「夏羽織」刊
- ・星野紗一・明世俳句展（伊勢丹浦和店七階美術画廊）：十一月
- ・星野紗一主宰喜寿のお祝い会（浦和ワシントンホテル）：十二月

- 並びに毎日新聞社賞のダブル受賞：十一月
- ・第五二回福島県文学賞（俳句部門）を小高水明会の穴戸祥二が受賞：十一月
- ・ニュージランド大吟行（埼玉新聞文化ツア）を埼玉新聞社と水明で共同企画、星野紗一主宰が同行アドバイザーとして実施：十一月

平成一一年

- ・新春座談会「これからの俳句」：一月
- （出席者）星野紗一、網野横月、町野広子、増田くみ子、長谷川佳子
- ・星野松路（季音同人）逝去：一月
- ・ヨークカルチャーセンター大宮（イトーヨーカドー大宮店二階（カタクラパーク）で星野紗一主宰が講師として新講座開講「はじめての方のための俳句入門」：二月
- ・平成一〇年度三賞および平成一一年度新珠賞発表：五月
- ・水明賞 狩野睦子、柚木治子、戸沢可伊
- ・季音賞 星野和子
- ・かな女賞 池上貴誉子、大澤玲子
- ・新珠賞 町野広子（準賞）小林和枝
- ・山口華曳舟（季音同人）逝去：七月
- ・戸沢可伊（季音同人）逝去：十月
- ・松本孝太郎 第十七回現代俳句協会新人賞

平成一二年

- ・新春座談会「俳句の日常性と非日常性」：一月
- （出席者）星野紗一、出井一雨、常見知生、岩谷精一、黒田悦夫
- ・松宮柚二（季音同人）逝去：三月
- ・平成一一年度三賞ならびに平成一二年度新珠賞発表：五月
- ・水明賞 山之上友江、岩谷精一、金谷和子
- ・季音賞 石山かつ子
- ・かな女賞 永瀬千枝子
- ・新珠賞 北上正枝、黒田悦夫
- ・新運営同人の委嘱：五月
- ・星野和子、富川三枝子
- ・水明創刊七十周年記念号発行：九月

（特別寄稿）金子兜太、鷹羽狩行、松澤昭、

岡本眸、成瀬桜桃子、伊藤敬子、加藤三七子、深見けん二、倉橋羊村、小宅容義、柴田白陽、松本 旭、山下一海、蓬田紀枝子

・水明創刊七十周年記念祝賀会（東京丸ノ内、東京会館）：十月

・星野紗一エッセイ集「柿の木」出版

・植木静香（季音同人）逝去

・磯美恵子（ 〃 ） 〃

平成十三年

・水明本部の組織変更と人事：一月
新組織

○発行所事務局 事務局長 星野光二
○地方連絡部 部長 佐々木久代（西部）

〃 〃 長谷川エミ（東部）

○編集部 部長 星野和子
○行支部 部長 吉田静二（現行通り）

・高橋さだ子（季音地方運営同人）逝去：二月

・星野紗一主宰 埼玉県現代俳句協会会長に就任：三月

・星野紗一・明世句碑若狭瓜割名水公園に建立：四月
渡り鳥消えたるあとの置筏 紗一
瓜割の滝に染あり新松子 明世

・平成十二年度三賞ならびに平成十三年度新珠賞発表：五月

水明賞 黒田悦夫、小林迪子、金子はる子
季音賞 原田栖子

かな女賞 高橋さだ子
新珠賞 井上けい子、西谷裕子

・三木多美子（季音同人）逝去
平成十四年

・松本親枝（季音同人）逝去：一月
・平成十三年度三賞ならびに平成十四年度新珠賞発表：五月

水明賞 星野光二、三浦文子

季音賞 岩谷精一、柚木治子、山之上友江
かな女賞 椎野美代子

新珠賞 小林和枝、鈴木花子、佐々木順子
句集出版 鈴木ゆき「青薦」

・星野紗一主宰就任三十年祝賀会：十月
浦和東武ホテル、アビオ大阪、若狭天徳寺会館

・松原歌子（季音同人）逝去：十二月
長谷川久枝（季音同人）逝去

平成十五年

・水明運営人事：一月
運営同人及び幹事 新任 椎野美代子

退任 小林美夜子

・平成十四年度三賞ならびに平成十五年度新珠賞発表：五月

水明賞 大川富美代
季音賞 星野光二

かな女賞 大橋迪代
新珠賞 駒 牧乃

・句集出版 西谷裕子「掌紋」、伊藤愛子「風知草」、横溝やす子「花の坂」

・水明運営人事
運営幹事 常見知生、茂木和子

・川島喜由句碑建立：十月
・岡野白穂（季音同人）逝去：十二月

平成十六年

・川村悠太（季音同人、元編集長）逝去
・水明「新人集」雑誌欄新設：四月

・平成十五年度三賞ならびに平成十六年度新珠賞発表：五月

水明賞 西谷裕子、高島寛治、小林和枝
季音賞 三浦文子、小林萬二郎

かな女賞 堀 敬子、山中順子
新珠賞 田寺玲子、森本早苗、長谷川佳子

・句集出版 川島喜由「一滴」、若本末子「茅渟の海」

・水明の人事：七月

運営幹事（運営同人）堀 敬子、地方運営
同人 大橋勉代、岡谷徳津代（退）

・水明運営組織の改正と人事：七月

新設 普及部 佐々木久代、常見知生

広報部 堀 敬子、小林萬二郎

新運営同人・運営幹事 小林萬二郎

新会計幹事 立川京子、大澤玲子

新地方運営同人 佐藤 進、田中幹青

運営幹事退任、運営同人へ 小内春邑子

・瀬戸富美子（季音同人）逝去：八月

・水明の人事

新副主席 星野明世

・水明発展基金の設置、会長に出井一雨就任

平成十七年

・文野 和（季音同人）逝去：三月

・清水八重子（季音同人）逝去：四月

・平成十六年度三賞ならびに平成十七年度新

珠賞発表：五月

水明賞 大村節代、内田恵子

季音賞 大川富美代、服部みどり

かな女賞 該当者なし

新珠賞 井上とも子、加藤むら子

（準賞）山岸光江

・句集出版 茂木和子「隠し壺」、栢尾さく

子「秋柏」、池上貴簪子「別の木で」

・水明通巻九〇〇号記念号発行：八月

・横田さだ子（季音同人）逝去：十月

・第十三水明抄（合同句集）出版：十一月

平成十八年

・新主宰に星野光二就任：一月



星野 光二

前星野紗一主宰病氣療養のため。名誉主宰
に就任。

・野田勇泉（季音同人、地区委員）逝去：二

月

・松本孝太郎現代俳句協会研修部長に就任：

三月

・平成十七年度三賞ならびに平成十八年度新

珠賞発表：五月

水明賞 小林あきを、井上けい子

季音賞 田寺玲子

高島寛治、小倉和子

かな女賞 山本松枝

新珠賞 齋藤祐輔、小野寺左右志良

山岸光江

・星野紗一名誉主宰六月二十二日逝去、享年

八十四歳、告別式は市内蓮昌寺会館にて星

野家と水明俳句会の合同葬により執り行な

われた。戒名 水月院知風紗一居士

・広瀬とし（季音同人）逝去：八月

平成十九年

・第一回新春俳句大会開催、於別所沼会館：

一月

・水明の人事

行事部長 山中順子

・星野光二主宰句集「透明」出版

・星野明世副主席三月二十一日逝去、享年

八十一歳

・平成十八年度三賞ならびに平成十九年度新

珠賞発表：五月

水明賞 森本早苗、町野広子、谷中菊乃

季音賞 黒田悦夫、松本光子、小林和枝

かな女賞 西村晴子

新珠賞 新津英子、境 延昭、大塚沙智子

・句集出版 橋本圭好子「月の兎」

・第一回紗一忌、六月二十四日、於別所沼会

館

- ・山本紫黄（運営同人）逝去：八月
 - ・第一回埼玉大例会、於埼玉労働会館：十月
- 平成二十年

平成十九年度三賞ならびに平成二十年度新珠賞発表

- 水明賞 田村みどり、由良ゆら女
- 季音賞 大村節代、川野妙子
- かな女賞 岡谷値津代

新珠賞 船山 律、土屋富子

句集出版 田村照子「石兎」、吉住光弥「関の声」

- ・水明の運営組織：七月
- ・常任運営幹事 茂木和子、運営幹事 山本鬼之介
- 普及推進部 山本鬼之介

- ・広川 鴻（季音同人）逝去：八月
- 平成二十一年

・平成二十年度三賞ならびに平成二十一年度新珠賞発表

- 水明賞 島崎ゆきを、境 延昭
 - 季音賞 井上けい子、内田恵子、網野月を
 - かな女賞 該当者なし
- 新珠賞 岩松比奈子

- ・句集出版 高橋美枝子「絵臘燭」
 - ・水明発展基金 会長 吉田静二：九月
 - ・水明通巻九五〇号記念号発行：十月
 - ・第十四水明抄（合同句集）出版：十一月
- 平成二十二年

・橋本圭好子（季音同人、主宰句英訳者）逝去：二月

- ・吉田静二（常任運営幹事、水明発展基金会長）逝去：二月
- ・水明の運営組織：三月
- ・常任運営幹事 山本鬼之介

運営幹事 高島寛治、大村節代

水明発展基金 会長山中順子：三月

- ・平成二十一年度三賞ならびに平成二十二年新珠賞発表：五月

水明賞 土屋富子、岩松比奈子、兼 千晴

季音賞 田寺玲子、菊池ひろこ、酒井佑子

かな女賞 山本鬼之介、星野和子

新珠賞 菊池洋子、五明 昇

句集出版 岩谷精一「光る虹」、井上けい子「雪はたる」

- ・出井一雨（常任運営幹事、元水明発展基金会長）逝去：五月
- ・横溝やす子（季音同人）逝去：七月

- ・水明創刊八十周年記念号発行：九月
- （特別寄稿）金子兜太、宇多喜代子、松本旭、倉橋羊村、猪俣千代子、落合水尾、中里麥外、島田妙子、桑原三郎、三田 完

・水明創刊八十周年記念祝賀会（浦和ロイヤルパインズホテル）：九月

・水明創刊八十周年を記念し「星野紗一全句集」刊行：九月

- ・星野光二・橋本圭好子英訳句集刊行：九月
- ・川島喜由（季音同人）逝去：九月
- ・久岡 越（季音同人）逝去：十月

・「新人集」廃止、通信指導開始（指導者山本鬼之介）：一月

・句集出版 城間弥生「冬の虹」

平成二十三年

- ・新春座談会「俳句は生きる証」：一月
- ・水明の運営組織：一月
- 運営幹事 小林萬二郎

・星野光二主宰 埼玉県俳句連盟会長に就任

・矢田志づ代（季音同人）逝去：四月

・平成二十二年度三賞ならびに平成二十三年新珠賞発表：五月

- 水明賞 山中みどり、新津英子
- 季音賞 森田祥絵、吉澤純枝、白井由美

かな女賞 該当者なし

新珠賞 梅澤佐江、池田雅夫、藤井清子

・「水明の記事」を「風声」と改題：六月

・兼 千晴（季音同人） 逝去：十一月

平成二十四年

・表紙絵作者本号より本田晶子画伯：一月

・岩谷精一（季音同人）、原 晴朗（季音同人）

逝去：一月

・中西磨智子（季音同人） 逝去：二月

・星野光二主宰 第二句集「光年」を刊行：

三月

・平成二十三年度三賞ならびに平成二十四年

度新珠賞発表：五月

水明賞 大塚沙智子、長澤健次、石井喜恵

季音賞 境 延昭、島崎ゆきを、森本早苗

かな女賞 該当者なし

新珠賞 新谷鬼山

・星野光二主宰 第一句集「透明」・第二句

集「光年」出版記念祝賀会（浦和ロイヤル

パインズホテル）：八月

・田原重子（季音同人） 逝去：九月

・第一回鍛錬会（嵐山・国立女性教育会館）：

十月

・島津城子（元季音同人、俳誌「鳥羽谷」前

主宰、元若狭水明会指導者） 逝去：十月

平成二十五年

・水明の運営組織：一月

運営幹事 境 延昭

・田代未知（季音同人） 逝去：一月

・戸沢秀晃（同人） 逝去：三月

・平成二十四年度三賞ならびに平成二十五年

度新珠賞発表：五月

水明賞 井上とも子、宇田白鷺、鳥羽和風

季音賞 半谷比奈子、由良ゆら女、

大浜洋子

かな女賞 吉住光弥

新珠賞 和田隆一、荒井俱子

・星野光二主宰 さいたま市民大学で「水明

と浦和・星野兄弟の俳句」を講演：五月

・水明通巻一〇〇〇号記念吟行旅行（青森県

十和田・津軽方面）：五月

・「発行所夏行」を「水明夏行」と改め浦和

パルコで開催：七月

・「松中俳壇」（東松山中学校）の掲載開始：

十月

・水明通巻一〇〇〇号記念特集号発行：

十一月・十二月号

（特別寄稿）波多野寿子、長谷川知水、宇

野由希子、山本鬼之介、大橋廸代、永野史

代、服部みどり、菊池ひろこ、矢作アイ子、

宇田白鷺、島津初花

・水明通巻一〇〇〇号記念祝賀会（浦和ロイ

ヤルパインズホテル）：十一月

・水明通巻一〇〇〇号を記念し「長谷川かな

女全集」刊行：十一月

・水明通巻一〇〇〇号を記念し別所沼公園

内のかな女句碑の化粧直しと説明板設置：

十二月

・句集出版 西山貴美子「秘密」

平成二十六年

・水明の運営組織：一月

常任運営幹事 境 延昭

・佐々木久代（季音同人） 逝去：一月

・さいたま市公園緑地協会主催「はじめての

俳句入門教室」に全面協力開始：四月

・平成二十五年度三賞ならびに平成二十六年

度新珠賞発表：五月

水明賞 五明 昇、丸山マスマ

季音賞 土屋富子、町野広子、田村みどり

かな女賞 該当者なし

新珠賞 井口俊晴、金 光月

・立川京子（元季音同人） 逝去：五月

・水明通卷一〇〇〇号を記念し調神社境内の
かな女句碑の化粧直しと説明板設置：五月
・俳句初学の人を対象にした句会「皐月の会」
誕生：五月

・水明運営体制を抜本改正：十月
副主宰 山本鬼之介
運営幹事長 山中順子
編集長 星野和葉
常任運営幹事 小林萬二郎、大村節代、
五明 昇

運営幹事 網野月を、加藤草太郎
総務部長 茂木和子、
研修部長 境 延昭、
事務局長 五明 昇

・第十五水明抄（合同句集）出版：十一月
・句集出版 五明 昇「花林檎」

平成二十七年

・発行所簡易リフォーム（ブッシュホン電話・
椅子式句会室）：一月
・虚子記念文学館「虚子に導かれた大正期女
流俳句の変遷」展（四月一日から八月九日）
に長谷川かな女の資料を貸与：二月
・網野月を 現代俳句協会幹事（事業部長）
に就任：四月

・水明創刊八十五周年・主宰就任十周年記念
事業 故島津城子句碑建立除幕式（若狹
町）、祝賀会（小浜市）：四月
・星野光二主宰 埼玉県俳句連盟会長を退任、
名誉会長に就任：四月
・平成二十七年四賞発表：五月

・水明賞 松宮保人、宮崎雅訓
・季音賞 石井喜恵、山中みどり、長澤健次
・かな女賞 茂木和子、小林萬二郎
・新珠賞 宇野勘大、大場順子、松井由紀子
・水明創刊八十五周年・主宰就任十周年記念
吟行旅行（金沢・能登・福井方面）：五月
・古賀恵美（季音同人）逝去：六月
・星野光二主宰 第三句集「弓勢」刊行：
十一月

・水明創刊八十五周年・主宰就任十周年記念
号発行：十一月・十二月号
（特別寄稿）長谷川知水、椎野美代子、山
中順子、宇野由希子、鳥羽和風、波多野寿
子、栢尾さく子、西山貴美子
・水明創刊八十五周年・主宰就任十周年記念
祝賀会（浦和ロイヤルパインズホテル）：
十一月
・水明創刊八十五周年・主宰就任十周年記念

事業打上げ旅行（信州方面）：十二月
平成二十八年

・表紙絵作者本号より内田恵子画伯：一月
・水明の運営組織：一月
運営幹事 長澤健次

・平成二十八年水明四賞発表：五月
・水明賞 池田雅夫、藤沢喜久、荒井俱子
・季音賞 矢作水尾
・かな女賞 該当者なし

・新珠賞 近藤 徹、森 和子、森川義子
・リレーエッセイ「俳句のある風景」連載開
始：五月

・星野光二主宰が平成二十八年度埼玉県文化
団体連合会文化選奨を受賞：六月

・「文学の集い」星野光二のすべて」（文化
選奨受賞記念、さいたま文学館）：八月
・星野光二主宰が「埼玉文学講座」文学者そ
のひと作品」で長谷川かな女作品の講演
（さいたま文学館）：九月

・人事 常任運営幹事 加藤草太郎
平成二十九年

・句集出版 境 延昭「山の子」：一月
・平成二十九年水明四賞発表：五月
・水明賞 田中千穂、宇野勘大、大場順子



山本鬼之介

季音賞 五明 昇、井上燈女、宇田白鷺
かな女賞 森 千代子

新珠賞 保坂昭一、大塚茂子

人事 監事退任 大川富美代：五月

監事 山中みどり：六月

・若狭句碑めぐりバスツアー（二泊三日）：

五月

・句集出版 五明 昇「道草」：九月

・鍛錬会を「水明塾」に衣替え：十月

・人事 常任運営幹事 長澤健次：十一月

平成三十年

・平成三十年水明四賞発表：六月

水明賞 福田藤十郎、井口俊晴、井上玲子

季音賞 丸山マズミ、鳥羽和風

かな女賞 該当者なし

新珠賞 渋谷きいち、飛永 鼓

・星野光二水明第四代主宰逝去：十月

・山本鬼之介水明第五代主宰就任：十一月

・第十六水明抄（合同句集）出版：十一月
・半谷比奈子（季音同人）逝去

・人事 常任運営幹事退任 長澤健次：十二

月

平成三十一年・令和元年

・人事 常任運営幹事 日高 徹：一月

・人事 常任運営幹事 網野月を：三月

・水明の運営組織：四月

・運営幹事 小林萬二郎、椎野美代子

・令和元年水明四賞発表：六月

水明賞 加藤草太郎、梅澤佐江

季音賞 藤沢喜久、荒井俱子、池田雅夫

かな女賞 大村節代

新珠賞 青木鶴城、野田静香、越田榮子

・如月忌（秋子・嵯迷忌）、紗一忌、光二忌

を統合し「水明忌」を新設：六月

・人事 常任運営幹事 石山かつ子：六月

・人事 常任運営幹事 青木鶴城、保坂翔太

：七月

・句集出版 吉住光彌「遍路」：七月

・水明俳句会のホームページ開設：八月

・吉澤純枝（季音同人）逝去：九月

・加藤草太郎（季音同人）逝去：十月

・水明創刊九〇周年記念魁旅行（信州方面）：

十月

・発行所簡易リフォーム（総務・編集室の洋

室化）：十二月

令和二年

・本号よりフロント面に「華の一句」欄新設

：一月

・本号より表紙裏面に「今月のかな女」掲載

開始：二月

・新型コロナウイルス感染拡大の影響で「春

の吟行会」を十一月に延期：三月

・新型コロナウイルス感染拡大の影響で水明

創刊九〇周年記念祝賀会・全国大会を十一

月に延期：四月

・令和二年水明四賞発表：五月

水明賞 正木萬蝶、近藤徹平、大塚茂子

季音賞 大場順子、山田美佐尾、森川義子

かな女賞 矢作水尾

新珠賞 日高 徹、染谷正信、梅澤輝翠

・人事 監事退任 町野広子：六月

監事 新 暦文：六月

・水明創刊九十周年記念号発行：八・九月号

（特別寄稿）澤本知水（創刊号・発刊の言

葉より）、山本鬼之介、網野月を、島津初花、

山中みどり、青木鶴城、石山かつ子、大村

節代、五明 昇、境 延昭、日高道を、保坂翔太、星野和葉、茂木和子、山中順子、
・新型コロナウイルス感染拡大の影響で水明創刊九十周年記念祝賀会を無期延期：十月
・人事 常任運営幹事退任 山中順子、星野和葉、茂木和子、境 延昭、五明 昇：十二月

令和三年

・水明運営体制を抜本改革：一月
・運営幹事長 網野月を
編集長 大村節代
常任運営幹事 石井喜恵、井口俊晴、曲淵徹雄
運営幹事 大橋旭代、宇田白鷺、椎野美代子
総務部長 日高道を
編集部長 大村節代
事業部長 網野月を 【次長】青木鶴城
事務局長 井口俊晴
・「山紫集」欄創設、「鼓笛集」「山紫集」に年度賞授与へ：一月
・新型コロナウイルス感染拡大の影響で新春俳句大会中止：一月
・新型コロナウイルス感染拡大の影響で水明

忌を投句方式に：二月
・外部筆者による「水明誌を繙く」欄創設
・令和三年水明四賞発表：五月
・水明賞 野田静香、日高道を、青木鶴城
・季音賞 梅澤佐江、松井由紀子、井口俊晴
かな女賞 該当者なし
・新珠賞 仲田利子、本橋稀香、新 暦文
・新型コロナウイルス感染拡大の影響で水明夏行中止：七月

・山中順子（元季音同人）逝去：八月
・服部みどり（季音同人）逝去：九月
・インターネット句会を創設：九月
・中止の水明夏行の代替として「菊風句会」開催：十一月

令和四年

・小林萬二郎（元季音同人）逝去：十二月
・山本鬼之介主宰が第一句集「マネキン」を出版：一月
・新型コロナウイルス感染拡大の影響で新春俳句大会中止：一月
・新型コロナウイルス感染拡大の影響で水明忌を投句方式に：二月
・新型コロナウイルス感染拡大の影響で春の吟行会中止：三月

・句集出版 宮崎紫水「花種蒔く」：三月
・遺句集出版 故加藤草太郎「仰げば北斗」：三月

・令和四年水明六賞発表：五月
・水明賞 原田秀子、曲淵徹雄、保坂翔太
・季音賞 井上玲子、正木萬蝶
かな女賞 網野月を、石山かつ子
・新珠賞 森美枝子、元田亮一、後記朝香
鼓笛賞 染谷正信
山紫賞 鳥羽和風

【準】渋谷さいち、瀬戸雄二郎

・会員による「水明一〇〇号記念・私の二句」を掲載：五月

・句集出版 五明 昇「旅信」：五月
・吉住光彌（季音同人）逝去：六月
・特集企画で山本鬼之介主宰の句集「マネキン」を鑑賞：六月
・水明通巻一〇〇号記念全国大会、水明創刊九〇周年記念祝賀会（ロイヤルバインズホテル浦和）：七月

・句集出版 星野和葉「永字八法」：九月
・第十七水明抄（合同句集）出版：十月

令和五年

・人事 運営幹事退任 宇田白鷺：一月

・人事 運営幹事 檜鼻ことは：一月

・句集出版 石井喜恵「風を踏む」：四月

・令和五年水明六賞発表：五月

・水明賞 横山君夫、染谷風子、渋谷きいち

・季音賞 近藤徹平、大塚茂子

・かな女賞 島津初花

・新珠賞 霜多光代、小林京子

・鼓笛賞 北山建治郎

・山紫賞 大塚茂子【準】森 和子

・若狭句碑めぐりバスツアー：五月

・人事 常任運営幹事退任 井口俊晴：五月

・人事 事務局長 保坂翔太：五月

・句集出版 小倉倭子「帰心」：十月

・「はじめての俳句教室」十周年記念懇親会：十一月

十一月

・人事 運営幹事退任 椎野美代子：十二月

令和六年

・人事 運営幹事 町野広子、近藤徹平：一月

一月

・句集出版 茂木和子「朗朗と」：二月

・令和六年水明六賞発表：五月

・水明賞 梅澤輝翠、越田栄子

・季音賞 日高道を、青木鶴城、檜鼻ことは

・かな女賞 田寺玲子、由良ゆら女

・新珠賞 菅原真理、佐々木史女

・鼓笛賞 岡田宣子

・山紫賞 越田栄子

・柚木治子（季音同人）逝去：六月

・人事 副主宰兼運営幹事長 網野月を：七月

・人事 事業部長 青木鶴城：七月

・田寺玲子（季音同人）逝去：九月

・水明十一月・十二月を合併号に（年十一回発行に移行）：十一月

・水明十一月・十二月合併号に「夏季競詠」を「水明競詠」と改題し掲載：十一月

・人事 常任運営幹事退任 保坂翔太、曲淵徹雄：十二月

令和七年

・組織 事務局を廃止

・人事 常任運営幹事 菅原卓郎、小林京子

・句集出版 新 暦文「暦文三百六十五句」：三月

三月

・由良ゆら女（季音同人）逝去：四月

・令和七年水明六賞発表：五月

・水明賞 菅原卓郎、新 暦文

・季音賞 河野はるみ、曲淵徹雄

・かな女賞 永野史代

・新珠賞 石関六弦、岡田宣子、菅原卓郎

・鼓笛賞 反町 修

・山紫賞 綿引まりこ

水明各賞 歴代受賞者一覧

昭和二五年	かな女賞	季音賞	水明賞	新珠賞
昭和二六年			伊藤 笛舟 佐藤 浩悠	
昭和二七年			森山 奇山 高橋 梨丘 相沢 静思	
昭和二八年			山本 嵯迷 片平 杜翠	
昭和二九年			高木てい子 高橋 梨丘 森山 奇山 片平 杜翠 長谷川 秋子	
昭和三〇年			正岡陽炎女 中島 花楠 大畑南海魚	

昭和三一年	かな女賞	季音賞	水明賞	新珠賞
昭和三二年			藤巻 静子 岡田 銀溪	藤巻 静子 星野 紗一
昭和三三年			山本 嵯迷 大畑南海魚 東 早苗 森田 桂城 長谷川 秋子	佐藤 緑芽 勝野百合子 中尾寿美子
昭和三四年			石塚まさを 藤枝加津江 佐藤 緑芽 福岡 穂邨	落合 水尾 吉田 正 小田鳥迷子
昭和三五年			島津 城子	富田 よし 大木 紺青

昭和五一年	かな女賞	季音賞	水明賞	新珠賞
昭和五二年			立川 京子 山本鬼之介	高野 万里 市田一虚生 市野たけを 高橋さだ子
昭和五三年		波多野寿子 出井 一雨 大澤 玲子	柳田 智江 西山貴美子 松本孝太郎 松坂 正男	柳田 智江 西山貴美子 松本孝太郎 松坂 正男
昭和五四年		小内春邑子 星野 明世 松原 歌子 佐々木久代	小林美夜子	十倉 和子 谷口とし子 三沢 容一
昭和五五年		小林 京子	関口 正子 森 せん 柳田 智江	長谷川エミ 中村とみを 島津よしの
昭和五六年		遠山喜美子 中山 玲子	高野 万里 三沢 容一	出口 歌子 大橋 廼代
昭和五六年	かな女賞	季音賞	水明賞	新珠賞
昭和五七年		吉沢ひさ子	山本鬼之介 立川 京子	松本 愛 十倉 和子 松宮 柚二 森 宏二
昭和五八年		岡田 銀溪 森脇 仮之	島津 城子 山本 紫黄 波多野寿子	松坂 正男 岸 仙峡 塩谷美津子 門馬志都子
昭和五九年		大畑南海魚 鈴木 瑛女	西村 晴子	栢尾さく子 大橋 廼代 山本 松枝
昭和六〇年		石塚まさを 横道 秀川	小林美夜子 佐藤 緑芽	池上貴誉子 門馬志都子 山口 素子
昭和六一年		草香 薫春 別車茅夜女	大澤 玲子 関口 祥子	山本 松枝 谷口とし子
昭和六二年		福岡 浪子 星野 明世	栢尾さく子 長谷川エミ	西山貴美子 勝海 信子
				伊藤 敦子 鈴木さとみ

昭和六三年	かな女賞	季音賞	水明賞	新珠賞
花輪山思郎 川島 喜由	広瀬 とし 高野 万里 池上貴誉子	大橋 廼代 川村 悠太	黒沢みさお 森 あい子	
平成元年	山本 紫黄 小内春邑子	西山貴美子 堀 敬子	椎野美代子 岡村 一郎	岡崎るり子 田原 重子 中西磨智子
平成二年	村尾蕉雨女 杉本 文彦	吉田 静二	ほしのとおり 山中 順子	田原 重子 戸沢 可伊 茂木 和子 和田 光子
平成三年	島津 城子 広瀬 とし	出井 一雨 大橋 廼代	俵谷美智子 黒沢美紗緒	田原 重子 茂木 和子
平成四年	中山 玲子 日吉登美女	椎野美代子	神田九十九 森 あい子	田川 澄絵 河村 真里 酒井 佑子
平成五年	立川 京子 佐々木久代	川村 悠太 俵谷美智子	田村 照子 中西磨智子	河村 鞠
平成六年	出井 一雨	山中 順子	茂木 和子	清水 緑子

平成六年	かな女賞	季音賞	水明賞	新珠賞
波多野寿子	上岡 正子 黒沢美紗緒	吉田蒼生子	三浦 文子	
平成七年	小林美夜子	長谷川久枝 山本 松枝 弥永 信子	富川三枝子	松本 光子
平成八年	永瀬千枝子 吉田蒼生子 神田九十九	高橋美枝子 常見 知生	石山かつ子 酒井 佑子	
平成九年	小林 京子 長谷川エミ 佐藤 緑芽	田村 照子 茂木 和子 中 たけし	星野 和子 柚木 治子	小倉 和子 柚木 治子
平成一〇年	吉田 静二 川村 悠太 野田 勇泉	高橋美枝子 富川三枝子	永野 史代 杉田みつる 石山かつ子	中澤 妙子 加藤 礼子 町野 広子 増田くみ子
平成一一年	池上貴誉子 大澤 玲子	星野 和子	狩野 睦子 柚木 治子 戸沢 可伊	町野 広子 小林 和枝

平成一二年	かな女賞	永瀬千枝子	石山かつ子	山之上友江	北上 正枝 黒田 悦夫	新珠賞				
平成一三年		高橋さだ子	原田 栖子	黒田 悦夫 小林 勉子 金子はる子	井上けい子 西谷 裕子	平成一〇年	岡谷値津代	大村 節代 川野 妙子 田村みどり 由良ゆら女	森本 早苗 町野 広子 谷中 菊乃	新津 英子 境 延昭 大塚沙智子
平成一四年		椎野美代子	岩谷 精一 柚木 治子 山之上友江	星野 光二 三浦 文子	小林 和枝 鈴木 花子 佐々木順子	平成二二年	山本鬼之介 星野 和子	田寺 玲子 菊池ひろこ 酒井 佑子	土屋 富子 岩松比奈子 兼 千晴	菊池 洋子 五明 昇
平成一五年		大橋 勉代	星野 光二	大川富美代	駒 牧乃	平成二三年	森田 祥絵 吉沢 純枝 白井 由美	山中みどり 新津 英子	梅澤 佐江 池田 雅夫 藤井 清子	
平成一六年		堀 敬子 山中 順子	三浦 文子 小林萬二郎	西谷 裕子 高島 寛治 小林 和枝	田寺 玲子 森本 早苗 長谷川佳子	平成二四年	境 延昭 島崎ゆきを 森本 早苗	大塚沙智子 長澤 健次 石井 喜恵	新谷 鬼山	
平成一七年			大川富美代 服部みどり	大村 節代 内田 恵子	井上とも子 加藤むら子 山岸 光江	平成二五年	吉住 光弥	半谷比奈子 由良ゆら女 大浜 洋子	井上とも子 宇田 白鷺 鳥羽 和風	和田 隆一 荒井 俱子
平成一八年	山本 松枝	高島 寛治 小倉 和子	小林あきを 井上けい子 田寺 玲子	齋藤 祐輔 小野寺左右志良 山岸 光江						

令和七年	かな女賞	季音賞	水明賞	新珠賞
永野 史代	河野はるみ	菅原 卓郎	石関 六弦	
曲淵 徹雄	新 曆文	岡田 宣子		
菅原 卓郎				
鼓笛賞Ⅱ反町 修	山紫賞Ⅱ綿引まりこ			
(以上)				

いかがですか

「俳句曰めくりカレンダー」

令和八年の「俳句日めぐりカレンター」の三六五句の中に、また鬼之介の句が採用されました。掲載句は、十月六日の「桧皮剥ぐこれぞ故郷の黍嵐」です。

監修者 神野紗希氏の卓越した解説と暦の情報が皆さんの作句に大いに役立つと思います。よろしければ、直接左記へご注文ください。

主宰 山本鬼之介

〔注文先〕

新日本カレンダー(株) 電話 06(6971)4480(代)

俳句の日めくり カレンダー

2026
令和八年

野に大河人笑うなりお正月

新年はあけぼの月三日月です。
「やがやがやが」の音で、正月の朝を告げる。この歌は、
野には大河人が、人はハハとい
ますのびのびのお正月に
生えよりの春を祝う歌に
なっています。

作：山本免之介



2026年 1月 木曜日 大分県

金子市太
賀町

松皮剥ぐこれぞ故郷の黍嵐

収穫時期到来！秋風を誘ふのは、旗
い風に聞くとおどろきます。
田舎の風景をくちくちと大きく描き
た雄（こ）の姿が目に留まります。
その雄（こ）の姿が目に留まるまで、何
となくの季節感が感じられます。

作：山本免之介

2026年 10月 火曜日 熊本県

山本免之介

- 神野紗希氏監修。一日一句、古今の句と季語を学べる
- 「暦」の情報満載で作句のお供に
- 俳句仲間へプレゼントとしても大人気

サイズ：18.5×12cm・385ページ 2,000円(税込2,200円)

〒537-0025 | TEL.06-6971-4480
大阪府東成区中道3丁目8番1号 | FAX.06-6972-5885

新日本カレンダー株式会社

※在庫数に限りがあるため、品切れになる場合がございます。

「現代俳句カレンダー 2026」 販売のご案内

「現代俳句カレンダー 2026」ご注文の受付を開始します。
今年も引き続き多くの会員からのご注文をお待ちしております。

◆ 体 裁：A 4 判の上下二連

◆ 価 格：1,200 円 / 1 冊（定価の 2 割引）

◆ 注 文：下記の通りお願いします。

葉書に 3 項目を明記する。

①注文者の住所・氏名・連絡先電話番号

②注文冊数

③受取り方法[発行所で引取・自宅又は指定先に発送]

葉書の宛先は、

〒330-0064 さいたま市浦和区岸町 4-10-21

水明俳句会 カレンダー係

注文締切 10 月 20 日(月) お早めどうぞ!!

◆ 備 考：①水明俳句会より下記 11 名の俳句が載ります。

主宰（短冊揮毫） 網野月を（短冊揮毫）

大村節代 石山かつ子 大橋廸代

星野和葉 青木鶴城 石井喜恵 境 延昭

五明 昇 日高道を

②自宅又は指定先に発送をご希望の場合は、
実費送料をご負担いただきます。

※間違い防止のため、▼ご注文は葉書でお願いします。

葉書以外の注文はご遠慮ください。▼

※ご不明の点については、[総務部 日高道を]

TEL 090-2122-1223 へお問合せください。

主 宰 山本鬼之介
総務部長 日高道を

羽織

山本鬼之介

少年の日の「二十面相」夏館

夏草に総身あづけて斬られ役

虫干や序列確たる五つ紋

蚊柱へジャンヌダルクのごとく行く

炎昼やわが分身の影さがす

夕焼を食らふ立方体の大オブジェ

雲海へ下りてワルツを踊りたし

前進の果ては驀進雲の峰

煉瓦の街深谷

井上燈女

ど
の
家
も
家
号
が
あ
り
て
梅
雨
瓦

青
淵
の
威
風
堂
々
と
額
紫
陽
花

新
涼
や
駅
百
選
の
赤
煉
瓦

引
き
込
み
線
の
跡
は
歩
道
や
花
木
僅

雲
の
峰
ホ
フ
マン
窯
に
人
容
れ
ず

噴
水
の
折
れ
易
き
秀
や
夕
風
に

ホ
フ
マン
窯
に
栄
一
忍
ぶ
大
暑
か
な

深谷には、渋沢栄一が設立した日本初の機械式煉瓦工場「日本煉瓦製造株」があり、連続機械が可能な「ホフマン輪窯」と呼ばれる窯の導入と、利根川に堆積した粘土を活用することで、高品質の煉瓦の大量生産を行い、深谷煉瓦は、日本銀行、迎賓館、東京駅など、明治の日本の代表的近代建築に数多く使用されており、深谷市内には今も煉瓦造りの趣ある街並が残っています。煉瓦の建築物は百年以上持ち、土など自然素材を原料とするため、砕くと土に還すことが出来ます。自然災害や地球温暖化に対応して、エコ素材として見直されています。

晩夏光

松井 由紀子

鐸 広の何処に置こうか夏帽子
夕 あかり破れ囀を揺らす黄金蜘蛛
二 千歩の出会い目の合ふ青蜥蜴
初 秋や風を見たくて拭くガラス
初 鳴きのちろろ長編の終章
秋 分に生まれ変^{へん}化^げの雲が好き
再 会はず拳ぐる手晩夏光

多少の未練を残しながら絵筆を置いたのは八十二才でした。道具立ての嵩はる体力勝負の絵画制作からは鉛筆と紙だけで足る自己表現の世界「俳句」は楽で面白そうに見えました。――がそれがとんでもない思い違いだと気付かされたのは間もなくでした。一句を創り出すのは一枚の絵を完成させるのと同じ、絵具が文字に替わるだけでセンス、構成力、技術力が要求されると云ふことでした。老いた今行動範囲は狭まりましたが反って身近な日常の中にいとしきもの大切なものを見出せるようになりました。今後も句作を生き甲斐に丁寧に生きて行きたいと心から願っています。

雪 嶺

● 季音雪欄作家近詠鑑賞

染 谷 風 子

◇花の刻（六月号）

石 井 喜 恵

なほ美しき逢ひたき時の初桜
再会の肩震はせり糸桜
悔ひとつある日の桜眩しとも
つなぐ手に風の優しき夕桜
篝火に浮かぶ横顔夜の桜
入水するごと大川端の桜かな
さくらさくら此の先いくつ会ひ別れ

出会いから別れまでのドラマ仕立ての連作七句。一句目、「なほ」は「相変らず」と言うよりも「以前よりまして、更に」の意だ。愛しい人との逢遇は初桜を一層美しく感じさせる。桜の開花は古来より日本人の待ち望むことで、初桜にはその喜びがある。二句目、糸桜は別名枝垂桜で樹頭から細枝を垂らし、祇園や平安神宮が有名である。肩震わせて撓垂れる景は糸桜と同化する。四句目、つなぐ手を春風が優しく包み込む。春の宵に夕桜が美しい。五句目、可惜夜の篝火が夜桜と愛しい人とを照らし出し、作者はその横顔に陶然としている。六句目、舞台は暗転し大川端へ。大川に迫り出す桜は恰も入水するかの如くで、観客に死のイメージを誘発させる。愛と死は日本文学の永遠のテーマだ。七句目、釈尊は「会者定離」と人の世の無常を説いている。ドラマ仕立ての連作は新派の水谷八重子を彷彿させる。以上私の独断的鑑賞である。

◇今日ありて（六月号）

五 明 昇

夏来る重ねて吸るせいる蕎麦
筍に歯の機嫌よき坊泊り
アルプスの水掛け流し洗鯉
口開けのそら豆熱し縄のれん
母校先づ一勝の夜の生ビール
角打ちに盛切で酌む冷し酒
打水や深川めしの小販はひ

美酒少量・俳句三昧の日常詠七句。一句目、作者は信州の出身である。立夏の今日、故郷を偲びつつせいる蕎麦を堪能する。中七に作者の浮き浮きた心情がよく表われている。二句目、坊泊りであるから精進料理である。新鮮な朝掘りの筍が如何にも旨そうだ。三句目、日本アルプスの麓の長野県佐久地方は養鯉が盛んで佐久鯉が特産である。私も子供の頃父の作った洗鯉を酢味噌でよく食べた。アルプスの水で育った鯉はさぞ美味であろう。五句目、母校は高校か大学か、種目は何かの表現はない。一勝を口実にビールを楽しむ作者の人柄が表われた句。六句目、角打ちは酒屋で買った酒をその店内で飲むこと。盛切はコップや枡について一杯ずつ売って来で「盛つ切り酒」の略である。愛飲家でないれば中々出て来ない言葉である。七句目、深川は庶民性のある粋な町である。打水にその風情を感じる。食と酒を称えた小粋な七句である。

◇平凡な幸せ（七月号）

小倉 倭子

ギター背負ふ朝のバス停風光る
メモ帳に散らす言の葉クロッカス
化粧はねば殊更清しヒヤシンス
平凡な日日のよろしき犬ふぐり
夫の留守メダカに餌やる昼下がり
子の説教生真面目に聞く子供の日
紺碧の愛の衣を多佳子の忌

添えられたエッセーに「然り気なく心身のリズムに合わせ
平凡で且つ、小さな幸せを詠み度く思う」とある。その俳句
観を實踐した七句である。一句目、「風光る」はどこかに希
望や青春の息吹、新しさを感じさせる季語である。ギターを
背にバスを待つ青年に作者はそれを感じている。二句目、ク
ロッカスは公園の花壇によく植えられている。自宅の近辺を
吟行中の一齣である。四句目、表題「平凡な幸せ」を具体化
した句。人間日々無事に過ごせる事が一番だ。「幸福の形は
いつも同じだが不幸の形はそれぞれ違う」と言う西洋の諺は
真理だと思う。五句目、これぞまさに「平凡で且つ、小さな
幸せを詠」んだ句。六句目、達観の句。我が子の説教を素直
に聞くことは中々できることでない。七句目、前の六句とが
らりと変わり、思考を要求する句だ。「紺碧の愛の衣」とは
何か。読み手に多重な読み方を誘いかけて来る措辞だ。筆者
は自由奔放に人間愛を表現する句境と思う。橋本多佳子は華
麗で情感豊かな作風の俳人である。作者はエッセーで「人生
終盤の時下」と書くも俳句に対する情熱は未だ衰えていない。

◇鳥羽谷（七月号）

鳥羽和風

風吹かば風の色して桜草
鋏杖に空の淋しさ鳥帰る
許されよ間引く子猫の声哀れ
聖五月亀の甲羅に願ひ事
筍や昔土葬の石擡ぐ
植ゑ月の水田明りに浮く目高
鳥羽谷の青田見下ろす先人碑

三句目、何とも胸に迫る句である。犬や猫の子を捨てる事
はかつてよくある事であった。捨てられる子猫の声も哀れだ
がそれを見詰める親猫の涙目も哀れである。人間にも「子返
し」と言う間引があった事は歴史的事実である。作者は心
両手を合せ子猫に詫びている。四句目、「聖五月」と言う時
候の季語の他に「聖母月」と言う行事の季語がある。五月は
神の母のマリア信仰の月である。ハイネの歌う「美しき五
月」に亀の甲羅にする願ひ事とは何か。生命力溢れる五月の
願ひ事は「不老長寿」か。五句目、何とも不気味な句である。
昔土葬の地の墓石を擡ぐが首を出す。生と死の共存する
土着性を詠んだ句。六句目、大景、中景、小景と落としつつ、
最後に小さな目高に焦点を絞った句。作者の技法が見事であ
る。七句目、鳥羽谷の鳥羽公園の「澤本翁の碑」を詠む。澤
本翁は山本主宰の祖父澤本常次郎氏である。小浜線の大鳥羽
駅誘致に貢献され、又地域の発展に尽くされた。氏の徳に報
いる為、村民が浄財を提供し顕彰碑を建立した。澤本家は小
浜藩主の酒井侯より苗字帯刀を許された代々の庄屋であった。

ゆずり葉

◆季音七月

檜 鼻 ことは

語呂語呂ゴロゴロ語呂合はせ春雷

永野 史代

「語呂語呂ゴロゴロ」の繰り返しが軽妙で、声に出して読んで、何とも楽しい一句です。

春の雷は、夏の雷のような烈しさはなく、語呂合はせにはぴったりの幹旋。「音のたのしさ」や「言葉を転がす遊び」を主役にし、洒落や言葉遊びの文化を軽やかに詠み上げた、まさに「語呂」を愛でる一句。句そのものがダンスをしているようで、言葉遊びそのものを楽しむ作者のユーモアを感じます。この句に限らず韻文は声に出して読むものだと思えた気がいたしました。

画学生らの絶筆抱く夏木立

梅澤 佐江

無言館を訪れた時のことが思い出された一句です。無言館は塩田平の山中にひっそりと建つ美術館です。入り口らしき扉から中に入ると、静寂な室内には、若くして戦死・戦没した画学生たちの遺作が展示されています。画学生たちの残し

た絵は、恋人や家族の肖像であったり、故郷の風景であったり、また、戦地から家族に宛てた手紙等も展示されています。無言館のことは多くのメディアで紹介されてきていますが、この場所に身を置いてみて、はじめて感ずることができものがあふ……そのような気がいたしました。

夭折した若き画学生の遺作を抱く夏木立は、彼らの無念を静かに慰めるように抱いているのかもしれませんが。心に留めおきたい一句です。

新茶汲む有田の薄き口造り

青木 鶴城

普段の生活と切っても切り離すことのできない茶。そう気にすることも無く毎日いただいています。新茶とあれば、ゆつくりと贅沢な時間を過ごしたいものです。茶葉からは甘い香り、少し齧ると何とも言えないようないすかな甘みが口にひろがります。さて、豊臣秀吉の朝鮮出兵の際に日本に同行した陶工が有田の地で白磁鉢を見つけたことが有田焼の始

まりだということですが、口縁が薄く仕上げられた茶器は見
た目にも美しく、新茶の緑をいっそうに引き立てたことでし
ょう。「新茶汲む」という措辞からは、作者の喜びと丁寧な
所作が、「有田の薄き口造り」の措辞からは、器に対する作
者の美意識が伝わってくるようです。拝読し「季節を、器こ
といただく」という至高のひと時を共にさせていただきまし
た。

初物はまづ仏壇へ豆の飯

西浦千枝子

祖先を大切にし、日々の生活を過ごしておられる作者の姿
に、とても穏やかな気持ちになりました。毎朝、静かに仏壇
に手を合わせ、先祖に感謝することから始める一日は、心の
安らぎを得られる一日でもあります。仏壇に出来立ての豆ご
飯をお供えし、仏壇に手を合わせる静寂なひととき。季節の
恵みを「いただく」前に、先ずは祖先に「お供えする」とい
う日本人の心が丁寧に詠まれた一句です。「豆の飯」という
具体物があることにより、白い湯気を立てる豆ご飯、静寂な
仏間、供えた後にいただく食卓の様子、そのような暮しの温
もりがほのぼのと伝わってきます。

さやうなら背中ではる春日傘

曲淵徹雄

やなせたかし氏の詩集『やなせたかしおとうもののがた
り』（フレーベル館）に、母を見送った時のことが「母のパ

ラソルは蝶のように麦畑の中を遠ざかっていった。母は何度
かふりかえった。ぼくらはそのたびに手をふった」と挿絵と
ともに述べられています。やなせたかし氏夫妻をモデルにし
た朝の連続ドラマにも、この時のエピソードが描かれていま
す。「：母さんはすぐ迎えに来ますからね」と言い、そして
何度も「お母さんー」と言いながら手を振る嵩のほうを振
り向かず、バラソルをくるくると回して去っていくというシ
ーンでした。

この句を詠まれた時の背景は存じませんが、切なくて美し
い映像が浮かび上がってくるようです。十七文字の表現力を
改めて知る思いがした一句です。

偕老や躑躅の根津の朱印帳

新 暦文

躑躅が咲き誇るころ根津神社を参拝し印にいただく朱印帳。
長年連れ添われたご夫婦の穏やかな春の日の一日が微笑まし
く伝わってきます。根津は谷中、千駄木と共に「谷根千」と
呼ばれ、下町情緒あふれる街並みが残り、多くの文豪ゆかり
の地であるとのこと。この後も散策を楽しまれたのではない
かと想像いたしました。

躑躅の名所根津神社のご朱印、それは数十年をともに歩ん
でこられたご夫婦の生きた証のひとつでもあります。春
の日の情景のひとつに、ご夫婦の歩みを詠まれた一句、心
があたたまる思いで読ませていただきました。

季音雪

隣 人 町野 広子

鰻食ぶ「う」の一文字の藍暖簾
蒸す関東蒸さぬ関西鰻焼く
甘味屋の引き戸磨かれ心太
虹二重ゆふぐれの丘の上
永年の隣人転居土用照り

花 火 松井 由紀子

花火見物酒一缶の草の席
遠花火夜気かきたてて届く音
三つ咲けば三人を想ふ揚花火
尺玉や月の在り処を照りつくし
大花火果て街の灯のなつかしき

護 符 茂木 和子

金太郎掛けて寝冷えを知らぬ子に
寝冷え子に母の白粥梅二粒
寝落子に寝冷えせぬかと花タオル
あぢさゐや納屋に貼られし祖父の護符
手花火に父が手を借す背後より

山開き 森川義子

公園に研師来てをり夏の夕
子の声のこだまの返る山開き
同好の面面富士の山開き
提灯に屋号の絵文字夏祭
武装して今日を演ずる夏祭

風知草 森本早苗

風知草短冊もるる師のお声
雲の峰一途に進む高速船
逢ひたくも逢へぬで虫雨よ来い
羅や歌よりトークさだまさし
熱帯夜テレビ栈敷は二十五度

月見草 山中みどり

月見草群れ咲き遙か霧ヶ峰
山小屋へ近道一群の月見草
甦る草原情歌夏の峰
土用干し夫の形見の登山靴
夏雲へ低く飛び立つグライダー

禁苑の木立 網野月を

東京の真中の樹林風涼し
蠟梅の花より甘き実のかをり
真つ白は心の中に白法師
雨匂ひ片白草を包みをり
苑の径片脇に寄る額の花

助手席 石井喜恵

色褪せし男まさりの夏帽子
旅半ば助手席に置く夏帽子
夏帯をきりつと締めて今日の粋
半衿に浪の縫取り単帯
夕風や聞きそびれたる一言を

茉莉花 井上燈女

夏帯を粋にずらして女行く
雨蛙咽のみ動く静かな目
娘が帰へるサングラス掛け他人顔
茉莉花の移り香指に残りをり
尻叩き板一枚の西瓜売り

玫瑰の花 石山かつ子

山中をロードバイクや夏の山
洗鯉柳刃を研ぐ男かな
青僧の東司当番梅雨晴間
溪を斜めにライフジャケット泳ぎ切る
番屋の中は暗くて広し玫瑰の花

舞妃蓮 大橋廸代

雨戸繰るひびきに開く蓮の花
巨き蓮は大きな虫呼び朝の風
荷風亭は松づくりや舞妃蓮
原始蓮へ合掌ながき若夫婦
考妣へ蓮の露もて墨摺らむ

袖 畳 み 大村節代

老 鶯 菊池ひろこ

草野球の三塁を踏む兜虫
真偽不明の縄文土器に兜虫
憂き世からそつと逃げ込む青簾
青簾素つぽんぼんの子を確保
青簾母の着物を袖畳み

老鶯やメールの入る休暇先
青嵐いまも吹きゐる生家かな
蜩のあと前景を欠く神社
自らの追憶に佇つ夕焼の城
廃墟なる白色雑多夕焼雲

平 淡 小倉倭子

海 山 五明 昇

色艶も移り気もなく花あぢさゐ
一粒の星出ぬ宙や豆の飯
夏料理スパイス利かす独り膳
ひとり居の一日みつむる水中花
夕散歩裾にじやれつく猫じやらし

夕映えや磯笛長き鮑海女
夏霞数へて足らぬ島の影
水無月や風が馳走の秘湯宿
木耳の間諜めける峠道
穂高よさらば夏帽を振る河童橋

目が合うて

境

延昭

蝸

牛

島津初花

目が合うて蜥蜴の孤独知る少年
脇付に「研北」とあり夏見舞
藍胎漆器の茶櫃を脇に籐寝椅子
青高原を縫うて警笛小海線
背泳ぎに数へてをりぬ宵の星

小宇宙

椎野美代子

故郷の夏

鈴木康世

どこからか陽気な風船紫陽花ロード
紗一師の呵呵大笑ぞこの紫陽花
濃紫陽花熱くぶ厚くその握手
惜別や終日紫陽花雨を呼ぶ
紫陽花や青の極まる小宇宙

子を背負ひ川辺へ来たる蝸牛
蝸牛生涯背負ふ殻を持ち
でで虫やクルルと鳴けば雨になる
銀色の足跡残し蝸牛
木の瘤に見事な変身かたつむり
渡り来し土橋木の橋合歓の花
打たで追ふ宗祇の墓の藪蚊かな
菩薩像に翅休めをり黒揚羽
闇の棲む竪穴住居蚊の声す
現し世をゆつくり行けと青葉木菟

蝸 牛 十倉和子

無 口 永野史代

勾玉に逢はむと古墳の蝸牛
將軍塚はまだまだ遠し蝸牛
秀吉の水攻め跡とや蝸牛
フランスは遠し乗り出す蝸牛
窓にまいまい古文書教室雨上がり

鰻裂く職人芸の人無口
厨にてこりこり木耳つまみ食ひ
庭の死角に潜んでをりぬ黒揚羽
天の果地の果までも黒揚羽
五月晴伊予万歳の三味太鼓

飛 石 鳥羽和風

土用あい 星野和葉

年縞の帯ながながと天の川
鐘撞きて二拝二拍手初紅葉
散髪の後ろを映す処暑の髪
盆の月母に写経の文机
土蔵まで飛石幾つ桐一葉

湯中りのふらつく素足朝市へ
漫才に独り大笑端居かな
寝冷えして新聞の文字うろろす
写経終へ穏やかな顔白玉食ぶ
衝立の向きを変へたり土用あい

季音月

守宮の夜 大塚茂子

湖北 仏守る農民夏穫
百円を見直す夏の路地野菜
雲の峰はるか昭和の大家族
たつぷりと手足腹芸守宮の夜
緑蔭に日本水汲む波久礼かな

石庭の海 丸山マシミ

「無事消光」てふ一筆届く梅雨の明
蝸牛渦に巻きこむ草の色
青空を雲の百態大夏野
ジャングルジムに一番乗りの夏帽子
石庭の海を満たして大夕焼

玉の汗 松宮保人

鵜簞の終へて川面の暗となる
弓を引く片肌脱ぎの眼に力
見てくれと母は畑より玉の汗
夕立の過ぎて静寂な夕空よ
宮の雨止みて降り来る蟬時雨

月涼し 梅澤佐江

月涼し小筥に戻す古き文
真清水を含むや五感研ぎ澄ます
名刹の礎石を守るや瑠璃蜥蜴
放心の吾を一瞥青蜥蜴
泳ぎ来し心は既に回遊魚

緑蔭 大場順子

白南風や進水式の楽高し
緑蔭やいづこともなく水筭
藪蚊打つ御手は持たず野の仏
贗作の柿右衛門置く涼しさよ
蕉翁の蟬の声きく立石寺

父母の色

正木 萬蝶

背番号「3」見え隠れして梅雨の星
ちはやぶる神おはすかに大夕焼
朝焼は母よ夕焼は父の色
半玉のすでに艶めく薄衣
心太妻はずーつと反抗期

縄文研

近藤 徹平

夏野原縄文研の地下探查
緑蔭や玉砂利を踏む立烏帽子
炎昼や行方指示待つ消防車
腕白は利根の奔流抜き手切る
交番に迷子届や夏祭

植田

檜鼻 ことは

手料理やパセリを添ふる日曜日
枇杷挽ぐやひとり暮らしの叔母の家
形代や清明ゆかりの星の村
丁寧に生きて植田のある暮らし
白団扇細筆で書く立子の句

熱帯夜

日高 道を

熱帯夜夢は現在過去未来
悠久の昔を知るや旱星
夏の夜や午前三時の本墨打
隣室の衣擦る音や明易し
麻服に着換へ妻にも夏時間

ラムネ玉

青木 鶴城

繊細に開く幻想合歓の花
きぬぎぬの淡き頬紅月見草
轟音の飛び立つ夏や三里塚
夕焼けの帰りみんなのけんけんぱ
俳諧に極意などなしラムネ玉

サン格拉斯

原田 秀子

お家芸さすが鯖江のサン格拉斯
タラップをコーンパイプとサン格拉斯
高々とVサインしてサン格拉斯
茉莉花やシャネルNo.5の方が好き
茉莉花の香りそのままいただきぬ

秋うらら 原田自然

年縞の調査再掘秋うらら
五六冊を書架に歳時記秋うらら
十和田湖に思ひ巡らし秋うらら
秋麗や八十路の迷ひも茜染
もつたいな父母のたすきぞ秋うらら

夏の海 上戸千津子

夏の海訳なく涙こぼれけり
口あけし埴輪と親し夏の風
年毎に故里遠し雲の峰
夏嵐に相の手入れる陶風鈴
落花でも保護色なみや柿の花

新涼の径 池田雅夫

今朝秋の視線定まる風見鶏
新涼の径や草葉に光るもの
一陣の風の導き霊迎
ほろ酔の佳境に入るや音頭取
いつまでも続く残暑や安下宿

苔の花 飛永鼓

一滴の香水にある面映ゆさ
貧富なきうちを背負ひて蝸牛
水打ちて明るく見ゆる苔の花
みかんの花匂ふ夕闇明るくす
蛸や空家の庭は寂として

陶の豚 荒井俱子

遠き日の仕置の納戸黴くさし
夕端居口あんぐりと陶の豚
「まついいか」で終る一日や夕端居
山滴る行の岩場に鉄梯子
夕焼雲酌むには明るすぎる空

ごめん 福田千春

薔薇色に染まる病室大夕焼
石玉垣に祖父の名のあり宵祭
茹だる日々土用鰻の旗誘ふ
儂げな色を灯して月見草
待ち人の「ごめん」のメール月見草

髪洗ふ

内田 恵子

遠くなる河童の世界髪洗ふ
鰻の一生人の一生謎のあり
赤子の眼に映る我が影青簾
あるがままの自分の居場所十葉盛る
採れ立ての木耳遊具ある道の駅

つゆの明

河野 はるみ

梅雨あがるやんはり越ゆる母の齡
夏帯をゆるりと結び甘味どこ
揃ひの浴衣帶きりと坂の街
ものの言はぬ尾のなき蜥蜴ビルの陰
夕焼の最後を見取るスカイツリー

蚤の市

曲淵 徹雄

すつぽりと古墳の尻が緑蔭に
夕薄暑小粋に傾ぐ赤提灯
早苗田のゆたけき水の濁りかな
天金の黴の香ほろと蚤の市
荒川に水門いくつ梅雨鯰

花ざくろ

石川 理恵

黴といふ字に点点と黴の生ふ
其其に蚊遣を焚いて夫と妻
雷鳴に句会どころでなくなりぬ
いかづちや走る道着のをの子たち
店じまひしたる古書肆や花ざくろ

からころ

熊倉 千重子

五百羅漢徳利かたむけ青葉風
窓いつぱいに広がる海よ夏館
小流れや跣足の子等の燥ぐ声
宿下駄で橋からころと夏夕べ
帰宅して畳に素足投げ出せり

はらから

松山 清子

幕開きて動く扇の静もれり
はらからと旅の一夜の明易し
井戸水に冷やす西瓜のおもてなし
スポーツカーに追ひ抜かれたり雲の峰
光跡を引く螢追ふ幼らよ

ブルーベリー

野口和子

初蟬やまづ遠山の梢から
炎昼やベストの中に扇風機
腰帯をぼんと叩きて祭髪
匂ひ立つ青紫蘇刻む夕厨
ブルーベリー煮て真紅なる夏の午後

蝸牛

川崎道子

地平線ははるかに彼方蝸牛
蝸牛おまへは右巻き左巻き
新塔婆のぼりつめたる蝸牛
梅雨寒や寺に飼はれし白孔雀
大輪の白蓮咲かす古き甕

万緑

西浦千枝子

万緑を見上げ見おろし高速路
紀州路の傾ぐ祠に蝸牛
大忙し友の挽ぎたて梅どつと
郭公やドライブの窓全開に
午前九時耳をつんざく蟬時雨

独座

松島寛久

洞窟に独座の羅漢片肌脱ぎ
南風や腰ふる母子フラダンス
下駄の音処暑の舞妓の厚化粧
鵜呑の出来ぬ鵜縄やかなしき目
大物を上げたポイント南風吹く

蜘蛛の糸

田中章嘉

白蓮や花托を守る日照りなか
苦瓜を食してビール口に合ひ
鼓虫や地味な衣裳で舞ふばかり
鬼蜘蛛や糸を散らして飛び立てり
蜘蛛の糸頭に糸を絡ませり

雷

瀬戸雄二郎

雷光に寝姿見せし赤城山
雷鳴に大樹の木陰追ひ出され
デパートの地下の混雑大雷雨
トンネルを出れば稲妻すぐそこに
雷鳴や銀座の酒場賑はひて

季音花

夏 帯

梅澤輝翠

実寸の着丈にしたる藍ゆかた
夏帯に合はす帯留海の色
夕風や塩焚く煙真つ直ぐに
夕焼の先の世界に踏み込んで
実盛の心なぐさめ虫送り

梅 雨 明

越田栄子

鰐広の帽子を粹に梅雨晴間
盆栽の枝振りよろし梅雨晴間
緑蔭に零れ話の二つ三つ
緑蔭の椅子に風待つ小半時
運慶の玉眼の像梅雨明くる

大仏の背中

保坂翔太

玉葱のべールを剥がす豆博士
白雪姫のやうな装ひ山の百合
大仏の背中を流す男梅雨
黒南風や朽ち行く沖の軍艦島
夏帽子耳より大きいヤリング

立 山

横山君夫

緑蔭を出で来て己が影若し
水中花いつも盛りと咲いてゐる
酒中花を浮かせて青き切子かな
立山の雲の上なる夏野行く
青鬼灯あしたの色を滲ませて

遠 雷

渋谷きいち

二時を打ち遠雷聞こゆ那須の山
遠雷や心電図には異常なく
快眠を貪る老の夏座敷
席を譲られ快き日の広島忌
夜会の誘ひ土手の群落月見草

文士気取り

染谷 風子

赤銅の漁師の胸よ大南風
早苗田や瑞穂国に双円墳
色道に戸惑ふ凡夫船遊
名画座の立て看板を夏の月
サングラス文士気取りて夜の街へ

天守閣

笹本 啓子

黴の香や骨董市に船筆筒
飛沫浴び悲鳴あぐる子船遊び
メロン切る今日は私の誕生日
山滴る石の積まるる遭難碑
天守閣丸ごと包む大夕焼

でんでんむし

寺内 洋子

でで虫もどこか品よし京の寺
でで虫の競はぬ歩み学ばねば
テーマソング聴かせでで虫眺めをり
でで虫の暮らしシンプル羨しやな
刻を告ぐるも威厳の欠けし羽抜鶏

大夕焼

西幅 公子

鋏をおき大夕焼に手を合はす
歌舞伎座へ夏帶きゆつと締め上げて
水を撒くあるじ高高風を呼ぶ
青い目が諾ふ笑顔握り鮎
万緑や子らの山彦渡り合ふ

夏野ゆく

下川 光子

夏野ゆく嘗ては海の底を行く
文月や近江息づく湖魚の群れ
目頭に青葉しぐれのひと雫
日盛の墓地のあちこち造り花
麦秋や鞆の手擦れ愛ほしむ

円卓

石田 慶子

宵宮や再会の友妻を連れ
背に竹刀豆剣士行く夕焼空
夏の風邪夫のみやげの餡こ玉
天花粉叩く妻にもある色香
設へは祖母の円卓夏座敷

門並の夏

菅原卓郎

檣破子に昼餉しつらへ夏座敷
遠泳の児のしんがりを漁舟
白番^{ベシ}瀝青^キ映ゆる極暑の貨客船
太刀をもつ老師気合の片拔手
千の田に千の声沸く虫送り

夢二の湖畔

新 曆 文

月見草咲きし夢二の湖畔かな
雷雨去り窓を全開涼生る
雷雨去り仕切り直しの痴話喧嘩
すやすやと老いて早寝や月見草
夏帽子鳩居堂から資生堂

端居して

森 和 子

端居して長嶋茂雄の話など
夕端居荒川線に振る両手
身籠りの娘預かり端居かな
山滴る牧の牛乳濃く旨し
山滴る木崎湖畔の宿白亜

片 蔭

山 戸 美 子

炎昼や暗号のごと速記文字
若者は片蔭避けて走りけり
客増えて急速冷凍かき氷
赤信号片蔭で待つ乳母車
郵便夫いま片蔭を選ばれず

夏の景色

綿 貫 ひ さ の

夕立あと山の端染むる夕日かな
白玉の味はふ青磁師を偲ぶ
むくむくの毛虫の走る速さかな
路地を行く子供御輿は声高く
ほうたるよ都心の宿で何思ふ

京都の夏

野 村 美 子

大好評夏の京都のお番菜
梅雨明くや箱根土産の寄木箱
工場から刃物研ぐ音夏の朝
箱を開くれば西瓜三つの宅配便
浅瀬の海で大きな浮輪つかまる子

梅 雨 池田 圭子

熊笹に音のなき雨閑古鳥
満開の小梨の花に雨やさし
山宿の昼のしづけさ梅雨に入る
暮なづみ白さ深まる梅の花
かすかなる河鹿の声の草枕

雷 鳴 篠崎 紀子

わが庭を本籍とする蟬が鳴く
風鈴を二つ吊るせし片田舎
一本の虹が続くや次の駅
夕風や花菖蒲の崩れけり
雷鳴や一氣に疼き出す鼓動

水 泳 清水 桂子

行李から褪せし浴衣の五・六枚
落研の素人芸や夏の宵
背泳ぎの二人の世界空と我
水泳のシルバークラス師は二十歳
黒板の文字の癖字や夏期講習

月見草 佐々木 史女

留守電の亡友しのび月見草
団扇では踊れぬと言ふ名取かな
築山に吾を留むる月見草
紫陽花のるり色映ゆる雨上り
誇るもの我にありしや洪団扇

夏盛り 山岸 久美子

夏館大樹の風にすつぱりと
長廊下磨かれてをり夏館
絶品は友の郷里のへしこ鮎
遠泳をやり遂げ笑顔美少年
研ぎ澄ます「ひばり」の歌を聴く夏夜

半夏生 高橋 満耶子

石庭の波は穏やか半夏生
大腸にポリープ三個半夏かな
点滴のスピード速し半夏生
鼻唄はうめき声かも蝸牛
白浜のパンダ返還夏の空

心 太 鈴木 玲子

酸いも甘いも如何やうにでも心太
もやもやも「そうだね」で済ます心太
甘酒の江戸の味よし箱根茶屋
甘き枇杷幼稚園より持ち帰る
夕さりて小買物へと月涼し

長崎の鐘 宮崎 チアキ

還暦の手を師に預け初潜り
風鈴や古古米わづか米櫃に
夕風や長崎の鐘重々と
街騒の遠退く山路夏館
開け放つ窓より深深夜半の夏

メロン 野平 美紗子

たまさかに来たる息子にメロン買ふ
中元にメロンを贈り喜ばれ
浜名湖や夕焼雲に染まる海
夕焼けや宵の明星西の空
「不言実行」夏の忌日に夫思ふ

祇園会 葛城 千世子

杖持ちて友と滝行ラムネ玉
地球鉄道旅をしてるの蝸牛
祇園会の鉾建てに向く鋭き目
朝シャワー父ととりあひ寝転がる
まんま生くグラジオラスの葉の曲線

『水明誌』を繙く（水明七月号）

田島健一（「炎環」同人、「豆の木」
「オルガン」所屬）

柿若葉清水で洗ふ左の目 檜鼻ことは

「柿若葉」の、明るい黄緑色で光沢のある若葉が陽光に照らされ、透き通るような輝きを放つ。その鮮やかな色彩と軽やかな質感は、初夏の生命力と清浄さを象徴し、一句全体に清涼感を与える。

清水の透明で冷たい水は、柿若葉の清新な緑と調和し、その清らかさを強調する。柿若葉が朝露に濡れて光る様子や、風にそよぐ軽やかな動きは、清水の清らかさと響き合い、左の目を洗う行為に清涼な美しさを添える。

問題は、「左の目」だけを洗っている、ということだ。この行為は、まるで「柿若葉」の明るさが左の目にこびり付いてしまったのを洗い流しているようでもあり、それによって純粹な視界を取り戻す儀式でもあるようだ。

それにしても、なぜ「左の目」だけ？ 右の目はどうしたの？ という素朴な疑問が、この句に固有の余韻を与える。もちろん、そこに明確な理由は無いに違いない。だが、それ故に、「左の目」という理由なき選択が、この句のただならぬこだわりのようにも感じられる。

姉の手の甲に蟻をり払ひけり 石川理恵

掲句はあたかも日常のささやかな一瞬を切り取っただけの句に見えるが、「蟻」を見つめる妹の視線には、「日常のささやかな一瞬」以上のものが感じられないだろうか。

この句の主眼は、「蟻」を「姉の手の甲」に見つけたことにある。そこには妹の「姉」への親密な眼差しや、家族という関係性の中で育まれた時間の積み重ねが浮かび上がる。

「手の甲」という具体的な部位に焦点を当てることで、姉の存在が身近で触れられるものとして立ち現れつつも、そこに現れた「蟻」へ注がれる妹の眼差しには、「ささやかな一瞬」以上の——いわば〈執着〉のようなものが感じられて、「姉」との関係性における親密さを超える何ものかを際立たせる。

下五の「払ひけり」は、あたかも妹の目を覚めさせるように、〈執着〉そのものを払い落とす。それは「蟻」をめぐる一瞬の出来事であるが、妹が「姉の手の甲」に蟻を見つけた瞬間、そして「姉」がそれを払う一連の動作は、日常の中で見過ごされがちな小さな出来事のなかに、妹と「姉」との説明し難い関係性を煌めかせる。

俳句

10月号 予告

9月25日発売

予価1,100円(本体1,000円)⑩

巻頭作品50句

中村和弘

作品21句

橋本榮治・山下知津子

角川源義没後50年特集

いま、〈抒情〉と

〈軽み〉を問う

●50句選十鑑賞

●人と作品

●抒情の復権

●軽みの真義 ほか

隠岐の楸邨俳句

特別対談採録

「寒雷」を読む

石寒太×小澤實

宇多喜代子 特別作品15句

「夏の雲」

角川俳句賞作家の四季

秋15句

……若杉朋哉

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売!

電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>) など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊 俳句界 2025年 10月号

特集

これからの俳句表現に
新味を求めることは可能か?

●これまでの俳句の新味 井上泰至

●俳句に新味を求めることは可能か?

大井恒行 山田耕司 マブソン 青眼

抜井諒一 赤野四羽 佐藤文香

小川楓子 浅川芳直

今月の俳句界NOW 川井城子

特集 それぞれの家族詠

○家族を詠む作品とエッセイ

柴田佐知子 太田うさぎ 松本勇二

矢野玲奈 西川火尖

○一句鑑賞 心に残った家族詠

大石雄鬼 岩田由美 原朝子

金澤諒和

隔月連載

座談会

若手句集
を読む⑤

相子智恵 抜井諒一
堀田季何 (司会 井上泰至)

【注目】二冊 山岸明子『俳人とその生涯』

連載陣 宮坂静生 青木亮人 坂口昌弘 八田九郎 ほか

「俳句界」投稿欄

一流選者10名!
充実の投稿欄



株式会社文学の森

お求めは… ☎169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com/>

現代俳句鑑賞

網野月を

風船のゆきどころなき文化祭

田中木江

〔俳句四季〕7月号・穴子より

「風船」は春の季語であるがこの句の中心的な季語は「文化祭」であろう。「ゆきどころなき」と言われると筆者はとうしても世間に対する強烈な批判精神を読み取ってしまう。「文化祭」であるはずなのにというパラドクスも滲み出ているように読み取ることが出来るであろう。他に「全員の穴子にたれをかけ呉れし」がある。

腕が出ている墓参の赤い車から

田島健一

〔俳句四季〕7月号・結社アルバムより

まだ秋暑が残っているのであらうか、この「腕」は半袖を着ている方の素の「腕」であらう。実なのか虚なのかは分からないのであるが、句意からは旧来の「墓参」とは異なる現代的な光景を感じとれる。とすれば作者も同様に時の流れを感じ取っていたのではあるまいか。そんな勝手な想像をしながら、筆者は駐車場に駐車している「赤い車」ではなくて、走り出した「車」を思い描いた。

ささ揺れの影もささ揺れ俵麦

本杉純生

〔俳句四季〕7月号・夏来るより

「ささ揺れ」が如何様な様子を描写しているのか筆者には確とは分らない。笹のように揺れているのか、細かく揺れているのか、「ささ」は風の擬音なのか、分からないのだが、リフレインから「俵麦」自体と「影」が同じ揺れをしているということが理解できる。「俵麦」の特徴的な穂が「影」を伴って揺れている景は、涼しげに思われる。他に「本降りのドラの音高き競渡かな」がある。

潮引けば蟹歩み出す紅樹林

加藤耕子

〔俳句〕7月号・御岳より

マングローブの茂る海岸線を想像した。作者の視座はボートからであらうか。引き潮に際して「蟹」が出現したのである。「歩み出す」とは将にその通りで、慎重に周囲を観察しながら歩を進める「蟹」の生態をよく活写している。

雪解川かの人形の舌綺麗

鳥居真里子

〔俳壇〕7月号・おきつきのおくより

「かの人形」の正体は分からないのであるが、きつと薄汚

れているのであろう。にもかかわらず「舌」だけが「綺麗」な状態に保たれているのである。ドキツとするような緊張感のある光景である。他に「鬼蓮のおきつきのおく鬼の唄」「陽の雨よスキヤンダラスな青揚羽」がある。

鈴蘭のブーケトス見失ふ空

小林京子

〔俳壇〕7月号・花の声より

この句の破調感が心地よい。五五七のリズムとも考えられるし、句跨りとして読んでも良いだろう。「ブーケトス」の後の間が「鈴蘭のブーケ」を探している間合いであり、「見失ふ空」に読み手を誘導している。他に「一夜のジャスマン星くづを輝かせ」がある。

古雛に笛吹く指の残りをり
蝕終へしひかりの月や冬薔薇
陽の翳るところも梅の林かな
蟬の穴より月光の漏れ出づる

林 桂

〔句集「遠近紀行」より〕

一句目は「古雛」の細部に目が行き届いている。句中からは人形の執念のようなものさえ感じる。二句目は「終へし」が肝である。再生した月に「蝕」の余韻を味わっている作者がいる。三句目は叙景に徹した句のようにも思うのだが、作者のことであるから何かテーマが潜んでいるように思えてならない。鑑賞するには却って難しい句である。四句目は光の方向が逆なのではないか、と思わせるところがある。「月光」が「蟬の穴」を周囲より際立たせて見せていると筆者は勝手に解釈した。この作者はルビをふることに重きを置いている。ルビが句の解釈をより多次元の方向へ導いているよう

である。少なくとも筆者の場合はそうなのである。

センサーの感度抜群雨蛙
雨の音傘で楽しむ青田道
命名を墨もて記す良夜かな
まだ色を持たぬ波音初日待つ

〔句集「四季吟詠句集39」より〕

一句目は座五の「雨蛙」が落ちになっている。氣象庁の精密機器でもなければ、おばあちゃんの天気予報でもないのである。二句目は雨を厭う方も多いが作者は傘に当たる雨粒の音を楽しんでる。三句目は命名書についての一句であろう。嘗ては墨書した半紙を鴨居に張り付けたものだが、昨今は豪華なものが多くなつた。四句目は視覚的把握と聴覚的要素を巧みに組み合わせているところに奥行きのある句が生まれた。

逞しき風に育つや若緑
春シヨール旅の疲れがこぼれ落つ
六月の雨に爪弾くマンドリン
金木犀夜風に二人立ち止まる

〔句集「四季吟詠句集39」より〕

一句目は座五の季語「若緑」をテーマにしているのだが、「逞しき風」が句の肝になっている。「若緑」の揺れるさまが清新である。二句目は脱ぐ時の「春シヨール」の様が将に旅疲れを脱ぐような仕草に見えたということであろう。三句目は「爪弾くマンドリン」を「六月」に固定したところが作者のオリジナルの發揮の為所なのである。四句目は「二人」の関係性よりも、「二人」揃って「立ち止ま」らせた、「夜風」に含まれる芳香に焦点を絞って鑑賞したい。

篠崎紀子

私の三句

河野 はるみ

喜望峰越ゆるを夢見三尺寝

この句は席題の「望」の詠込みで、まずきぼうかと思ひ、希望・喜望同じ読みだが私には「喜望」そう喜望峰・航海者・バスコ・ダ・ガマ 歴史で教わって以来、憧れの冒険家として頭の隅にあつたのが思ひ出され、一緒に喜望峰を越える夢を見ようと、季語を調べ三尺寝に出合い、一気に書き始めて出来た句で、主宰をはじめ先輩方に喜んで頂き、良い句が出来たとお誉めの言葉を頂き、作句が、より楽しく、ガマ様が一年駆けたところを、三尺寝（日の影が三尺移るだけの間）で越して、ごめんなさいと思ひながら、しあわせを感じ、代表句にしたいと思う句です。

秋の水痛みの海へ注ぎけり

秋の水は母の戒名にも入っている二文字で、何度も季語の意味を調べ私なりに母の生き様と母の親心の広さ温かさを秋

の水に重ねました。日本は海に囲まれ、海からの贈り物も多くあるが、近年水の事故・事件も多く、又熊本水俣・新潟阿賀野第二水俣病でいまだ闘う人、又海水温の上昇による魚介類・海草類の痛みなどなど。「どうぞ秋の水でっ」と祈りを込め、改めて母の強さを思ひながら祈りながら作句しました。

寄り添ふは石碑の根元一輪草

草加日光街道松並木の側に転居して以来、桜だ祭だとか何かにつけ足を運ぶ事が多く、楽しくなり、俳句を詠むようになってからは、兼題が出ると何かヒントを求め、出向き、先ずは旧日光街道の旧家の屋敷林から並木へと進み、芭蕉翁・曾良の像・子規・虚子などの句碑へ、すると草の繁みに守られるがごとくその傍らに一輪草を見付け、一輪草が御喋りしているが如く思われ、花と花が寄り添い句碑の根元を飾って居るように思え、独り暮しになれて来た私だが、とても羨ましく、寄り添える相手が欲しいかなあ、いやいや独りが、自由でいいとか、頬笑みながら作ってみました。

私の三句

曲淵徹雄

小春日や図体晒すラッセル車

雪国の富山で私が育った頃は、大雪で鉄道（当時は汽車からディーゼルカーに変わりがけていた）が止まることが珍しくなかった。しんと雪の降る一夜が明けると、外は一尺を超える新雪が積もっていた。高校へは、村から当時の国鉄・北陸本線の入善駅まで自転車で行き、魚津駅までの汽車通学だった。雪の多い一月から二月までは、同学年の幼友達と二人で魚津の時計店の二階に下宿したこともある。毎朝、ラジオの時報で店にある時計の時刻合わせをしていた家主さんの様子などが思い出される。

初冬の日、百歳を越す母の顔を見に浦和から故郷まで往復した。北陸新幹線を糸魚川駅で降り、日本海ひすいライン（旧北陸本線の一部）に乗り換え、ゆつくりと日本海を眺めながら進んだ。富山県に入り泊駅に停車すると、引込み線にラッセル車が停まり、冬に向けて整備している姿があった。小春日のなかのラッセル車がいかにも逞しく見えた。

御坊まで一里の小道いぬぶぐり

春の陽気に誘われ、親鸞聖人にゆかりのある真岡市の専修寺に向かった。常陸国稲田の領主の招きに応じて、流罪の地である越後国から常陸国に移った親鸞は、妻の恵心尼、子どもとともに草庵を結んだ。その後、親鸞は、「教行信証」の

筆をとり、関東の地の教化に取り組んだ。

故郷の生家には南無阿弥陀仏の名号の掛かった仏壇があった。農仕事のない冬期には、村の各家の持ち回りで法話会があり、善男善女が集まって経を唱えているのを聞いていたものだ。そのため、私は特に真宗信者ではないものの、親鸞聖人の名には親しみがある。

真岡鐵道・寺内駅から地図を頼りに、いぬぶぐりの咲く田舎道を専修寺へ一時間ほど歩いた。京を離れたこの地で親鸞は深く思いを巡らせたのであろう。

糸柳船宿へ入る割烹着

水明の行事に「春の吟行会」があり、花の季節の吟行を楽しんでいる。東京本所のビッグシップを会場とする春の吟行会に参加したのは二〇一六年、二〇二一年、二〇二五年の三回になる。朝、浦和の家を出て会場へ向かう道中が主な吟行の時間になる。電車を浅草橋駅で降り、浅草橋から神田川に沿って数分も歩けば柳橋である。次いで両国橋で隅田川を渡り、回向院、両国国技館、横網町公園、旧安田庭園を巡って会場へ向かう。本所での春の吟行会の一回目には「狼藉の鳥の騒ぎも花の道」の句を、二回目は「花筏人情嘶を生みし橋」を、今回は掲句を作った。柳橋の傍の船宿へ割烹着の女性が階段を上る姿に出会った。思わぬ巡り合わせに心が動くのも俳句の楽しみである。

俳誌望見

梅澤輝翠

「鷗座」

令和七年四月号

通巻四六二号

主宰 松田ひろむ

発行所 東京都板橋区

二〇〇一年八月 松田ひろむ創刊 師系 古沢太穂 月刊
 平明清新・抒情・生活感覚をモットーとしている。
 主宰句「千日千句抄ししばし待て」二十句より

色欲の無きうれしさよ月おほろ
 花を召せ兜太・寂聴・杏子仏
 さくらさくら終末時計ししばし待て
 染井吉野フアルファッレにも焦がれつつ

月山や余り苗にも
 花合歡のときどき目覚め五能線
 カルメン序曲バラを投げればひとり死ぬ
 鷗座の共鳴句 二〇二五年二月号より
 西谷とし子選

振り向けばアールグレーのすきま風
 びよんと八十上手に割つて寒卵
 福地香久子選

ガザの子の頬に血痕米こぼす
 雪吊やUFOからの合図待つ
 招待席 アラベスク

茎立ちのそれぞれに使徒来てゐたり
 麗らかや器の底のアラベスク
 特別作品 青いまま

沈丁花女系家族の青いまま
 皿一枚割つて四月のカレンダー
 同人I作品 七名 各五句より二名

宮 沢子
 小平 湖

石口 榮
 杉浦 一枝
 加藤 右馬

宮 沢子

追い風の和音を聞いて黄水仙
 恋猫も私も弾け眠れない
 同人II作品 二十五名 各五句より二名
 平和の日白詰草の上におく
 酒中花を知り砂町に会いに行く
 鷗座作品 四十四名 松田ひろむ選
 まほろばの陥没道路飛花落花
 大足の波郷と我とオキザリス
 鷗座俳句十選より 松田ひろむ選
 ゆるキャラの潮引く力吊し雛
 政倫審ほうれん草を茹ですぎる
 雪催地藏通りにマダムジュジュ
 古沢太穂記念東京さんぽ句会
 石田波郷記念館・砂町さんぽ
 錦糸町駅に集合、北砂町の妙久寺にある句碑「繁縷や焦
 土の色雀ども」妻のあき子と暮したあき子の実家を見学、
 記念館は商店街の側の文化センター内にあり波郷の暮らしぶ
 りの展示等があり見ごたえがあった。
 当日作品
 波郷への手土産酒と露味噌と 高矢実来
 恋猫や小銭で足りる銀座まで 川目さと子
 ☆新名句入門
 名句のための俳辞苑35 係り結び・袋返し・奥さん 松田ひろむ
 ☆「砲車」は戦争を賛美したか 日野百草
 |長谷川素逝と戦争俳句|
 第五九回鷗座通信句会結果発表
 等等とてもこのページ数では伝えきれない満載で、勉強させ
 て戴きました。

山本鬼之介 選

水明集

さいたま 皆川更穂

八方に満つる匂ひや鰻の日
産土の川面に映す夏帽子
山の幸海の幸富む島の朱夏
秘密基地の入口塞ぐ蔦青葉
一日の繰り返しとふ蟻の道

万緑や第六感の動き出す

田植時遠くJAバンクかな

蜘蛛の囀の破れ山河の風が抜く

葉隠れに青梅見えて小糠雨

黒南風や沖縄語といふ日本語

小林京子

さいたま 寺町知子

新緑に隠れて御座す阿弥陀堂
新緑や白スニーカーの弾むとき
鴨川や白鷺とある夕涼み
銘仙を着こなす女アマリリス
梅雨寒や納戸の隅の鯨尺

露座仏の借景の山滴れり

籐寝椅子名の星探す山の宿

籐椅子に湯上がり美人くつろぎて

夏河原一家総出のバーベキュー

紫陽花や鎌倉石の磴上がる

菅原真理

松蟬や追憶の日日山にあり
梅雨茸恨み節でもうなりさう
短夜や淡き群青色の朝
花栗の匂ひ波うつ夕間暮
小紋染の試着の鏡夏来る

反町 修

老鷺の森を響動もす谷渡り
浴室の黴の前線前進す
天を衝く未踏の高嶺雲の峰
逸る気や垣間見えたる濁り鮎
黴の寮天井の地図ロシア領

大いなる影引く山の蟻の道

さいたま 霜多光代

平塚 丸屋詠子

初恋のフルーツボンチさくらんぼ
妃殿下のみどり基調の植樹祭

夏帽子行き交ふ人の会釈かな
水無月の大川下る方舟や

蜘蛛の囲にかかるもうれし里帰り
老木の蜘蛛の囲雨をはね返す
夏の日や洛中洛外図に見入る
鎮守社の祠がしんと青葉闇
夏めくや熱気あふるる立稽古

臺立ちの玉葱を引くそつと引く

越谷 阿部幸代

利根 倉田星歩

栗の花小さき雌花の所在なさ
葉桜の小暗き小径染工房

黒南風や義兄は陸に上がりけり
切り抜きの記事を繰りをり夏落葉

蜘蛛の囲を巧致に組むや幾何の妙
蜘蛛の巣をうわつと被る掃除かな
著我咲くや跳ぬる園児の足元に
取り壊す土台の側に著我の花
峰峰にわた雲湧きて夏に入る

槍投げて白線踏んでゐる溽暑

さいたま 森下山菜

さいたま 元田亮一

夏帽が運ぶ美瑛の丘の雲
昼顔を灯す地殻の発電所

黒薔薇を咥へをんなは修羅道へ
もぐら号夏至の谷川岳くぐる

雨の日に浮かぶ傷跡桜桃忌
梅雨晴や浅間の山の深緑
紫陽花や絵手紙届く季の移り
異国語の飛び交ふ朱夏の抹茶カフェ
蛇莓見むきもされぬ慰霊の碑

つる薔薇や父在りし日の固結び

本橋稀香

若狭 岡本祥子

糸放つ蜘蛛一瞬の無言劇
この家の栄枯盛衰蜘蛛の網

老鷺や史跡ガイドの赤備
湯上がり裸御免の缶ビール

ひび割れの田野に立つや雲の峰
日射病声を掛け合ふ習ひかな
歌ふ児に片意地を張る蝸牛
沿線の発車間際や草の息
干草に思ひ出よぎる父と牛

背後よりた走るダムや青嵐
夏場所を宇良のピンクが踊らせり
ぬひぐるみ手繋ぎ干され五月晴
機窓より雲間の棚田風青し
梅漬やこの時だけは割烹着

さいたま 田中弘子

男梅雨嫉妬してゐるこの星が
天窓を叩きて止まぬ梅雨の足
青梅の艶なす無垢の産毛かな
紫陽花の風天空に吸はれけり
権力は時限装置や七変化

さいたま 秋谷風舎

包装の割には小さきメロンかな
玉葱の丸くなるかな吾が齢
抜錨のクルーズ船や夏の潮
黒南風やぶらんこひとつゆれてをり
怒り肩で唯我独尊大玉葱

飯田忠男

鬼灯市露店に並ぶ朱と緑
鉄線花濃い紫は母が好き
微臭き旧家に残る懐しさ
扇風機居間に陣どり首を振る
金魚描く少しは動き止めてみて

東京 畑宮栄子

命名の墨のにほひや青嵐
青嵐阿吽に唸る仁王像
何処にも麒麟のをらぬ聖五月
紫陽花や開かずの踏切に五分
夜風より沢の中より河鹿笛

石関六弦

笹舟二つ即かず離れず夏の川
籐椅子や母の形に艶残る
離れ家へ募る想ひや著我の花
木木の間に蜘蛛の囀飾る昨夜の雨
ぼんぼんと亀がダイブの夏の川

吉川 杉浦千祐

父は子に剪定教ふ命継ぐ
ラメ入りの白靴軽し風の街
レース編む家族の好きな花柄で
さくらんぼ「ルビーの指輪」口遊ぶ
何思ふ孤高の詩人青鷺は

綿引まりこ

激流の小橋吞まむと夏の川
夏の川魚も陰に身を寄せり
古籐椅子湖眺めゐる大使邸
紫陽花や和歌の余白の彩染むる
ゆるハイク露天湯の満ち山滴る

さいたま 前田夏野

入梅や市電の走る街に来て
下駄箱の上が住まひの目高の子
行く先を考へてゐる蝸牛
梅雨寒や蛍光灯の球が切れ
念願の叶ひし旅や風薫る

若狭 山崎郁子

雲速き伊達の山城青嵐
紫陽花の玉より藍の雨しづく
古裕棚に富山の置き薬
湯めぐりの下駄の緒濡るるあぢさゐ路
夏霞安達太良の嶺濃く淡く

さいたま 穴戸洋子

殉教の島の鐘の音夏霞

さいたま 大熊健司

子育ての追憶たどる夏夕べ

森下美智枝

夏霞消えて煌めく瀬戸の海
墓石に煙草一本濃紫陽花
白川の茶屋の明かりや蓑簾
絶叫の保津川下り雲の峰

大阪 遠藤人美

吉原地蔵の赤きくちびる花魁草
別荘地に形珍しき梅雨茸
短夜の夜明けうれしや旅靴
順調に育ち一歳こどもの日

川島夕峰

るり玉の沢下るごと河鹿笛
河鹿鳴く隠れ切支丹の無言
夕風のほんの余りを受くる蚯蚓
夏椿誘はれゆく通り庭
あぢさゐの丘また丘の先に丘

定休日なしの店番誘蛾灯
満満と水従へて植田かな
青梅の香に騙されてひとかじり
花蜜柑気心知れし仲間旅
ほどほどにせよと蜜柑の花落ちて

黒南風に毫も揺るがぬ松本城
がうがうと梅雨を呑みこむ最上川
山小屋の固きベッドや明早し
梅雨入りの傘の花咲く通学路
黒南風や鳥低く飛び宙返り

さいたま 湯浅 和

鳥立つや忽ち瀬戸の夏霞
あぢさゐに触るる白猫ブルーアイ
紫陽花や透明傘の群れたがる
背広新調入社四年の青嵐
爆心地に絶えざる葉音青嵐

上尾 室井早都子

夕張の廢坑抱き山滴る

さいたま 横山礼子

和歌山 嶋田洋子

山滴る奥入瀬のバス青に染め
村雨に息吹き返す四葩かな

紫陽花やスイッチバックの斜面埋む
優駿のパドック眩し夏の雲

水槽の蛸吸盤の白見せる

東京 山中いちい

若狭 畠中風花

星の海思惑ありて章魚泳ぐ

蛸や蛸何眩くか海の底

三社から神田鳥越夏来る

花棒はわたしの男神興行く

若竹や彼女出来たとにきびの子
炎天を指差す球児ホームラン
素振りする丸刈り球児夏の星
雨音は歌の旋律かたつぶり
胸を張るソーラーパネル雲の峰

充足の八十路の暮し冷酒酌む

さいたま 香田裕誌

松村笑風

心経を唱へて暫し暑氣忘る

紫陽花の雨に湧き立つ毬の色

切株に咲きて一寸山桜

晚酌に適ふ極上初鰹

まいまいやマイペースなる頑固者
ほうたるや黄泉の国へと誘へり
枝蛙雨ふれふれと鳴き交はす
実梅もぐ夕べの雨も籠に入れ
青東風やむかし北前船の海

実梅落つ己が重さを光とし

白岡 岡本和男

西川昭代

まだ風の怖さを知らぬ若葉かな
遠き世の水のにはへり蓮の花

もののふの貌で列なす甲斐の蟻

夏草や刻寂寞と平家塚

しあはせを一つ預かる夏の畑
子を思ひ畑探求の夏鴉
香水や和服の似合ふ京のひと
子の部屋の灯り仄かに宵螢
夕立やパワー溢るる昼の窓

還暦やあなどるなかれ夏の風邪

意に反し小走りになる青嵐

スカートも髪も巻き上げ南風吹く

虹立ちて子の無事祈り帰路につく

束の間の虹立つ空に希望あり

薫風や行きと帰りは違ふ道

捨てられぬ麦わら帽に髪匂ふ

備蓄米提供の日の豆ごはん

風薫り墨染ころも僧二人

ながらへて目深にかぶるパナマ帽

七変化ペット忌の人慰むる

紫陽花の七種を植ゑし庭の見ゆ

紫陽花の一万株の良運よ

山滴る子育て中の鳥もをり

木々の声背に歩むや山滴る

短夜や夜咲く花の慌し

悔やまるる深酒明易の惰眠

渾身の愛の告白螢の火

無言にて去り行く人や螢の火

短夜や推理小説まだ半ば

若狭 佐野友夏

川口 新井のり子

さいたま 小駒さち子

北出久美子

青蛙雨天延期のお弁当

日直の池に放つは青蛙

弓道部白足袋袴若葉風

夏さざす野良着に咲くやこざん刺し

更衣母をにほはすナフタリン

身の内を透明にする秋の水

便箋の読める灯の夕月夜

新涼や水平線のありありと

指差して上弦の月清清し

エーゲ海秋惜しむ碧テラコッタ

銭亀逃げていま自由なる路傍

五月場所順風力士横綱に

放つ人獲る人川に銭亀を

梅雨茸や倒木の裏怪しげに

追憶にひたり供花を梅雨の入り

せがまれて母に貸したる赤団扇

龍の絵の御朱印を手に夕立かな

奉納のうみへび蚊遣火のゆらぎ

真鍮の箸置洗ふ豆ご飯

木版の表紙うつくし晶子の忌

さいたま 阿部貞代

所沢 関根千恵

さいたま 小川洋子

横浜 石井妙子

大人気無くぴかいち狙ふさくらんば

さいたま 緒方みき子

消えさうな一本道の夏野かな

ジュエリーをリファームしやう聖五月
手を繋ぎ散歩しやうか聖五月

さいたま 平野 楽

夏野濃き虫も負けじと這ひ上がる

自転車の連なる子らへ青嵐

夏木立にもらふ元氣や犬散歩

大声の昭和の駄洒落夏座敷

まだ着るかはてな山積み更衣

連山の貌を逆さに夏の湖

梅雨さ中窓の顔意氣揚がる

東京 柳父はる

風渡る麦穂の波間電車行く

伊藤美津子

雨の中噴水の水天を突く

風薫る葉擦れに混じるギターの音

水馬水面に水輪遊ぶなり

梅雨さざす所在なきまま一日過ぎ

足漕ぎのボート進まぬ木蔭かな

葛餅やしばし忘るるあれやこれ

心太むかしも今も辛子味

雨上がり葉に舞ひ降りる鳳蝶

叢に道開きたる青嵐

さいたま 榎本道代

紫陽花がシャワーを浴びて艶つぼく

東京 桐山遊童

聖五月祈る世界の平和かな

草取に古き帽子と保護めがね

新緑の泥沼に咲く妖精や

朝顔に行つてくるよと挨拶し

湯気立ちし夫婦茶碗の新茶の香

板の上水が芸する夏芝居

主役張る紫陽花小径線路沿ひ

浴衣着てうなじ汗ばむ舞扇

樹の影の水面にゆるる夏の池

東京 大島千恵

老木の青梅や算するもなく

さいたま 篠原さよ子

あぢさゐの白くはえたり朝の庭

枝道も梅雨夕焼けの里地かな

都電行く手をふるごとくバラの花

竹藪に鳴き声あまた梅雨の朝

上野駅かつては孤児や夏ひとひ

門標や紫陽花の懐深く

我が庭に揚羽蝶来て雅なり

ゆくりなく退会の報梅雨かな

円窓の青葉時雨や明月院

男梅雨天僧坊の天狗像

茶庭へと軋む枝折戸つゆ湿り

梅雨晴や瓦の紋の三鱗

梅雨の月水面見つむる観音像

短夜に前搔深き駿馬かな

戸一枚南部曲家明早し

明易や馬の尿の音長し

闇払ふ目映きフィナーレ螢の火

螢火やオンザロックの光る指

ラーメンに卯月はお酢を足してみる

カップルにつけ麺二つ夏一つ

鼻すすり麺をすすりて晚涼し

夏服や煮干スープの濃き今日も

ラーメンの締めのお冷やや夏の雨

星割れて急発進のてんと虫

天道虫母の形見の五つ紋

徹くさき宿満天の星きらめきて

枇杷をむく絹の生毛の肌ざはり

雨煙る菖蒲あざやか人の列

さいたま 小野町子

北山建治郎

吉川拓真

田口文子

さいたま 樋口元美

大阪 海老名ノルン

宮代 関谷多美子

さいたま 石黒由美子

優のつく夕張メロンざくり切る
父植ゑし揺らめく庭の濃紫陽花
紫陽花や昭和レトロの喫茶店
塩にぎり一口がぶり山滴る
木道をゆけば蒼翠山滴る

旅先のうすもの姿清らかに
はつたいに忘れし訛よみがへる
甚平やきちんと畳む父は亡し
夏帽をぼんと投ぐるや喫茶店
短夜や伝説残しミスター逝く

栗の花匂ふ故郷の駅舎かな
ふと届く友の心よ夏衣
新緑の神田川沿ひ染工房
古利根の流れ薄暑の眼鏡店
文字摺草今日県展の閉幕日

五月雨やしとどに濡るる能登瓦
五月晴海猫が後追ふたらひ舟
磯舟や父が舵とる鮑海女
畳紙古り母の形見の縞袴
木道を歩荷が二人夏霞

磨崖仏の眼差遠し山滴る

さいたま 羽島秀子

藍染の母の衣解く梅雨湿り

栗の花籐山盆地匂ひ立つ
栗の花心早くもモンブラン

紫陽花の雨に棲とる芸妓かな

生あたたかな風栗の花匂ふ
風の中連獅子のごと栗雄花

藍色の隈取りの舞ふ夏芝居

栗の花の匂ひ似てると独り言

碧空に咲き誇る薔薇ふと妬し

返還の島を見守る雲の峰

所沢 飯室夏江

行き先を悩みしままに雲の峰

行き先も告げずこつそり義母^は三社
神興見る子らにも飛ぶや水しぶき

湧水を一口貰ふ夕螢

水揚げの蛸足音階奏でけり

初螢名を呼べぬまま別れけり
集ひたる墓じまひの夜螢飛ぶ

蛸食^はめぬ齡となりぬただ眺む
重なりし絵馬の彼方に孫の顔

串刺しの甘辛団子夏夕焼

さいたま 山下ユリ子

子等の声一際はづみ夕螢

薔薇香るバスタブ満ちて我ひとり
朝日浴び紅咲き匂ふ庭のバラ

指定席の無き故郷や蔦青葉

泡の跡苦みぞ旨し黒ビール

一人さりのゆるき老後や濃あぢさゝ

喉しびれ泡立つ旨さ朝ビール

白南風やゆるき登りを乳母車

紫陽花や雨に濡れては彩を増す

乳飲み子をあやす母の目花蜜柑

鈴木藻好

ぽんぽんと微叩く店神保町

微笑みの母の生活鉄線花
手作りのパンの焦げあと麦の秋

微かなる踏切の音男梅雨

先立ちし浄土の夫や麦の秋

授業中柱の蟻を目で追ふ子

長傘を杖のかはりに梅雨曇り

身の丈に余る虫曳く黒き蟻

刈り込みし枝に若葉や生き力

さいたま 駒谷行雄

東京 深沢りこ

草加 持永喜夫

さいたま 武田重子

若 狭 森下 風湖

豆飯やほど良き母の塩加減
青梅や小糠雨降る五湖の里
潮の香を纏ふ日除や浜の家
父の日の父はいつもの畑仕事
夕立やかけ込む店の大混雑

さいたま 三森 恵子

田の水面光りて早苗あをあをと
龍神や夏草茂る里守り
滴りの音山道を進み行く
庭先の草木萎るる炎暑かな
今年も又祖母の選びし初浴衣

東 京 清水美千子

どくだみの都会侵略ちやくちやくと
幼子の赤き長ぐつ梅雨に入る
梅雨晴間青空うつす水たまり
大やかん麦茶常備の農作業
買ふまでに行きつ戻りつ鬼灯市

さいたま 播磨 進

山あひの田に白シャツの案山子居り
梅雨晴れや稲田の涯の地平線
雛連れて草に隠るる夏の鴨
更衣まだ着ぬ古希の贈り物
武蔵野の肥やしとなりぬ榎落葉

さいたま 今西 操

黒南風やビル風と化し傘叩く
黒南風や鳩の目付きの慌ただし
牛蛙闇夜に誘ふ動きあり
牛蛙茂みにオーボエ奏者かな
麦稈帽に陽の感触や手にあふれ

木谷 葉子

暗闇を増幅するや牛蛙
沼池や不穏不穏と牛蛙
黒南風の台無しにする清書かな
黒南風の仕業か気乗りせぬ宴
夏句会痛感したる語彙不足

藤 沢 小島喜代子

大胆な金魚のTシャツ街闊歩
隈取りのTシャツ寄り添ふ夏至の夕
息子が炊きしあんこと白玉おやつとす
カタログで世界を旅する梅雨の日々
ミサイルの恐怖も無しに新茶飲む

さいたま 三浦真由美

黒南風や昼呑み誘ふもつ煮込み
黒南風や今日のカレーは薬膳風
街灯の届かぬ闇や牛蛙
毎年の栖は此処ぞ牛蛙
旧友と元気に感謝夏の旅

初採りの胡瓜とげとげ痛かりし

父の日や力つけてと鰻くる

実梅とり下草刈りの美人妻

老鶯やひと日をとくに過したり

青嵐菜園の茎折りてゆく

鬼石 榊原聰子

山寺や岩壁に棟山滴る

父の茶毘追ふがごとしの虎が雨

紫陽花や訃報の知らせ二名様

紫陽花や彩なす生の父逝きし

さいたま 糸井しるく

熟女らの励む体操夏来る

短夜や難解の書繙きぬ

緑蔭や池の水まで濃く見ゆる

入口にびたり離れぬ守宮かな

和歌山 南條さわゑ

麦の秋旧姓で呼ぶクラス会

花籠の白の淑やか鉄線花

紫の花よりしづく梅雨の朝

夏近し立ち漕ぎで行く櫛道

菅原靖子

葛の餅喉が忘れぬ吉野かな

葛餅や練つて練られてつるりと

くちなしよ一際映ゆる葉のてかり

スーパ―へ一時避難の暑さかな

さいたま 小田三茅

吾子の鞠紫陽花根に眠りたり

紫陽花や押して戻りぬ乳母車

雨の中紫陽花残し引越しす

紫陽花にさよなら告ぐる駅ホーム

稲野幸子

影沼の語り部なりし牛蛙

黒南風や魚市場に魚なし

黒南風やデートの日取り決められず

新茶なり感じるままに汲めばよし

門 真宏 治

肩で息片手に胡瓜片想ひ

入道雲強がり胃痛隠す夫

いつの間にうちの子になったの庭の蟻

東京 中村まどか

作品鑑賞

山本鬼之介

産土の川面に映す夏帽子 皆川更穂

永年ふるさと入りしていなかった男であろう。子供の頃、友達と魚獲りや笹舟流しや水遊びをした小川である。付近の環境は変わっているが、川の流れは昔のままである。懐かしげに見下ろした川面には、その頃とは随分違う自分の顔が映っていた。何十年も経っているのであるから当然のことではあるが、何となく妙な感慨に囚われた。

本句の柱は、当然のこと季語の「夏帽子」である。子供の頃に被っていた夏帽子は子供用の麦稈帽であつたらう。いま川面に映っている帽子は、洒落たパナマ帽かメッシュのソフト帽であろうか。昔に還って、鰐広の麦稈帽か白地コットンの登山帽であれば、その場の雰囲気にはぴった리と思うのだが、さて、作者がどのような帽子をイメージして詠んだのか、興味の湧くところである。

蜘蛛の囀の破れ山河の風が抜く 小林京子

破れそうに見えてなかなか破れない見かけよりも強靱な蜘蛛の囀を破ったのが何であるかを、先ず読者に問いかけている。破ったものを大型の昆虫類とか鳥と想定すれば辻褄が合うが、理屈っぽくてつまらない。野山を吹き渡る大自然の風に意思があり、目障りな蜘蛛の囀を自ら破って通り抜けてゆくと解釈することで「山河」という言葉の必然性を説明できているのではなからうか。

鴨川や白鷺とある夕涼み 寺町知子

鴨川は京都市内を南北に流れる23kmの一級河川である。その上流を加茂川と言い、高野川と合流する地点からその名称が鴨川に替わる。京都市を象徴する川であると同時に、その美しい景観や河川敷が、市民や観光者の憩いの場として親しまれている。川の中に大きな飛石があり、それを伝って向う岸へ渡ることができる。

川の浅瀬に佇んでいる白鷺の近くの置石に座し、心地好い夕風に身を委ね、灯の点つた三条から四条の街景色を愉しんでいる。これから、作者もその灯火の中へ溶け込むのである。

籐寝椅子名の星探す山の宿 岡田宣子

籐製の長椅子であるから、山の湯で火照った身体を委せき

った気分は最高である。大きな硝子戸を透して夏の夜空を眺めている。天文にはそれほど詳しくないが、琴座のベガ（織女星）、鷲座のアルタイル（牽牛星）、蠍座のアンタレスなど、幾つか識っている星を探している。夜間でも明るい都会とは違い、星を観察するのに最高の環境である。温泉、料理、そして満天の星空。大満足の旅行であった。

梅雨茸恨み節でもうなりさう

菅原真理

梅雨どきの高い気温と湿度によって朽木や陰湿な場所に生える茸である。赤や黄などどぎつい色の物が多く、食用になるのは「しめじもどき」くらいで、有毒のものもある。好き好んで生えたわけでもないのに、人から嫌な目で見られるので、茸らは自棄になるのである。森の中から低く押し殺したような歌声が聞こえてくるようだ。

老鷲の森を響動もす谷渡り

反町 修

春とは違って夏鷲の鳴き方には力があり、元気づけられる。一羽ではなく、複数の鷲が奥深い森の中を木から木へ飛び交っている。「響動もす」という言葉がその様子を如実に表している。

以前サイクリングで山越えした時、きつい上りでかなりばてていた自分が夏鷲に励まされたことがあった。

妃殿下のみどり基調の植樹祭

霜多光代

「全国植樹祭」は昭和二十五年から続いており、今年は、五月二十五日に、埼玉県秩父市の「秩父ミューズパーク」で第75回の植樹祭が開催された。妃殿下の「みどり」を基調にした服装がとてもしっかりとその場に合ったものであった。この思いは、作者だけでなく、多くの人が感じたことであろう。全国各地に植樹された苗木が、年を経て大樹になるのである。

葉桜の小暗き小径染工房

阿部幸代

桜の木がある林間の奥の草木染の工房を思い描く俳句である。桜が満開の頃は明るさがあったが、葉桜になった今は雰囲気が変わり、まさに小暗き径なのである。染に用いる材料が近くで入手できるのかも知れないし、染色で発生する臭いで辺りに迷惑を掛けないようにとの配慮もあるのではないかと思う。そのような場所にある工房の様子と、出来上がった作品のオリジナル性が伝わってくる俳句である。

槍投げて白線踏んでゐる海暑

森下山菜

槍投競技でそこそこの記録が出たのであろうか。喜んだのも束の間、投擲ラインを踏んでおりその記録は無に帰した。

溽暑という実に嫌な暑さと、その時選手が抱いた感情とが合致している。このような嫌な思いを抱くことは、一般人の日常でも起こり得ることであり、他人事の俳句とは思えない。

湯上がり裸御免の缶ビール 本橋稀香

むかし銭湯での湯上がりに、裸のまま冷たい牛乳を一気に飲んで大満足した想い出があるが、掲句はそれと同様の雰囲気であり、共鳴するところ大である。自宅でのご主人の姿なのか、それとも……なのかもと思わせるところが、この俳句の面白味であろう。

夏の日や洛中洛外図に見入る 丸屋詠子

洛中洛外図は、京都の市街（洛中）と郊外（洛外）の景観や風俗を描いた屏風絵で、十六世紀初頭から江戸時代にかけて制作されたという。二点が国宝に、五点が重要文化財に指定されている。

心身共に余裕のある夏の某日、愛蔵の美術書を開き、件の屏風絵を丹念に鑑賞している。特に、描かれた時代の人々の暮らしぶりに繋がる風俗画に興味を抱いているのではないか。心がその時代にタイムスリップしているのである。

蜘蛛の巣をうわつと被る掃除かな 倉田星歩

掃除している場所は何処であろうか。蜘蛛の巣がありそう

な場所といえは、庭か物置などであろうが、予期せずに蜘蛛の巣を被ってしまったらさぞかし驚くことであろう。「うわつと」がその一瞬の驚きをリアルに表現している。

異国語の飛び交ふ朱夏の抹茶カフェ 元田亮一

古民家をリフォームした和風の喫茶店で、「抹茶カフェ」と銘打って顧客の人気を得ている店である。日本に興味を持ち、日本の食文化にかなり精通している外国人もいるそうで、気軽に茶道の雰囲気味わえる抹茶カフェに外国のお客さんが集まることに納得できる。「抹茶」を媒体に、いろいろな国の言葉が飛び交うのである。

干草に思ひ出よぎる父と牛 岡本祥子

本句の「父」は、嘗て若狭水明会の重鎮で水明の発展に貢献された島津城子（じょうし）氏のことで、壮年の頃は酪農も手掛けられ、俳句仲間から「牛の城子」と親しまれていたようだ。

生命力の最も旺盛な夏草を刈り取り、地面いっぱい広げて一日干す。夏の太陽をいっぱい吸収した干草から強い匂いが伝わってくる。その匂いが作者を子供の頃へ、そして、牛を慈しむ父の分厚い掌へ、次から次へと想い出が飛び出してくる。ちなみに、福井県若狭町の鳥羽公園に、島津城子氏の句碑「うめのはな吾生涯の友なれや 城子」が建っている。

ぬひぐるみ手繋ぎ干され五月晴

田中弘子

幼児が自分の姉妹か友達のように毎日語りかけて遊んでいる縫い包みなのか、それとも、大人が趣味で集めているものなのか。いずれにせよ、数体の縫い包みが手を繋いだ状態で燦々と降り注ぐ五月晴の陽を浴びているのである。実に微笑ましい光景である。

黒南風やぶらんこひとつゆれてをり

飯田忠男

梅雨時の陰鬱な風が吹いている。公園にあるブランコの一つが揺れている。ついさっきまで誰かが使っていたのであるうか、風による動きとは違った動きをしている。無機物であるブランコに生命体が宿っているかのような動きであったが、やがて他と同じような動きになった。

命名の墨のにほひや青嵐

石関六弦

今では命名に用いる簡便な用具セットが販売されているが、やはり昔ながらのやり方が人生の門出の儀式に相応しいように思える。新生児の名前を墨書した半紙が、緑の中を渡ってきた風に揺れている。実に爽やかで尊厳なひと時である。

レース編む家族の好きな花柄で

綿引まりこ

手編みのレースは実に涼しげで、プレゼントされたひとは

さぞかし嬉しいことであろう。それも、家族それぞれの好みの花柄を編み込むのであるから、これ以上心の籠もった贈り物はなからう。支えてくれた家族へ、作者の真心が届いたことであろう。

天窓を叩きて止まぬ梅雨の足

秋谷風舎

梅雨時の雨は実に陰鬱で、それを「梅雨の足」と表現したのが佳い。侵入者が明り取りの窓を蹴破って侵入してくるような恐怖感がある。

扇風機居間に陣どり首を振る

畑宮栄子

エアコン万能の時代であるが、昔ながらの扇風機も欠かせない。今の扇風機はいろいろな機能が付いていて、それを使いこなすのは結構面倒である。この句の扇風機は、昭和期のようなシンプルなもののように思えて親しみを覚える。居間の真ん中でブーンブーンと音を立てて首を振っているのだろうか。

籐椅子や母の形に艶残る

杉浦千祐

母が永年使っていた籐椅子が、今でも大切に保存されている。経年によって籐が生み出した色艶はまさに宝物である。その艶を指でなぞってゆくと、ありありと其処に母の存在を感じるのである。

水 琴 窟

(水明集七月号鑑賞)

池田雅夫

がき大将青大将をぶん回す

松村笑風

いたずらっ子ばかりではないが、子供同士の中では「がき大将」と呼ばれる者がいて何をするにも中心となり行動していた。幼い子はそのながき大将にあこがれ、まねをして離れなかった。「青大将」を捕まえて大胆に「ぶん回す」がき大将。今ではこんな頼もしいがき大将を見かけなくなった。

動き出すからくり時計のどけしや

木村小麦

「はと時計」も「からくり時計」の一つであろう。時報のためにさまざまな工夫、仕掛けを凝らしたからくり時計。その仕掛けを推理することも楽しみなのだ。音にも複雑な仕掛けが施されていて、ほのぼのとした音楽が流れるのである。「のどけしや」の詠嘆を「のどかなり」と断定してみたい。

春駒や草食む背にそつと触る

石井直子

「春駒」は「若駒」といい、その春に生まれた馬で「駒」自体が「馬の子」を示す。語感の上でそれぞれのちがいを使い分けている。少しやんちゃに成長した春駒が人間にも馴れ、柵の近くで草を食んでいる。その背中にそつと触れてみた。

占ひは「好き」から始めマーガレット

関根千恵

ビリーバンバンは『デイジーの花散らすの…』と歌い、また、アグネス・チャンは『ひなげしの花で占うの…』と歌っている。「好き」「きらい」と、花びら一枚づつ散らしてゆき、残った最後の一枚がどちらであるかと占うのである。純朴な社会性が心に沁みた昭和の時代。忘れてはならない。

新社員他人より早く恥をかけ

川島夕峰

いよいよ職に就き、社会人としての将来の抱負を語る。誇りや自尊心、見栄もある。多くの失敗、過ちを重ねながら成長してゆくのだ。思いどおりにはゆかないもの。その場しのぎの言い訳や嘘は決してためにはならない。さて、「恥をかけ」と諭しているが、「恥をかき」にして体験しよう。

差し入るる鋤簾に明くる蜆採

石黒由美子

内海、河川、湖沼などで採れ、味噌汁にするなど、庶民的な「蜆」。「鋤簾」という道具で搔き寄せて採る。朝餉に間に合わせようと、夜明け前から採り始めたのだろう。それで「明くる」につながる。まず泥抜きをしてからしよう。

春眠に合はせ鈍行列車揺る

飯室夏江

郊外の「鈍行列車」に揺られ、春の眠りに陥ったのだ。窓の暖かい日射しとほどよい揺れがゆりかごのように感じられる。実際には列車の揺れに合わせての春眠なのであろうが、敢えて「春眠に合はせ」としたところに詩情を感じる。

二つ目は餡の講釈桜餅

鈴木藻好

「二つ目」の「講釈」は「餡」だと云っている。では、一つ目は？と尋ねたくなる。おそらく「桜餅」の葉、つまり桜の葉の塩加減であろう。葉ごと食する人と葉を残す人の二通りである。餡と葉の塩味が絶妙と講釈したにちがいない。

姉いもと机並べて春の窓

関谷多美子

小学生の「姉いもと」。それも一年生になったばかりの妹であろう。姉のやることをまねて、学習してゆく。妹には頼もしい姉である。かいがいしく妹の面倒をみている。仲の良い姉妹と「春の窓」の明るく暖かい印象に心が和む。

母の味たどりたどりつ草の餅

加藤みち

「母の味たどりたどりつ」に母への恋慕の念が集約されている。「たどりたどりつ」のくり返しが、あれこれと試行錯誤をくり返す様子を表している。蓬の香りに納得できた。

とことこと小さき歩幅よ春行けり

柳父はる

「小さき歩幅」と「春行けり」連係し心地よさをもしている。「とことこと」には、行く春を惜しむ思いが込められている。中七の、七音を保つ工夫がみられる。しかし、「小（ちい）さき歩幅」として「よ」を省くことをすすめる。

吉野山空に溶け込む花霞

伊藤美津子

桜の名所で名高い「吉野山の千本桜」。一目千本とも云われる。上千本、下千本、奥千本と、広範囲に及ぶ。桜のころは雨が多い。「空に溶け込む」ように山全体を包み込む「花霞」である。上五と下五を入れ替えてみてはいかがか。

轉りを聴きて洗濯日和かな

樋口元美

のどかで春らしい一日。小鳥たちの「轉りを聴きて」うきうきと「洗濯」をしている。そよ吹く風に春の日射し。小鳥でなくても鼻歌の一つも出るといふもの。次から次へと洗濯機を回し、まさに「洗濯日和」としたのである。

川岸に光り輝く猫柳

榎本道代

水辺に生える柳の一種の「猫柳」。銀色の花穂は猫の毛、尻尾のようである。「光り輝く」を「光りを放ち」などとしてその状況をあれこれとあてはめてみるのも大事である。

大村節代 選

鼓
笛
集

夕立中駆け込む軒で無沙汰詫ぶ

倉田星歩

前景にタワマン並べ夏の山

絶佳なり掲ぐジョッキにビール酌む

風鈴やすこし時間の止まる午後

石関六弦

風鈴や雲湧く午後在庫本

五分刈りにねちり鉢巻夏氷

麦秋や立ちつばなしの万国博

皆川更穂

外つ国の緑の薫るパピリオン

屹立の大屋根リング御祭風

マスカットランプに宿る涼しさを

やや暑し伯爵邸のナポリタン

レトロカフェリキュールボトル灯涼し

やはらかに慰霊碑照らす大夕焼

龍神が風に乗ってくる山開き

清らなる蓮の花咲く大社かな

トンネルを抜けて眩しき麦の秋

青葉繁るる国盗りの天守閣

白玉や少し剩りし旅の刻

明易し馬の尿音の永きこと

短夜に前搔深き農馬かな

戸一枚南部曲家明早し

早苗饗や田の神祀る農夫婦

素戔鳴に由来あるやう荒神輿

さみだれや軒より落つる妙の音

緑蔭の舞台を締むる佐渡おけさ

立浪の揃ひの浴衣佐渡遠し

鳳蝶ときをり人家を覗きけり

吉川拓真

丸屋詠子

本橋稀香

北山建治郎

香田裕誌

川島夕峰

風に靡く百の風鈴より一個

一筋に画家のテーマは鳥瓜

夏野菜日を選ばずにぐんぐんと

夏草や絨毯^{じゅうたん}めきてまばゆけり

風鈴や風と語らひ楽しげに

からすうりおつかれさまと花ひらき

甲虫童子に返る四十かな

濃緑の奥の闇から黒揚羽

車中席足をハの字に昼寝の子

念願のトマト小さき実をつける

疲れ顔正気満ち来る冷し麵

夏休み恩師と会へし留学生

七夕の雨に願ひし恋心

夕立に心洗はれ傘も捨て

あご出汁香る素麵に茗荷添へ

糸井しるく

大島千恵

篠原さよ子

南條きわゑ

持永喜夫

鼓笛集作品評

大村 節 代

前景にタワマン並べ夏の山

倉田 星 歩

タワーマンションとは、二十階以上、高さが六十メートルを超える超高層マンションと定義づけられているが、法的定義はないという。

富士山が、見える見えないと競った事例を思い出すが、あちらこちらに、掲句のような景が数多出現すると思うが、これも現代人の暮しの究極の姿なのであるうか。子供達には、見なれた景になるのであろう。

五分刈りにねぎり鉢巻夏氷

石関 六 弦

家庭用の氷かきで、夏休みの子供達に懸命に削っているお父さんかと一瞬思った。しかし、上五中七から、これは、氷室等から天然氷を仕入れて、商っている粋な？ 本職である。猛暑で連日満員。やれやれお疲れ様。

屹立の大屋根リング御祭風

皆川 更 穂

五年に一度のペースで開催される万国博覧会にちなんだ三句であらう。

万博というと、一九七〇年に開催された日本万国博覧会の岡本太郎デザインの「太陽の塔」を思い出す。今回のシンボルは掲句の「大屋根リング」である。世界最大の木造建築物として、ギネス世界記録に認定されたという。下語の「御祭風」で見事に伝わる。

鼓笛集巻頭（八月号）

私の好きな一句（自句自解）

皆川更穂

満月や決して見せぬ裏の貌

月は地球を回る公転時間と、自身が一回転する自転時間が等しいので、地球から見ると常に同じ面を向いています。これは月の軌道が完全な円からずれていることと、引力による月の変形が原因とされています。原理は複雑ですが結果として人類は最近まで月の裏側を想像するしかなかったわけです。こんなところにも自然の神秘が感じられます。

水明通信

和歌山 南條さわゑ

毎日暑い日が続いています。

水明発行所様、編集部「鼓笛集」様。御苦勞様です。

どうぞお体に気をつけてお過ごし下さいませ。

和歌山も今外の温度見ましたら36℃もあります。うだるような暑さです。早く涼しくなっしてほしい今日の頃です。

皆様の御健康をお祈りしています。

最近の名句集を探る

山内節子『氣息』
石田郷子『万の枝』
高山れおな『百題稽古』

●巻頭三句

今瀬剛一／和田華凜
野口る理／関森勝夫
すずき巴里／吉岡乱水

●今月の華

栗林明弘＋須川久

●俳句と短歌の10作競詠

若林哲哉＋久永草太

●俳句の私選

攝津幸彦／佐藤りえ

●師と弟子、弟子と師

恩田侑布子／古田秀

●四季吟詠選者競詠新作10句

鳥居真里子／佐怒賀直美

鈴木しげを／村上朝彦

●新連載 俳句のレトリック
橋本喜夫

片山由美子

特別作品40句

筑紫磐井 司会
大西朋
後藤章
野崎海子

●好評連載

成瀬政博

筑紫磐井

坂口昌弘

忘れ得ぬ俳人＋秀句

青木亮人

句の手触り、
俳人の響き

大西朋

俳句へのまなざし

井上泰至

俳句の詩語

イメージ辞典

藤村公洋

俳句のつづみ

神作研一

てのひらの江戸
／古典籍を旅する

堀田季何

諸家書架

石井隆司

たもとほる

俳句よもやま話

二ノ宮一雄

俳句四季
Haiku Shiki

2025年10月号

9月20日発売
定価1100円（税込）

<https://www.tokyoshiki.co.jp/> 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

句集喝采

菅原卓郎

◆小川竜胆「人は木に」

東京四季出版

著者略歴 一九五四年東京生まれ。二〇一六年「雅楽谷」入会、中田水光に師事。二〇一七年「雅楽谷」同人。俳人協会会員。横浜俳話会会員。

古希を迎えた作者の第一句集。まだ見ぬ世界へ新たに踏み出す一步の起点とする句集上梓である。

凋落や生き存へて蜷汁

夏山に欠伸うつすや神の留守

寒月に見透かされたる野心かな

第二句、神無月になれば山祇も出雲の国へ旅立ち暫くの間は神様の御守も無く閑居な日々が続く。山が欠伸をすれば又別な山も欠伸をする。年に一度の骨休め。第四句、非常に冷めた視点の一句。野心までも見透かす覚めた月の光が、澄み切った空間の寒さを強調している。

スピーチを訳す手話の手夏木立

少年のもてる矢りや青林檎

生涯を小体に暮らさうな春の闇

第二句、少年と青林檎の取り合わせに得心。平凡ではあるが少年の反抗心、青臭さはやはり青い林檎がよく似合う。甘酸っぱい思い出がベースの一句。第三句、茗荷の花はあまり目立つことはなくひそやかに咲いている。慎ましい人生を送らんとする作者の考えが垣間見える。茗荷は子供の頃は苦手であったが、長ずるに好物の一つになった。酒の肴にはこの時期欠かせない。

◆高橋将夫「命と心」

文学の森

著者略歴 昭和二十年福井県生まれ。平成四年岡井省二に師事、「槐」入会。平成七年「槐」同人。平成十一年槐賞受賞。平成十三年「槐」主宰を継承。平成三十年文学の森賞準大賞受賞。現代俳句協会理事、関西現代俳句協会副会長、俳人協会会員。

本句集は作者第七句集で平成二十九年より令和元年までの作品を収録。簡明、深さと広がり、新鮮さ、オリジナリティ、作者ならではの視点、に留意している。

手を貸せぬことの二つに猫の恋

親の夢つつまれてゐる棕かな

祖先の血祭太鼓が呼び覚ます

空間と時間しかない夏座敷
第一句、発情期の猫は性格、肉体共普段とは異なる。恋人を求め夜の町を彷徨うが、徒労に終わる事もあるだろう。こればかりは手助けは出来ない。第三句、迎え太鼓に始まる夏祭り。日本の誇れる伝統行事で、太鼓に始まり太鼓で締める。受け継がれた血筋が太鼓で騒ぎだすのである。

山肌の傷月光が舐めてをり

人間にあつて案山子に無き余生

なまはげの後ろ姿の淋しさよ

天網も春の塵まで掬へない
第二句、季語の案山子の傍題に捨案山子があるが、役目を終えれば忽ち捨てられる。余生など微塵も無いのである。与えられた余生、大切に生きよう。第四句、疎にして漏らさない天網も、関八州に吹き荒れる春風の塵までは掬えない。天道にも多少なり遊びが有るのである。

網野月を選

山紫集

卒寿まで生きて茅の輪をくぐりけり

井上玲子

行き過ぎし人の名残りや茅の輪立つ

野口和子

きな臭い世間抜け出す茅の輪かな

青木鶴城

茅の輪くぐり新しき人生まれけり

小駒さち子

夫婦連れ茅の輪くぐれば手を繋ぐ

南條きわゑ

朝参り茅の輪の先の静けさや

持永喜夫

異次元の入り口たりて茅の輪揺れ

山中いちい

茅の輪くぐる無神論者であるけれど

綿引まりこ

柔らかき手を引きくぐる御祓かな

田中章嘉

茅の輪くぐり幼児もママと八の字に

上戸千津子

酒樽の並び待ちたる茅の輪かな

秋谷風舎

煩惱や八十路の友と夏祓

新暦文

「馬つこ」を追うて陸奥大茅の輪

阿部幸代

菅貫やすでに厄年なき齡

荒井俱子

隙間なく流る形代しづかなり

新井のり子

茅の輪潜るふつと悪寒が――

飯田忠男

雨すうて山の香放つ茅の輪かな

池田珪子

——以上特選

子の首に懸けし茅の輪の歪かな

池田雅夫

手を繋ぎ茅の輪潜りのダンスかな

北山建治郎

あをき香を放つ茅の輪をくぐりけり

石川理恵

形代を共に流せし母はもう

熊倉千重子

背の順に八の字描く茅の輪かな

石関六弦

息を詰めくぐる茅の輪の母子かな

倉田星歩

富士の山仰ぐ一族茅の輪かな

石田慶子

茅の輪潜りや彼の邦も彼の邦も

河野はるみ

今年もまた邪気を払ひに茅の輪入る

糸井しるく

若夫婦ペットを抱き茅の輪かな

小林京子

跳び潜る茅の輪背中にランドセル

内田恵子

茅の輪をくぐるビルの谷間の天神

近藤徹平

女形代に新しき名の加はりて

梅澤輝翠

愛犬と茅の輪くぐりて一番星

榊原聰子

あをあをと古里香る茅の輪かな

梅澤佐江

神社より茅の輪くぐりに招かれて

佐々木史女

形代や言ひつ放しを聞き流し

遠藤人美

ビル街の茅の輪潜りにサラリーマン

笹本啓子

青々と日本がにほひたつ茅の輪

大場順子

還暦の子に手を引かれ名越かな

清水桂子

旅の途の津軽の茅の輪くぐりけり

岡田宣子

良き事のつづき茅の輪に頼りけり

篠崎紀子

厄介者茅の輪になりて崇められ

川島夕峰

やをらに氏子の持て成し村夏越

篠原さよ子

義母つれて古里能登の夏祇

渋谷きいち

雨催ひ泣く児すかして茅の輪かな

高橋満耶子

御祇終へ心身清く川遊び

嶋田洋子

カップルの跨ぐ茅の輪に願ひ事

武田重子

神宮の杳音ひびく夏祇

下川光子

鈴の音に緋袴揺るる茅の輪かな

寺町知子

青き香の茅の輪をくぐる親子連

霜多光代

出向かふや茅の輪の先の上田城

飛永 鼓

御明かしに迷ふ茅の輪の潜り順

菅原卓郎

茅の輪経て気の引き締まる一の宮

西幅公子

形代に託す願ひや波にゆれ

菅原真理

茅の輪あり吾子の手繋ぎくぐる朝

野村美子

堰つくる形代願ひ渋滞中

杉浦千祐

左より茅の輪くぐりて一安心

畑宮栄子

茅の輪くぐりて半年分の身軽さよ

鈴木玲子

かぐはしき茅の輪の筋に沸く血潮

原田自然

茅の輪潜り鎌倉の海見霽かし

関谷多美子

祢宜まねて左足より入る茅の輪かな

原田秀子

潜れども消えぬ穢や茅輪くぐり

瀬戸雄二郎

茅の香に吸ひ込まれゆく茅の輪かな

樋口元美

大厄の如く茅の輪を潜りたり

染谷風子

薄闇に人目を忍ぶ茅の輪かな

日高道を

東雲の茅の輪くぐれば安らぎぬ

反町 修

息災を互ひに願ふ茅の輪かな

檜鼻ことは

作法知らず無心に茅の輪潜りたり

福田 千春

群雀茅の輪くぐりて花手水

森下山菜

幾たびも茅の輪くぐりを外人が

保坂 翔太

茅の輪をくぐりしばらく希望手の中に

森下美智枝

句碑拝し茅の輪をくぐる調宮

曲淵 徹雄

祈りこめ茅の輪をくぐり安堵せり

山岸久美子

移住地の茅の輪くぐりの賑やかに

正木 萬蝶

同窓会輪後の祓にいざ出陣

山下ユリ子

息災や御礼参りを待つ茅の輪

松宮 保人

夫の足目で追ひくぐる茅の輪かな

山戸 美子

譲り合ひ茅の輪をくぐる大社かな

丸屋 詠子

産衣の子大事に抱へ茅の輪かな

湯浅 和

潮の香の茅の輪を潜る波除社

丸山 マスミ

ネクタイを正しくぐる茅の輪かな

横山 君夫

半歳の無限を辿る茅の輪かな

皆川 更穂

老猫を抱きてくぐる夜の茅の輪

横山 礼子

二人の門出祝ふ身内も茅の輪かな

宮崎 チアキ

幾周も潜りたく児は茅の輪見る

吉川 拓真

意を決し茅の輪素通りする日かな

元田 亮一

通りやんせ茅の輪くぐるに傘とちて

本橋 稀香

青き香を纏ひてくぐる茅の輪かな

森 和子

山紫集作品評

網野月を

卒寿まで生きて茅の輪をくぐりけり

井上玲子

上五に「卒寿まで」とあるので、作者ご自身のことと解釈したが、別の解釈も成り立つであろう。自分以外の事柄を回想しているのかも知れないということである。つまり、座五を「……けり」にしたことで、第三者の誰かのこととしても解釈が成立することになった。掲句の場合は、そうしたところに句の奥行きが出来たものであろう。

「茅の輪」はやはり「くぐる」ものであるが、「まわる」「めぐる」の表現も各歳時記の例句には掲出されている。「茅の輪」の景だけではなく、「くぐる」にしても「まわる」にしても、祓の儀式に所作が加えられることで人間の祈念する心が鮮明に描かれることになる。

行き過ぎし人の名残りや茅の輪立つ

野口和子

「行き過ぎし人」とは今年の名越の祓で「茅の輪」くぐりをした人のことであろうか。それとも作者が人生において出

会った人たちのことなのか、「行き過ぎ」過ぎし人のことであろうか。単なる語釈に過ぎないが、「行き過ぎし人」は出しゃばり者と解釈することも出来る。が掲句の場合はやはり作者の視界に捉えられた参詣の人たちと解釈するのが順当のように考える。

この句の肝は「人の名残り」である。「名残り」は、目に焼き付いた印象とも解釈できるし、心に残る印象とも解釈できる。「茅の輪」の季語の作例には茅萱の匂いに結びついたものも散見されるところから、匂いの印象とも解釈できる。視覚的印象をプラスした「名残り」と筆者は解釈したい。

きな臭い世間抜け出す茅の輪かな

青木鶴城

反戦の句であり、また平和祈願の句と解釈した。昨今の人の世の何と「きな臭い」ことであろうか。「きな臭い」を超えてしまっている国々や地域も何か所もあるのが現実であろう。通常は「茅の輪」は「くぐる」か「まわる」のであるが、掲句では「抜け出す」とある。この斬新さが一際目立つところであるとともに、穢れを浄めるのではなく、より積極的に現状から「抜け出す」と言い放っているのである。「茅の輪」へ込める平和祈念の心情が横溢している句なのである。

茅の輪くぐり新しき人生まれけり

小駒さち子

作者ご本人のことなのか、誰か身近な人のことなのか。身の浄められた心持ちを「新しき人生」と詠んでいる。そうし

た清新な心持になりたくて衆生は「茅の輪」をくぐるのである。

夫婦連れ茅の輪くぐれば手を繋ぐ

南條きわゑ

「茅の輪くぐり」を終えた後で「手を繋ぎ」いだ「夫婦」がいたということである。その二人に尋ねたわけではないと思われるが、見るからに「夫婦連れ」であって、少なくとも作者からは「夫婦連れ」と見えたのである。仲良く「茅の輪くぐり」した「夫婦連れ」に心温まる思いをした作者なのである。

朝参り茅の輪の先の静けさや

持永喜夫

真夏の早朝に「朝参り」して「茅の輪」くぐりをした作者は「茅の輪の先」に「静けさ」を見出したというのである。「先」というのは「茅の輪」に対しての空間的表現とも解釈できるのだが、これから「先」の時間的表現の中で心の在り様ということではないかと、筆者は思っている。

異次元の入り口たりて茅の輪揺れ

山中いちい

「茅の輪」の向こう側にみえる景色が「異次元」ではないか、というのである。ただ「茅の輪揺れ」であり、なかなか不気味な風情を醸し出している。この「揺れ」は「茅の輪」自体ではなくて、円形の中が陽炎のようになってクリアには見えないのだが、次に繋がっている、と筆者は想像してみた。「茅の輪」くぐりをして、「異次元」＝心晴れやかな気分にな

れたと解釈するのがポジティブな解釈ではなからうか。

茅の輪くぐる無神論者であるけれど

綿引まりこ

「無神論者」が句の肝である。作者は「無神論者」であるのだが、敬虔な気持ちになっていて、祈りの心を持っているということを描出している。そもそも「茅の輪」くぐりは宗教行事の中でどのような宗教に属しているのであろうか。日本の神道に属することかもしれないが、宮中行事にもなっている。特定の宗教に帰依していかなくても穢れを祓う「茅の輪くぐり」は、ある意味での心の広さを物語っている。

柔らかき手を引きくぐる御祓かな

田中章嘉

上五の「柔らかき手」は何を意味しているのであろうか。ご婦人の手とも解釈できるのだが、作者の謹厳な性格を思うとき、ご婦人の手ではないだろうと思いつた。ということとはこれは幼子の手ではないか、という解釈である。余談であるが、「御祓」を季語「茅の輪」の傍題としている歳時記も散見される。

茅の輪くぐり幼児もママと八の字に

上戸千津子

ほほえましい景である。母親のわが子に対する丁寧な心遣いも垣間見える。「八の字」の観察眼も素晴らしい。季語「茅の輪」を日常の事々として把握している作者がいる。

水明例会

第一例会（浦和）

茂木和子
小林京子 報

蝸牛渦に巻き込む草の色

マシミ

「無事消光」てふ一筆届く梅雨の明^{あけ}

マシミ

葉裏より世を逆さまに蝸牛

千祐

蝸牛籠の四辺を計りをり

稀香

真偽不明の縄文土器に蝸牛

節代

炎昼や行方指示待つ消防車

微平

この世からしばらく消えむと昼寝かな

京子

取り消しの効かぬチケット祇園祭

喜恵

雨上がり渦生き生きと蝸牛

順子

消費期限速くも過ぎぬ梅雨最中

はるみ

河鹿鳴く瀬音の消ゆる闇の中

京子

かたつむり稜線煙る浅間山

亮一

で虫見て後退りする狩猟犬

マシミ

蝸牛渦巻く部屋に閉ち籠もる

稀香

第二例会（東京）

山中みどり
青木鶴城 報

かたつむり這ふや古刹の常夜灯

卓郎

蝸牛葉陰に入りて歩をゆるめ

由紀子

蝸牛庭にもとどく大リーグ

微平

人も待つ恵みの雨や蝸牛

和葉

泣き虫の筆箱に棲むかたつむり

延昭

草野球の三塁を踏む蝸牛

節代

蝸牛光残して進み行く

チアキ

安き米求め消費者走る夏

千祐

父の生家今も草生ふ蝸牛

和子

月見草母追ひかけし幼き日

慶子

月見草盛り塩の横灯のともる

々

人すまぬ海辺の家に月見草

亜弥子

砂浜に残るサンダル土用波

々

嗚呼此処を離れる時が夏に入る

士史

待ち人の「ごめん」のメール月見草

千春

足先を猫の甘噛み土用かな

うらやまし土用丑の日風下の家

浸し置く土用蛭に砂のやや

砂浜へ近道一群の月見草

きぬぎぬの淡き頬紅月見草

竹の花枯れ電は隕石のごと

北斎の波に戦く土用波

友の急逝夕べの笑顔月見草

月見草萎んでしまふ月を待つ

茹だる日々土用鰻を贅沢す

土用の日商店街にうなぎの香

サウナ好き友と整ふ土用かな

月見草誘ひ誘はれ夜の海

門火焚く今日の煙の煙からず

ひつそりと路傍に開く月見草

土用干夫の形見の登山靴

鍼灸に勝る土用の鰻かな



いちい

恵美子

竺仙

みどり

鶴城

以上特選

妙子

峰雄

敏江

士史

千春

亜弥子

慶子

いちい

竺仙

恵美子

みどり

鶴城

第三例会（東京）

五明昇報
曲淵徹雄

蚊を目掛けパクンと空を食む犬や
闇の棲む壁穴住居蚊の声す
其其に蚊遣を焚いて夫と妻
藪蚊打つ御手は持たず野の仏
果し状も持たず蚊の来る下り松
神田つ子の氣風が透くる葭簾

星歩
康世
理恵
順子

——以上特選——

蚊は見事くノ一のごと寝首指す
贗作の柿右衛門置く涼しさよ
長き脚持て余す蚊の迷走す
蚊の声に思はず打つや空の空
打たで追ふ宗祇の墓の藪蚊かな
蚊柱を吹くや広がるスキヤンダル
徴といふ字に点点と徴の生ふ
体操の媼の腕を吸ふ藪蚊
名利の由緒止しき蚊に喰はれ

千祐
順子
雅夫
星歩
康世
萬蝶
理恵
徹雄
昇

第四例会（浦和）

石井喜恵報
反町修

夏帽子耳より大きイヤリング
この果てにふるさとの山大夏野
練習のドラム炸裂夏野原
青空を雲の百態大夏野

翔太
由紀子
修
マスミ

穂高よさらば夏帽を振る河童橋

昇

稜線へ青野を分けて白き道
夏帽子鳩居堂から資生堂

行雄
曆文

ワンゲルの男女一団いく夏野
リユックサツクに笑顔いつばい夏野ゆく
駆け回る子らのたてがみ大夏野
弾痕の爪跡観光の夏野
風に飛ぶ夏帽ふるさと遠くなり
マドンナの紅唇覗く夏帽子

——以上特選——
延昭
光子
曆文
惠子
修

鐙広のどこに置こうか夏帽子
眼の光る獣のよぎる夕夏野
ジャングルジムに一番乗りの夏帽子
青野から風引きつれて雨来たる
色褪せし男まさりの夏帽子

由紀子
翔太
マスミ
行雄
喜恵

第五例会（浦和）

梅澤佐江報
河野はるみ

赤旗を振り炎昼の道普請
風紋を消して去りゆく青蜥蜴
物言はぬ尾のなき蜥蜴ビルの影
尾を残し足取り軽く青蜥蜴の子
裏木戸に今日も居据る青蜥蜴
名利の礎石を守るや瑠璃蜥蜴
放心の吾を一瞥青蜥蜴

宣子
はるみ
知子
義子
佐江
——以上特選——

炎昼や血圧計と塩加減

千祐

炎昼の軒ひつそりと閉ざしをり
ビル影を透かして笑ふ蜥蜴かな
炎昼の灼かるる砂に揺るる海
飛石の蜥蜴添水の跳ねに逃げ
炎昼や赤児むづかる電車内
せせらぎに耳聴くなる炎昼

義子
夏野
知子
宣子
はるみ
佐江

若松例会（京橋）

正木萬蝶報
石田慶子

大夕焼ゆるぎなく燃え音の無し
玉響の命惜しめよ蟬の殻
夕焼けを追ひ越すやうにバス急ぐ
石庭の海を充たして大夕焼
夕焼の最後を見取るスカイツリー
ほどよく田舎武蔵野線の大夕焼
独りには海の夕焼辛すぎる
朝焼は母よ夕焼は父の色

京子
星歩
マスミ
はるみ
千祐
鶴城
萬蝶

部活後のだらだら歩き夕焼空
海原に金の航跡大夕焼
夕焼空塔も鳥も影絵かな
玉臺の揺るる観音夕立晴
夕焼に染み吸込まれゆく鳥の群れ
ビー玉を置けば転がる夏の宿
動かない目玉風船油照

——以上特選——
稀香
佐江
京子
マスミ
はるみ
ひろこ
鶴城

背に竹刀剣士行く夕焼空
やはらかに慰霊碑照らす夕焼
石玉垣に祖父の名のあり宵祭
夕焼に誉められ子らの紅き顔
夕焼けて家路誘ふ唱歌鳴る
半玉のすでに艶めく薄衣

慶子
詠子
千春
千祐
星歩
萬蝶

関西例会（大阪）

森本早苗報

でで虫もどこか品よし京の寺
テーマソング聴かせてでで虫眺めをり
少年兵の魂かも知れぬ初螢
富士山に新たな関所雲の峰
大輪の白蓮咲かす古き甕
居酒屋で最初に頼む冷奴
蝸牛軽業師なみ梯子のり
風知草短冊もるる師のお声
でで虫の競はぬ歩み学ばねば
丸き背に鳴海絞りの浴衣かな
吾は葱夫は紫蘇のせ冷奴
子燕の低空飛行隠し技
地平線ははるかに彼方蝸牛
地球鉄道旅をしるの蝸牛
白浜のパンダ返還あいの風
清流に螢飛びかふ我が古里
友よりの挽ぎたて梅や大忙し

洋子
和子
満耶子
道子
ノルン
千津子
早苗
以上特選
洋子
人美
ノルン
千津子
道子
千世子
満耶子
さわゑ
千枝子

砂に書く熱き一字へ夏の波
フランスは遠し乗り出す蝸牛
男の子制し日焼一位に小躍りす

嶋田洋子
和子
早苗

昔話あれこれ 50

太政大臣伊尹・謙徳公

師輔の長男である。安和3年(970)右大臣。天禄2年(971)太政大臣。天禄3年(972)四十九歳で薨去。太政大臣にまで昇り、容貌、学識大變優れていたが、寿命には恵まれなかった。和歌に巧みで、天曆2年(948)の春日神社の祭礼に、当時佐少将であった彼が派遣された帰りがけに女に贈った歌。

暮れば疾く行きて語らむ逢ふ事は
とをちの里の住み憂かりしも

(大意、日が暮れたらあなたの所に行ってお話ししましょう。逢う事の遠いという名を持った大和国十市の里の住み辛かったことも)
等の歌を人々は思い出して、早世を惜し

むのであった。

花を折りし君達、前少将・後少将

謙徳公の君達の中に、前少将・後少将(母は代明親王の娘恵子女王)と言って、花を折りし(美しい容貌を競い合った)君達がいたが、謙徳公の薨去の後、三年ほど経た天延2年(974)、天然痘が流行した時に罹患して、前少将は朝、後少将は夕方亡くなったのであった。母北の方の悲しみは如何ばかりであつたろうか。後少将の名は義孝。容貌も素敵であつたが、仏道信仰心の篤い人であつた。

余命が幾ばくも無い事を察した義孝は、母に「私が死にましても作法通り死人扱いをなさいませんように。もう少し法華経を誦し申し上げたいという本願がございますから、きつとこの世に戻って参りましょう。」と言って法華経の方便品を唱えながら亡くなった。母は悲嘆のあまり、何も分からなくなり、お側の人が使者の作法通り葬儀をしたので、生き返る事が出来なくなつてしまつたのであつた。

(つづく)

各地句会



水明澤つくし句会 (大阪)

夏風揺れるトカラや予言の日
花莫座や男やもめの積みし本
幼児の化粧のやうな天瓜粉
終活の思ひ交交墓参る

若鮎句会 (浦和)

十葉のはなびらほどの恋心
向日葵と佇む吾の影のびて
向日葵の花びらむしる反抗期
権瑞の同心球を出る溽暑
帰宅せし父との時間夕端居
蜘蛛の巣を払ひし心鬼と化す
向日葵や頭を垂れてバトン継ぐ
屋根破りして心おきな昼寝かな
夕はしる虚子全集を凡^{わん}
向日葵に恋するソフィア伊太利にて

智恵子 人美 ノルン 洋子
ひとみ 香音子 秀子 山菜 芳春 貴 真 稀香 月を 喜夫

コクンシテイカルチャー俳句教室 (さいたま新都心)

夕焼雲むかしぼた山ありし町
船繋ぐ九頭竜河口大夕焼
おかへりとカレーの匂ひ網戸越し
部活の子大夕焼を使ひ切る
峡の宿屋爛々と網戸越し
蛸蛸の子逃げる構へで現はるる
国引きの湖に溶けゆく大夕焼

さざきサークル (浦和)

巴里羅馬想ひ遥かに夕端居
夕端居黒髪を梳く阿六櫛
潮騒に三線の音夕端居
端居せり在家の尼僧茶筌置き
山滴る行の岩場に鉄梯子
山滴る石の積まるる遭難碑
山滴る鳥も獣も子育て中
山滴る牧の牛乳濃く旨し

青葉の会 (浦和)

箱入り娘扱ふやうにメロン来る
「不言実行」夏の忌日に夫思ふ
実家の壁に守宮棲みつ張りつきぬ
充実す日本橋から船遊山
藍のれん実に旨いぞ老舗の鰻

延昭 由美子 早都子 俱子 健司 洋子 昇
由美子 昇 健司 俱子 光子 啓子 和子 桂子 美紗子 真理 美智枝 美子

メロン切る今日は私の誕生日
バレーボール鍛錬実る夏タベ
街路樹になぞの実たわ梅雨晴間
宅配人に抱かれメロンは香を放つ
あゆみの会 (浦和)

湯上りの火照り冷ませし夕端居
「まついいか」で終る一日や夕端居
山の端の暮色に溶けし夕端居
夕端居風を肴にもう一杯
切り紙の干支と並びし水中花
水中花外科病棟は午後八時
櫻蔭句会 (浦和)

夏一日調布の里の深大寺
夕焼空「海」の調べが風に乘る
山車発つや祭囃子の本調子
乙女らの調べ清らに夏の尾瀬
青い目が諸ふ笑顔握り鮎
青嵐調神杜ごとひと飲み
鮎は出前自宅介護の誕生日
調神杜石兎の水輪涼しげに
鮎鮎を旨しといへる歳となり
絶品は友の郷里のへしこ鮎
甘辛きかんべう母の五目鮎

啓子 公子 洋子 輝子
啓子 俱子 靖子 重子 藻好
千恵 美智枝 由紀子 多美子 公子 真理 美子 茂子 行雄 久美子 幸代

野 菊 の 会 (与野)

遠眼鏡大地のゆらぐ青田波
手火花に父が手をかす背後より
あの雲はもくもく増ゆるところてん
一人居のひとみつむる水中花
遠景に水車のまはる夏帽子
麦秋や鞆の手擦れ愛ほしむ

鶴川山百合句会 (鶴川)

踊子も食べたか天城の心太
心太突いて己の性も突く
甘味屋の引き戸磨かれ心太
せせらぎと一緒に食す心太
ひと突きの団塊世代ところでん
心太七月五日のうそまこと
都議選の当選落選ところでん
いつか又ねと話し弾んで心太
聞きたきは本当のこと心太
もやもやも「そうね」で済ます心太

若 狭 水 明 会 (若狭)

一滴の香水にある面映ゆさ
香水の女三人町議會
香水の新婦微笑む披露宴
香水の仄かな香り通夜の席

美代子 和子 清子 倭子 恵子 光子
雄二郎 史代 広子 由美子 千春 萬蝶 美千子 うさぎ まじか 玲子
鼓 和風 昭代 ことは

香水や石工の孫は三姉妹
香水や生涯一度のプロポーズ
香水や亡母の古き鏡立て
スカートを妻のみやげに帰国の途
ともし火を求める火蛾の闇深し
なんとのお身体のだるき南風かな
身支度の仕上げひと振の香水
南風や無人駅舎を吹き抜ける
南吹く前途を案ずる米農家

自然 初花 保人 風湖 友夏 寛久 風花 笑風 郁子 祥子

板前の男を上ぐる祭鯉
板前に惚るる骨切り鰻料理
神戸大池句会 (神戸)
梅雨寒し用事は明日に延ばしけり
梅雨寒や蕎麦湯年中好まるる
円卓の会 (浦和)
舟還る極暑の浜の潮止り
実盛の心なぐさめ虫送り
直線にならぬ畦道虫送り
鍾乳洞をゆるりと巡る酷暑かな
極暑にも勝てる睡魔を飼ひにけり
夜半の夏擦り抜けられし非常線
天井の無き監獄をガザと呼ぶ
虫送り実盛のやつ佃煮に
農薬の無き夜懐かし虫送り
極暑なり脳天のメルトダウン

はるみ 佐江 千津子 早苗 卓郎 輝翠 京子 拓真 亮一 月を 鶴城

雛 の 会 (浦和)

夕風や時止まりしごと棒立つ木
板の間をべたべた大き素足あと
夏帯に合はす帯留海の色
歌舞伎座へ夏帯きゆつと締め上げて
黒板に注意交々夏休み
黒板の文字の癖字や夏期講習

道 建治郎 久美子 勲 マスミ 雅夫

チアキ 燈女 輝翠 公子 喜恵 桂子
色と艶選びて茄子を漬け込めり
波打際小さき跣足の燥ぎをり
漬け茄子の紫紺あざやか朝の膳
朝採りの茄子のまといし光かな
小走りで病廊を行く医師素足
浅漬の茄子の青さよ食すすむ

裕誌 富子 文子 あつ子 朋子 千重子

和歌山水明句会 (和歌山)

窓にまいまい古文書教室雨上がり
今年また約束のごと守宮くる
紀州路の傾ぐ祠に蝸牛
巢立鳥タイヤの空気入れる朝
鼻歌はうめき声なり蝸牛
功績を讀へパンダや雲の峰
夏草に負けじと老いを今生くる
雨音を消す数珠音やかたつむり

芙蓉句会 (浦和)

片蔭を拾ひて歩く蔵の町
片蔭に仏心か椅子一つ
炎昼や暗号のごと速記文字

水明熊谷句会 (熊谷)

交番に女うそぶくサングラス
サングラス文士気取りて夜の街へ
お家芸さすが鯖江のサングラス
悠久の昔を知るや旱星
サングラスサイドミラーに映る貌
茉莉花の夕闇白く匂ひけり
決別の涙を隠すサングラス
チーママが髪にジャスミン「ろくでなし」
緑蔭や日本水汲も波久礼かな

若楠句会 (浦和)

シェイクして注ぐマティーニ水中花
夏の山從へ出雲大社
赤松の林が始点夏の山
黙と言ふ不意の妖気や水中花
甘言に溺れてみたし水中花
水中花眠れぬ夜の独り言
巡業の上方歌舞伎汗しとど
夏の山ヘッドライトのつづら折り
息ひとつ孤独とちだめ水中花
上棟にいやさか祈る夏深し
夏の山カニ族の群黙歩せり

皐月の会 (浦和)

月見草富士に四つの登山口
遠雷や珈琲館の薄明り
絶筆は軸に四君子あいの風
掌中に玉虫居れば瑠璃光寺
旅の夜を招き入れたる月見草
玉虫の己が光に煌めけり
蝌蚪の会 (浦和)
夕立に追はれ駆け抜く名残ヶ原
温暖化ゲリラスコール街襲ふ
夕立や今日を流して明日は晴れ

和子 道子 千世子 満耶子 さわゑ 廼代 税子 仁子 美子 卓郎 風子 秀子 道男 忠女 燈子 栄子 徹平 茂子

風舎 京子 真由美 直子 葉子 弘子 鶴城 宏治 山菜 光代 珪子 曆文 さいち 更穂 夏野 幸子 ひさの

惚れ直す神輿をかつぐ夫の顔
夕立や追ひかけられてコンビニへ
江戸風鈴キラキラ揺れて人招く
門入れば風鈴の音の迎へけり
汗の浮く丸顔並ぶ土俵入り
夕立あとオペラのアリア歌ひ出す
村雨の太鼓矢倉を包みけり
炎天下来る貴婦人のすまし顔

芽吹句会 (浦和)

五百羅漢徳利かたむけ青葉風
北窓を竹林の風夏館
足場とれ外壁眩し夏館
街騒の遠退く山路夏館
避暑先の百味筆筒にくる地震
糠味噌へ昭和百年西瓜皮
庭池に月影揺るる夏館
夏の夜や午前三時の本墨打

たかなな俳句会 (川口)

山開き点呼の声の飴せり
生意気におふくろと呼び夏の夕
草細り天道虫は翅を割り
子の声のこだまの返る山開き
てんと虫可愛いねえと三歳児
山開きだましだましに両の膝

秀子 元美 ち子 風舎 札子 しるく 月を 宣子 千重子 修 富子 チアキ ひろこ 弘子 久美子 道を のり子 小麦 みち 義子 福美 鶴城

若 枝 句 会 (浦和)

青田には実りの予感ベダル漕ぐ
五年経つ旅立ちの夜も盛夏なり
青田波棚田の上の波頭
真夏の園光る涙に砂重し

貞代
みどり
しょうこ
泰子

柿 の 木 塾 (浦和)

海峡の漁火透かす青簾
終活はしないと決めて白玉食ぶ
鍋に浮く白玉までも取り逃す
青簾捲いて久しき客迎へ
坪庭に陶の蛙や青簾
白玉やホラー映画の帰り道
白玉つるり言葉ひとつを突つかへる

昇
かつ子
節代
章嘉
和葉
恵子
和子

山 茶 花 (浦和)

山道で驟雨に急ぎ木の下に
夕立晴駅ビル人を吐き出せり
りんどう俳句会 (浦和)

美江子
マスマ

緑蔭を出て来て己が影若し
緑蔭やいづこともなく水飴
緑蔭に笑みを残してゆく幼児
水中花籠の鳥にも似たるかな
すつぽりと古墳の尻が緑蔭に

君夫
順子
翔太
夕峰
徹雄

名画座の立て看板を夏の月
緑蔭にひらく新着育児本

新 樹 の 会 (浦和)

鉦太鼓音も途ざる日の盛
夕焼を潜りて帰る伝書鳩
早苗饗の伝統薄れ故郷かな
酒飲みは父祖より遺伝瓜きざむ
魂の宙に融けゆく日の盛

小 梅 の 会 (浦和)

端居して母の語りし妻のこと
ローカル線無人駅舎と月見草
鬼百合や車に日傘さしかくる
厨からトントントンと夕端居
真つ新な麻服スロウライフかな

俳句の手ほどき (岩槻)

背泳ぎに数へてをりぬ宵の星
泳ぎ来し心は既に回遊魚
思ひ出せぬ鍵番号や玉の汗
腕白が利根の奔流抜き手切る
晩照の島へと泳ぎゆく少年
引き波に足をとらるる海水浴
遊船や見てさへ妬ける番ひ鳥
浅瀬の海で大きな浮輪つかまる子

風子
卓郎

道雄
徹雄

鶴城
風子

進

恵子
隆然
隆文
道を

延昭

佐江

義子

翔太
幸代
桂子
美子

餓鬼大将がこれ見よがしに拔手する
遠泳を成し遂げ笑顔美少年
太刀を持つ老師気合の片拔手
さんざめく拔手妙手のある川面
番傘に寄り添ふ二人青時雨
番屋の中は暗くて広し玫瑰の花

め だ か 句 会 (浦和)

蟻地獄たつすいがーはいかんぜよ
遠花火消えて静もる捨て小舟
戦争は暗黒の日々蟻地獄
サンダルに映えるベディキユア花もやう
砲台の跡ある夏の無人島
あちこちのうきわ持ち上げ海丸し
白シャツを干して始まる良き一日
江ノ電のビーチパラソル花盛り
帆立井一味をかける地元味
縁の下静風にある蟻地獄
Hi may I help you? 日焼止
蟻地獄踏んでみやうか美しき砂
パンダかな水中眼鏡取り難し
珊瑚の会 (浦和)
土用あい灯台の灯が白白と
寝冷え子のへずくへずくする日ながかな
寝落ち子に寝冷えせぬかと花タオル

忠男
久美子
卓郎
知子
チアキ
かつ子

知子
道代
和子
六弦
尚己
美津子
章嘉
日出男
莊志
月を
はるみ
三茅

史代
広子
和子

金太郎掛け小さくなりし寝冷えの
土用あい瀬音高鳴るひとところ
土用あい波の攫ひし砂の城
沖見ゆる茶房を抜くる土用あい
寝冷子にいささか早き声変り
寝冷子の父の匂ひの枕抱く
額に当てる母の手払ふ寝冷えの子

蘭の会（浦和）

色道に戸惑ふ凡夫舟遊
鳳蝶ときをり人家覗きけり
風に乗り峠を越えむ鳳蝶
昼寝覚厨に母の声かとも
昼寝の子優しき風を送る母
深海をさ迷ふ最中昼寝覚め
将に此れ大の字となり昼寝の子
留守電の音も遠くに晝寝覚
鍵かける副理事長室昼寝かな
誘惑の眼差し絡む熱帯夜

和葉 かつ子 喜恵 マスミ 恵昇 節代
風子 夕峰 風舎 和子 伸子 さよ子 小麥 寿夫 月子 京子

今月のはてな？

蛭木（ひるぎ）
濫觴（らんしょう）
お朝事（あさじ）
禪庭花（ぜんていか）
水縹（みはなだ）
明認（めいにん）
口縁（こうえん）
舞妃蓮（まいひれん）
研北（けんぼく）
鼓虫（まいまい）
檜破子（ひわりこ）
桝（ずみ）の花
鳳蝶（あげはちょう）
剩（あま）りし
権瑞（こんずい）
波久礼（はくれ）
蝶蜋（いもり）
楽車（だんじり）

頁 15 28 29 51 ♪ 52 99 102 104 110 113 114 129 140 153 155 158 162

通信添削指導のご案内

季音同人を除く水明会員を対象に、通信添削指導を実施しています。
希望者は、下記により作品を送って下さい。 主宰 山本鬼之介

【指導者】 網野月を 【作 品】 5句 【受講料】 1,000円

【方 法】 ①用紙自由 ②住所・氏名・電話番号を明記 ③110円切手を同封 ④返信用封筒は 不要 ⑤締切なしで随時受付

【送付先】 網野月を 電話 080-7580-0208

〒338-0012 さいたま市中央区大戸 1-31-2

『俳壇』

令和七年八月号

懐旧のふる里

山本鬼之介

〔水明〕

奉安殿ありし母校や里桜

釣れたるは蝶蜋ばかりよ名無し沼

村里二つ越して鎮守の秋祭

罇に貫禄さすが本家の鏡餅

深沓の大人が前を通学路

今回与えられたテーマ「俳人それぞれの戦争と平和」とはかなり焦点がずれるが、僅かながら彼の大戦の戦前を体験している身として、街いの無いことを書いてみたいと思う。

昭和二十年三月十日の東京大空襲の直前、私が数えて七歳の時、一家は父と祖母の郷里である福井県の若狭へ疎開した。父は終生「水明」に身を置いた山本嵯迷（幼少期に澤本家から山本家へ養子に入った）で、父の実兄であり「水明」の創刊から興隆期に全力を注いだ澤本知水一家と仲良く一緒に疎開で、その中に、後に長谷川かな女の亡き後「水明」の二代目主宰を継いだ秋子も一緒であった。東海道本線の乗換え駅米原で、その年の四月に入学する私のために、親が苦心して用意してくれた学用品の入ったランドセルを自ら置き忘れるという大失策をしでかし、皆暗い面持ちの疎開旅であった。

福井県遠敷郡鳥羽村黒田本家（江戸時代に小浜藩の藩主酒井候より苗字帯刀を許された庄屋の裔）澤本隆三宅（知水と嵯迷の実兄）に十日ほど居候した両家の家族は、それぞれ幹旋してもらった近在の住まいへ移ったが、別れ際に、秋子が昔使っていたランドセルを本人から手渡された。本草で蓋の面に赤と黄のチューリップが描かれた豪華な逸品であったが、男児としては受け入れ難く、仕方なく親が花柄を削り取ってしまった。そのまま所有しておれば、今では凄なお宝になっていたと残念に思っている。

同年四月、鳥羽村の国民小学校に入学し、サイレンが鳴って学校の裏山へ二、三度避難した程度で八月の終戦を迎えた。以後四年生の一学期まで若狭に居住し、四季折々の自然の中に没入し、ひ弱な都会っ子から大変身して数多くの貴重な体験をすることができた。今もなお若狭が我が故郷である。当時自分を村の悪童から守ってくれた森下君は、後年に修験道の大先達となり、今も酒を友にして健在であると聞いている。

『俳壇』

七月号

花の声

小林京子

〔水明〕



小林京子（こばやし・きょうこ）

昭和29年埼玉県生まれ

令和3年「水明」入会、令和4年「水明」同人

令和5年「新珠賞」受賞

水明常任運営幹事

現代俳句協会GHOCセンター委員

埼玉県現代俳句協会理事

一心に咲きて堇となりにけり

リラの花いついづまでも夢を見る

乙女椿の落ちて明るし庭の隅

青柳「性別」欄は「任意」なり

鈴蘭のブーケトス見失ふ空

葉桜並木人影のうすみどり

夜のジャスミン星くづを輝かせ

◆作句信条

季語の力を信じて、十七音の詩の世界に遊び、「現代の俳句」を考え続けていきたい。

水明夏行

青木鶴城

第一日（七月二十九日）

異常な酷暑が続く七月の末、恒例の夏行が開催され、第一日は三十五名が参加、席題の「夏草」詠込みの「逆」で三句の投句を競いました。一日目の結果は以下の通り。

主宰詠

夏草に全てをあづけ斬られ役
逆磔^{さかづつけ}にしたき彼奴^{あやつ}よ夏怒譚

夏草や新國劇はりアリズム

主宰選

青草や反芻はげむ牛の黙

天文学は反逆なるぞ灯蛾狂ふ

夏草美しそぞろ歩きの水坂

夏草や両手に掬ふ沢の水

夏草や一山蜂起の弾の痕

延昭

喜恵

〃

昇

夏草や古城の柵の流し旗

天井を逆さに歩く油虫

逆さまつげにうるむ瞳や薄衣

夏草や馬塞を蹴倒す暴れ馬

サン格拉斯令和に欲しき反逆児

逆数も関数もあり夏期講座

特 一匹だに逆走のなき蟻の列

逆臣の墓や落蟬宙あがく

夏草を金属音がなぎ倒す

廃校の給食堂や夏の草

特 夏草や継ぐものの無き我が生家

逆縁の墓に捧ぐる百日紅

夏草に包囲されたる鎮魂碑

地 夏草や嘗てこの地に大本営

草野球の球をすつばり夏の草

湾の門めきし灯台夏の草

夏草や風より生れしごと駆けて

夏草やむさばるやうに廃屋飲む

夏草の根元に潜む錆びレール

特 「いざ鎌倉」のくけ路に生ふる夏の草

あやとりはまづ逆さ富士夏休み

夏草や鎌を片手に見やる富士

夏草やガキ大将の基地の跡

夏草の中の峰なり昼餉とる

昇

直子

〃

風子

〃

京子

〃

稀香

〃

更穂

〃

修

〃

道を

マスマ

節代

ひろこ

真理

和

卓郎

弘子

徹雄

鶴城

以上特選

風舎

夏草や風に吹かれて征つたきり

逆縁の永久に少年夏の雲

詰将棋逆転勝ちで西瓜食む

夏草や雑草魂蓄へて

夏草や吾がもの顔に庭占領

逆光を避くるアマチュアはいチーズ

夏草や人にも鳥にも愛語あり

虹の橋むかし得意の逆上り

終戦日ラジオ逆さに置きたしと

照り映ゆる風死す湖に逆さ富士

夏草の茫茫たるや父祖の塚

他人事と思へぬ逆走大暑かな

無人駅 *suba* 翳せば夏の草

逆立つや火の粉に耐ゆる筒花火

夏空へ逆転劇のホームラン

逆しまの守宮を窓に鳥の朝

朝まだき夏草を取る野菜畑

朝焼けの雲海に消ゆ逆さ富士

夏草や野球親父の打球追ふ

逆浪の先に燈台百日紅

夏草やくびれゆたかに稚の四肢

夏草に結ぶるしの赤き糸

夏草や日本の未来ここにあり

あと一球逆境の児の甲子園

逆流の命の躍動鮎の反り

稀香

かつ子

章嘉

久美子

桂子

節代

更穂

ひろこ

卓郎

延昭

道を

弘子

喜恵

ひさの

昇

美智枝

美子

真由美

風子

徹雄

京子

修

輝翠

マスマ

互選による高得点順位

一位	日高道を	二位	皆川更穂
三位	染谷風子	四位	石井喜恵
五位	本橋稀香	六位	梅澤輝翠
七位	岡田宣子	八位	宮崎チアキ

第三日（七月三十一日）

カムチャッカ半島付近の大地震による津波警報が出る中三四名が集い三日目が開催された。席題は「祭」と詠込み「前」

主宰詠

女振りぐつと上げたる祭髪

前進の果ては薦進雲の峰

明日への力充ち宵宮の鉦の影

主宰選

手古舞の粹に始まる夏祭

下戸二人神酒所を守る夏祭

前の子の日向くささよ菅貫よ

夜も更けて音も淋しき祭鉦

特楽車の垂木をばらす祭あと

前立てに風糸掛くる兜虫

特前穂高別れ惜しむや稚児車

親父曳く山車に太鼓を打つ少女

特波しぶき上げて勇まし祭船

昇	かつ子	月を	夏野	鶴城
---	-----	----	----	----

——以上特選

宮入の山車を迎ふる巫女の紅	道を
花笠の花を取り合ふ祭りかな	章嘉
祭笛八十路の脚が跳ねていく	延昭
鼻茎 ^{はなむね} の化粧一筋まつりの子	卓郎
籐椅子と一体で聞く祭り太鼓	ひろこ
祭器庫へ戻りながらぬ神輿かな	徹雄
江戸前の海を眼下に穴子めし	昇
大宮のサンバ踊りや夏祭	美子
前口上の長き乾杯夏の夕	節代
大西日区役所前に不発弾	更穂
宵宮に里の子揃ふ撥搦き	はるみ
おくれ毛の頃くすぐる祭髪	喜恵
神田祭 ^{かみ} 俵な女子が風を切る	かつ子
四分の二拍手サンバ夏祭	桂子
ビール手に粹な前掛け「はいお待ち」	真理
前栽は肥後の六花の花菖蒲	マスミ
前衛画家のモヒカン頭日の盛	風子
夏休み試験の前の息子達	美紗子
子ら燥ぎ露店へ駆くる夏祭	公子
停戦の前後策練る夏最中	チアキ
わつしよいと子供神輿は通学路	ひさの
前世は清少納言凌霄の花	夏野
祭提燈街のあちこち風にゆれ	美智枝
砂灼けり前足長きスフィックス	京子

前脚をさすりさすりて馬冷す	輝翠
打水を道路前後に浴びさせし	久美子
宵宮や再配達待つ留守の番	月を
懐かしき人に逢ひたる宵祭	修
前進の野手が後逸夏野原	徹平
競ひ合ふ祭囃子に喝采す	宣子
前は壁夏いざロッククライミング	楽
祭髪父に抱かれて眠りこけ	稀香
炎昼や前頭葉の融けてゆく	鶴城

互選による高得点順位

一位	五明	昇	二位	小林京子
三位	菅原卓郎		四位	染谷風子
五位	青木鶴城		六位	前田夏野
七位	大村節代		八位	石山かつ子

三日間を通しての主宰選
句の上に天、地、人、特と表示

天、地、人、の三極には主宰より色紙が、超特選には短冊が授与されました。受賞の皆様おめでとうございました。また、三日間皆勤の二十七名にサートイーワンのアイスクリーム券が贈られました。

水明競詠

(令和七年)

恒例の季音・水明全員が対象の水明競詠です。ふるってご投句下さい。
掲載は十二月号になります。

兼 題

「夜長」

「夜永」「長き夜」「長夜」の傍題に限る

「唐辛子」

「たうがらし」「鷹の爪」「ピーマン」「南蛮」の傍題に限る

「京」

(詠み込み) ※秋の季語で詠む

句 数

三題通じて五句

締 切

十月十日 (締め切り日を変更しました)

投句用紙

九・十月合併号巻末に添付

※ 時間が変更となりました 「りんどう忌」のご案内

【日 時】 2025年10月25日（土曜日） 午前11時受付

【会 場】 さいたま共済会館 501号室、502号室

【投句締切】 午前11時30分

【兼題・投句】 投句：2句 兼題：「かな女忌（かな女の忌、りんどう忌）」

「色鳥（傍題なし）」

【会 費】 1,000円（昼食はありません。飲み物は各自ご持参下さい）

【申し込み】 8月号の巻末に添付の申込書に会費を添えて、
10月15日までに発行所総務へお申し込み下さい。
※申し込みの無い方の入場は原則として出来ません。

※状況により予定を変更する場合があります。

◎りんどう忌の参加者で、今年（令和7年1月～12月）に**米寿**（満88歳）又は**喜寿**（満77歳）を迎えられる方には記念品を贈呈致します。

事業部

俳句と随想12か月 安田のぶ子・矢野景一	連載 季節の移ろい……二十四節気……石井いさお 俳人の住む町……若井新一・中西夕紀 編集室の風景……樹氷俳句会 俳諧文法への招待……仁平 勝 二度目の俳句入門……長谷川 權 知つてるようで知らない俳句用語……井上泰至 今月の句……好日俳句会	特別作品50句……今瀬剛一 四季巡詠33句【第Ⅳ期】……朝妻 力・村上喜代子	俳壇 10月号 9月14日発売 定価1000円（税込） 巻頭エッセイ 横澤放川 八木健造 滑稽俳壇	高崎公久・岩城久治・向田貴子 渡井恵子・江崎紀和子・佐怒賀直美 木暮陶句郎・原 朝子	特集 集 天空讃歌——十二星座の俳人たち 巻頭作品10句
	本阿弥書店 〒101-0064 東京都千代田区神田猿樂町2-1-8 三恵ビル 電話03（3294）7068 振替00100-5-164430				

水明発展基金御礼(敬称略)

— 令和七年七月三十一日現在 —

永野 史代	20	口	石 井 喜 恵	1	口
渋谷きいち	3	口	梅 澤 輝 翠	2	口
森本 早苗	10	口	菅 原 卓 郎	1	口
松井由紀子	8	口	西 幅 公 子	2	口
町野 広子	5	口	反 町 修	2	口
池田 雅 夫	8	口	曲 淵 徹 雄	2	口
飛 永 鼓	1	口	清 水 桂 子	2	口
夏行より			皆 川 更 穂	1	口
丸山マスマ	3	口	菅 原 真 理	1	口
日高道を	2	口	秋 谷 風 舎	2	口
染谷 風子	1	口	岡 田 宣 子	1	口
綿貫ひさの	1	口	保 坂 翔 太	3	口
河野はるみ	2	口			
— 合計 84 口 —					

水明通信

さいたま市 榎 本 道 代

最近、俳句を始めてから人との交流の輪が広がりました。

私が住む地域内にある公民館でも句会が毎月1回開催されています。

7月の兼題は、「夏野菜」。近所の友人からお裾分けして頂いた「茄子」や「トマト」を十七文字に詠み、句会は盛り上がりしました。

人間は、一人では生きていけません。その土地その土地に住む人々に支えられ、守られて安心安全な暮らしが成り立っています。

その一方で、事実に基づかないフェイクニュースの拡散や特殊詐欺が横行するなど、物騒な世の中になりました。

俳句仲間との交流が、悪質な社会問題などから身を守る一助になれば、と願うこの頃です。

店に無い挽ぎたて胡瓜花付きで

「水明通信」欄へ、身近な出来事等を、ふるってお寄せ下さい。

風 声

○俳句四季七月号——「俳句へのまなざし」欄

大西朋氏による鑑賞

池の辺に潜望鏡のごと海芋

鬼之介

〔「俳句四季」五月号より〕

「潜望鏡」とは潜水艦が潜航中に海面上に出して偵察に使うものだが、確かに言われてみれば海芋の先の曲がり具合が、似ていなくもない。池の辺で揺れながら、我々や池の面を觀察しているのかもしれない。

○現代俳句七月号——「第二回現代俳句『風を詠む』」欄

玉葱や十五の涙俎板に

梅澤輝翠

居眠りの海馬覚めをる酷暑かな

篠崎紀子

ゆふぐれはホルンを鳴らすかたつむり

永野史代

二杯目の珈琲梅雨の喫茶店

檜鼻ことは

○藍（花谷清主宰）七月号——「俳句月評」欄

近藤詩寿代氏による鑑賞で

からくりの茶坊主びたと春の昼

鬼之介

〔「俳句四季」四月号「巻頭句」より〕

（からくり）はからくり人形のこと。機構を持ち、糸や手で操作される。座敷からくり、山車からくり等いろいろな種類がある。その動きは、神戸人形のように台に固定された人形が太鼓をたたいたり西瓜をたたいたりするものや、人形自体が動き回るものがある。掲句の《茶坊主》は、「茶運び人形」と呼ばれ、茶を入れた茶碗を人形が客に運び飲み終わった茶碗をまた元へ運ぶ。そのパントマイムやロボットのようなくぎこちない動きが愛らしく微笑ましい。（びたと）といい留めたことでよりイメージが広がる。作者は穏やかな春のひとつ日（からくり）に癒されたのだ。

○くちら（中尾公彦主宰）七月号——「受贈俳誌美術館」欄

水平線に船を繰り出す南風

鬼之介

○幻（西谷剛周主宰）七月号——「受贈誌拝見」欄

襟元にときめき秘めて春の服

鬼之介

○こんちえると（関根道豊版元）七月号——「受贈誌紙お礼」欄

「水明」七月号から

月涼しアイヌ民族衣裳館

捌かるるときも目をあけ桜鯛

画学生らの絶筆抱く夏木立

巨漢なる老舗三代目新茶汲む

花粉症祖母のこれから話し合ふ

○雪嶺（石本雪鬼主宰） 七・八・九月号——「受贈誌」欄

裸木やその名を誇る樹の名札

しで紐をほどく指先春寒し

鬼之介

○対岸（今瀬剛一主宰） 七月号——「結社誌を訪ねて」欄

中原修子氏の鑑賞により

さよならが両手に残る余寒の日

鈴木康世

俳句を鑑賞させていただく時に、作者の年齢や経歴などを調べるべきだという考えもありますが、どんな方の作品であれ、その方の手を離れた後は、俳句は自由に味わえるものと考えています。予備知識や先入観なしで作品を味わわせていただくことも大事だと考えます。

この作品の伝える別れというものは作者にとって重いもの

鬼之介

栢尾さく子

梅澤佐江

清水桂子

吉川拓真

だったようです。力いっぱい両手で相手を抱きしめて別れたのか、千切れるほど両手を振って別れたのか、あるいは亡くなった方の棺を運んだのか、いずれにしろ「さよなら」がまだ両手に残っているという詩的な表現が強く心に迫ってきます。立春も過ぎ暦の上では春であるにもかかわらず、風はまだ冷たく冬の名残が残っている余寒の中に、熱く別れた「さよなら」が両手に、そして全身に残っているのです。

辛い別れのあとの放心までも感じさせてくれる作品で、俳誌「水明」の「今月の巻頭句」の第一作品です。

○玉梓（名村早智子主宰） 七・八月号——「他誌拝見」欄

二胡に添ふ猛き尺八別れ霜

鬼之介

○菜の花（伊藤政美主宰） 七月号——「諸家近詠」欄

春雷に念を押さるる戻り道

鬼之介

○飴（山本一步主宰） 七月号——「受贈誌の一句」欄

春だより万年筆の太字もて

阿部幸代

黄水仙遙かに白帆沖を行く

岡田宣子

（日高道を抄出）

後記

九月・十月合併号をお届けします。

一口に九五周年と申しますが、昭和五年長谷川かな女初代主宰が水明を創刊されてから、現在の山本鬼之介五代主宰まで連綿と続いております。俳句の結社は数多ありますが、これだけ長く続いている結社は少ないので、会員皆で結束して、百周年いやその先を目指して、歩んで頂きたいと思っています。

本号では、全会員の「水・明」二句、主宰はじめ会員の特別句・随想、九十五周年記念の応募作品・俳句、正賞、準賞。エッセイ正賞、準賞。評論準賞の全文を掲載しました。また、水明年譜は、あえて九十五年間の水明の歴史を全部掲載しました。これからまた、百周年に向かって、新たな一歩です。

今年の夏は本当に暑かったですね。新聞にも連日「酷暑」「炎暑」の文字が踊りました。もつと暑い表

現は？「極暑」「激暑」だそうですが、字面だけでも暑いですね。

年々暑くなっている原因は地球温暖化と人間の活動で増えた二酸化炭素や緑地減少等々、なかなか涼しい夏は難しいようです。今年もいつまでも暑く、コロナはじめる多くの感染症が流行っています。全国大会では、皆様の全国大会応募句の天・地・人・特選句等の発表がありますので、どうぞお氣をつけて、お出かけ下さいませ。

(節代)

水明発行所受付時間

(048-822-4741)

曜日：(月・火・水・木・金)

時間：12時半～午後4時半

(土・日・祭日は休み)

水明の行事と重なった時は休み

(上記の時間には係がおりますので、
ご用の方は 時間内をお願いします。)

新誌友紹介 下記の方が入会を希望していますので、見本誌をお送りください

住所	〒 -		
氏名		電話番号	- -

水明

令和七年九・十月号
通巻一四〇号・一一四一号
令和七年十月一日発行

発行所 水明俳句会

〒330-0064 さいたま市浦和区摩西一〇二二
電話 048-822-4741

ホームページ

「水明俳句会」で検索

誌代 半年分 六、〇〇〇円

一年分 一二、〇〇〇円

同人費 (誌代を含む)

一年分 二四、〇〇〇円

季音同人費 (誌代を含む)

一年分 三〇、〇〇〇円

振替〇〇一七〇一〇一九三九三

発行人 山本鬼之介

印刷所 中央美版

きりとりせん

十二月号
十月十日締切

都・市・町・名	都 市 町
氏 名 (俳 号)	姓 名

この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。

旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

[illegible]

住所〒

氏名

年齡

季音 雪・月・花

十二月号 十月十五日締切

※雪・月・花の該当欄を赤丸で囲む事

氏 名 (俳 号)

題

最上部の枠から間を開けずに楷書で丁寧にお書きください。

(注意)

この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名つかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

連絡先 (電話番号)

氏名 (本名)

年齢

歳

きりとりせん

十二月号 十月十五日締切

都・市・町名	氏名(番号)
都市町	

[illegible]

この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。

旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

氏名（本名）

歲

さ・り・と・り・せ・ん

山紫集

十二月号 十月十五日締切

氏名(併号)

十二月の兼題

「秋の潮」(傍題可)

投句対象者 同人及び季音同人「花欄」「月欄」

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

※最上部の枠から間を開けずに楷書でお書きください。

(注意) この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。

旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

連絡先(電話番号)

氏名(本名)

年齢

歳

季 音 抄

山本鬼之介

鰻食ぶ「う」の一文字の藍暖簾
尺玉や月の在り処を照りつくし
あぢさゐや納屋に貼られし祖父の護符
提灯に屋号の絵文字夏祭
熱帯夜テレビ機敷は二十五度
月見草群れ咲き遙か雲ヶ峰
雲の峰はるか昭和の大家族
石庭の海を満たして大夕焼
鵜簞の終へて川面の暗となる
泳ぎ来し心は既に回遊魚
緑蔭やいづこともなく水蓂
朝焼は母よ夕焼は父の色
夏帯に合はす帯留海の色
緑蔭の椅子に風待つ小半時
黒南風や朽ち行く沖の軍艦島
緑蔭を出で来て己が影若し
夜会の誘ひ土手の群落月見草
サングラス文士気取りて夜の街へ

町野広子
松井由紀子
茂木和子
森川義子
森本早苗
山中みどり
大塚茂子
丸山マシミ
松宮保人
梅澤佐江
大場順子
正木萬蝶
梅澤輝翠
越田栄子
保坂翔太
横山君夫
渋谷さいち
染谷風子

次の原稿を募ります。随時発行
所宛、ふるってお寄せください。
なお掲載については、編集部にお
任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽
に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内
(句に雑誌名、句集名、刊行月
を付す)

▼散歩道へ身辺トピック▼

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起
きた面白い話題、めずらしい経験
などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内
(題をつけて)

▼山紫水明へ随筆▼

テーマ…自由

枚数…二百字詰原稿用紙五枚半

以内

水 明 抄

山本鬼之介

産土の川面に映す夏帽子
蜘蛛の囀の破れ山河の風が抜く
鴨川や白鷺とゐる夕涼み
簾寝椅子名の星探す山の宿
梅雨茸恨み節でもうなりさう
老鶯の森を響動もす谷渡り
妃殿下のみどり基調の植樹祭
葉桜の小暗き小径染工房
槍投げて白線踏んでゐる溽暑
湯上がりの裸御免の缶ビール
夏の日や洛中洛外図に見入る
蜘蛛の巣をうわつと被る掃除かな
異国語の飛び交ふ朱夏の抹茶カフェ
干草に思ひ出よぎる父と牛
ぬひぐるみ手繋ぎ干され五月晴
黒南風やぶらんこひとつゆれてをり
命名の墨のにほひや青嵐
レース編む家族の好きな花柄で

皆川更穂
小林京子
寺町知子
岡田宣子
菅原真理
反町修
霜多光代
阿部幸代
森下山菜
本橋稀香
丸屋詠子
倉田星歩
元田亮一
岡本祥子
田中弘子
飯田忠男
石関六弦
綿引まりこ

水 明 例 会 案 内	句 会 名	日 時	会 場	指 導 者	幹 事
	第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	茂木和子 小林京子
	第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	山中みどり 青木鶴城
	第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五明昇 曲淵徹雄
	第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	石井喜恵 反町恵修
	第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤佐江 河野はるみ
	若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	正木萬蝶 石田慶子
	関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化(セ)	大橋勉代	森本早苗